

---

# 死神ハニートラップ

河野 蒼空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神ハニートラップ

### 【Nコード】

N3601M

### 【作者名】

河野 蒼空

### 【あらすじ】

「俺と契約しろ」  
それは突然やってきた。見た目超然美少女の帝（ ）の正体は死神。そしてその帝に、いたって普通の人間のはずの光矢は振り回される。神や天使を敵に回す帝と契約を申し込まれる光矢は言った。「お前が女になるなら」と。少しアブナイ雰囲気が漂う、新感覚現代ファンタジー。

## 第一章・甘い蜜の罠

例えば。あくまで例えばの話だが。

「俺と契約しろ　鈴木光矢」

そんなことを言う美少女が目の前に現れたら、一般的な高校男児ならどうするのだろう。

何の契約なのかも分からないし、どんなリスクがあるのかも分からない。

ただ分かっているのは、目の前のこの少女が、かなりの美貌の持ち主であることだけだ。

蛍光灯の灯りに照らされて光っている短い黒髪。どこか妖艶な煌めきを放つ漆黒の瞳。毛穴一つ見当たらない白い肌に、細くて長い手足。

結論から言えば、人間とは思えないほどの美少女だった。

そんな美少女が「契約しろ」と言ってきたなら、普通の男なら言う通りにするだろう。

「……………一つ、聞いてもいいかな」

「いいよ」

しかし光矢は少女の顔をまじまじと見つめて質問する。

彼にとって、一番大事な質問だ。

彼の彼女基準には、どんなに容姿が優れていたとしても、どんなにスタイルが良くても、謙れないことがあった。

「あのさ…………」

そこで光矢は口を開き、少女を上から下まで見つめる。

輝く美貌。スタイル抜群な華奢な体。

それを見つめてから、光矢は一つうなずく。そして少女に視線を戻してから、その『疑問』を口にした。

「君……………本当に男の子なの？」  
この瞬間から、光矢はこの美少女ではなく、美少年に惹かれていたのかもしれない。

## 罣にかかった平凡人間

「ちょ、光矢！ 早く来い！」

そんな叫び声が聞こえて。

それに、鈴木光矢はため息をついた。

茶色に染められた髪に、眠そうに緩んだ黒い瞳。中肉中背というよりは、ほんの少しだけ細身の体。ダルそうに脱力した顔は、枕に埋もれている。

彼は今、毛布にくるまっていた。つまりまだ布団の中である。先ほどまで夢の世界にいた彼は、一階から聞こえた叫び声によって現実世界へと引き戻された。

顔を枕から上げて、壁にかかっている時計を見る。午前八時を示す時計の短針。

完全に、遅刻確定の時間だった。

しかしそれに光矢は、いたって落ち着いて もとい、完全に諦めて もぞもぞと起き上がる。彼にとって遅刻は日常茶飯事であり、驚くに値しないことであつた。

「うわぁ……」

立ち上がって改めて見ると、とんでもなく汚い部屋だ。

そこら辺に缶ジュースの空になったものは転がっているし、その横にはレポートの紙切れが散らばっている。

それを見て光矢は何かを言おうと口を開きかけるが、もう今更なに言っても無駄な気がするので、何も言わない。すると。

「光矢あああ！？ 早く早く早く!!」

と、また悲鳴が聞こえた。

しかしそんなことも日常茶飯事なため、光矢はやはり落ち着いて、

「はいはい」

と言って部屋のドアを開け、外に出る。  
階段を下りる。

築二十年とかいう家の階段が悲鳴を上げるようにギシギシ鳴るが、  
あえて無視して、彼は階段を下りていく。

そしてリビングのドアを、開けた。

「うわっ」

その瞬間、光矢は思わずそんな声を上げて咳き込んだ。  
リビングでは、黒い煙が部屋の中に充満していたのだ。

一瞬、火事か、という考えが彼の頭をよぎったがすぐにその考え  
は否定される。

「あ、おはよう光矢！ んでもって助ける！」

なぜなら煙の中で、一人の同居人がリビングのキッチンから手を  
振っていたからだ。

その同居人を一言で表すなら 美少女。

短い黒髪は後ろでくくっていて、雀の尻尾みたいになっている。

その髪によく合う、どこか妖艶な大きな黒目。きめ細かい白い肌に、  
細身の身体。

その可愛いらしい、しかしどこか妖しい雰囲気的美少女は、今は  
エプロンを着込み、左手にはフライ返しが握られている。

その絶世の美少女に向かって、光矢は、

「ああ、おはよう帝」

と声をかけた。

美少女の名前は際川帝。さいがわみかど

その帝が、

「なあなあ、何で『めだまやき』ってやつを作ろうとしただけで、  
フライパンが爆発すんだ？」

「こつちが聞きたいわアホ！ ていうか俺のフライパンを爆発させ  
んなよ！」

「アホじゃないもん！ しょうがないじゃん！」

と帝はふくれっ面をして言う。

美少女がふくれっ面をしてこちらを上目使いで睨んでくる　という姿は、まあまあ可愛らしいものだったのが、光矢はそんなものはお構いなしと言った感じで、

「お前、出来ないなら作らなくていいのに」

とため息をつき、リビングの窓を少し開ける。

すると黒い煙が徐々に消えていく。やっと新鮮な空気が吸える、とばかりに光矢は大きく深呼吸する。

そんな光矢を見ながら帝が、

「だってやり方分からなかったんだもん。俺『めだまやき』作ったことないから」

と言つて、ますます不満気な顔になる。

頬をフグよろしく膨らませ、明らかに不機嫌な黒目をこちらに向けてくる。

『俺』。この少女は、自分のことを俺と言った。

それに光矢は思わず苦笑いしそうになる。

……………そう。

この超絶美少女　際川帝は、実は男なのだ。

これを知った時、光矢はショックで立ち直れないほどだったが、もう知ってしまった後なので驚かない。

ただ彼は苦笑して、

「……………すげえ見た目は可愛いのになあ、お前」

と呟いた。

すると光矢の呟きが聞こえたのか、帝が振り返ってくる。そしてニヤリと笑みを浮かべ、

「だから言ってるじゃん。《契約》したらいつか女になってあげるって」

「でも契約したら人間じゃなくなるんだろ？　…………お前みたいに」

「うん」

「なら、やだ」

と光矢は言つて肩をすくめる。

すると帝はつまらなさそうな顔になる。頬を膨らませて、

「ああやだやだ。これだから人間は。思い切りが悪いのが人間の特徴だよな」

と首を振りながら言う。

それはまるで自分は人間ではない、とでもいいかげんな様子だった。それに光矢は肩をすくめ、まあ実際に人間じゃないんだけど、と心の中で呟く。彼　帝は人間ではない邪な存在なのだから。

しかし光矢がそんな事を考えていることなど知らない帝は、変形している上に黒こげになっている、もはや何がなんなのか分からないフライパンを掲げて、

「これどうすればいいの？」

と真顔で聞いてきた。

そんな、ある意味シニールという言葉とは無縁そうな光景に光矢は、本日何度目か分からないため息をついてから、

「ああ、もうそれはいいから。お前は納豆でも食つてろ」

「ナットウ？　なにになにそれ、おいしいの！？　人間の食べ物！？」

「ああ、多分な」

と光矢は適当にうなずき、冷凍庫の中から納豆を取り出し、レンジに入れる。『解凍』のボタンを押す。

さらにジャーに入っているご飯をよそい、帝の前に置く。

それに帝は不思議そうな顔をしてこちらを見上げてきて、

「ねえねえ、学校は？」

「遅刻する」

「うわ、諦め宣言かよ。だらしねえなあ。もし良かったら俺が、時間戻してやろうか？」

そう帝が言う。それに光矢は驚いたような顔をして、帝の顔をまじまじと見つめる。

「出来るのか？」

「……………まっさかあ。俺は命を《管理》するだけで、その他は全



くいじれないんだよ。ましてや時をいじるなんて、さ」

信じるなんて光矢は可愛いね、と帝は愉快そうにケラケラ笑う。その言葉に光矢は、こいつ騙しやがったな、と心の中で毒づく、納豆をレンジから取り出す。そして帝の前へ、若干乱暴に置く。

その納豆を不思議そうに見ている帝に、光矢は、  
「早く食べるよ。一時間目終わったら、さくさくつと合流しちゃうからさ」

「二時間目から登校？ 不良だねえ」

「うるさい、黙っとけ」

そう光矢は返す。

すると帝は、およそ男は 　　というか人間は 　　醸し出せないような妖艶な雰囲気、の笑みを浮かべる。口端を吊り上げて微笑みながら、

「《死神》の俺に向かつて、たかが人間のお前が口答え？」  
と言う。

それに光矢は何かを言い返そうと口を開きかけるが、人間ではない彼を敵に回すと色々怖いので、黙っておく。

すると帝は、机の上に置かれた納豆をほおばり始める。あ、これ意外と美味しい、とか呟いてから、こちらを見つめてくる。

「なあなあー。何で契約しないんだよー」

「つて、お前はその契約とやらをしたいのかよ？」

「そりゃしたいね。仲間しにかみが増えるだろ？」

「寂しがりつてか？」

「ま、そんなところだ」

と帝はあっさりうなずき、また納豆をほおばる。ネバネバするのが面白いのか、無駄に箸で納豆をかき混ぜている。

それを見てから光矢も、自分の納豆を食べ始める。

しばらくの沈黙が漂う。

たまにもぐもぐという、帝のご飯を食べる音が響いているが、それ以上は何も聞こえない。

黒髪の美少女と朝ご飯を共にする　という、端から見れば幸せそうな風景だが、実際にはこの美少女、いや美少年に脅されているのが事実だ。

「ごちそうさん」

ふいに帝が、最後のご飯粒を食べ終わり、立ち上がる。  
どうやら着替えてくるつもりなのだろう。

片付けもしない帝に思わず光矢はため息をついて、急いでご飯をかきこむ。

見た目だけは可愛いらしい化け物と同棲してるなんてこの二流漫画に出てくる話だ、と光矢は思う。よく男性向け雑誌に出てきそうなシチュエーションだ。ただ光矢の場合は、その可愛いらしい化け物が男だというオマケ付きだが。

と、光矢が訳の分からない考えに染まっていた、その時。

「光矢も早く着替えなよ」

という声が、後ろからした。

それに光矢は、声の方をチラッと見る。

そこには、帝がいた。

ただし、その格好は少し変わっている。

髪は下ろし、肩につくかつかないかの長さに戻っている。

そして何故か……女用のセーラー服を身に纏っていた。

たにしの谷志野学園の、結構可愛いと言われている、セーラー服のリボンとブレザーが合わさったような特殊な服を身につけていた。黒いスカートがひらひらと揺れている。

その姿は、完璧完全に女だった。

「……………」

そうなのだ。

男だったというショックの次に衝撃が大きかったのは、彼　　際  
川帝は、女装をしているということだった。

光矢はげんなりとため息をついて、

「お前、人間の常識考えたことないだろ」

「あるわけがない！」

「……………だよねえ」

と納得したように光矢はうなずく。

そして自分も制服に着替えながら、

「お前、気を付けろよ」

「何が？」

「いや、その、谷志野の偏差値は高い訳じゃないから、頭が馬鹿な奴とかいるじゃん」

「ふむ？」

「……………でさ、お前見た目だけはずい可愛いんだからさ、その、ご、強姦とか気を付けろよな。最近多いからさ」

と光矢は若干どもりながら言う。まだ経験もない彼にとって、その一言を言うのはたいへん勇気のいることだったのだが。

「へえ？ 光矢、俺のこと心配してくれてんだ？」

と、帝はあっさりと言って光矢の方を見つめる。

それから、男とは到底思えない、妖しい笑みを浮かべて、

「まあ、人間なんかに襲われることはないと思うけど……………。でも俺の中じゃ……………ていうか、死神の中じゃ、『それ』は神聖な儀式ってことになってるから、問題ないんだけどね？」

と言った。

彼が指す、『それ』の意味が分かったため、光矢は若干顔を赤くしながら、

「いや、そのお」

「あ、光矢もやりたいならやっていいよ？ まあ、俺は男だけどね」

「違あああああう！？」

そう光矢は叫び、帝の言葉を止める。

すると帝は、がらりと口調を変え、まるで女の子のような声で、

「きゃっ！ 光矢クンのエッチ！」

「うぜええええ！ 朝っぱらから変な話題を持ちかけるな！」

「なーんで？ 最初に強姦ーって叫んでたの光矢じゃ」

「叫んでねええってか俺のせい!? 俺のせいなの!？」と光

矢は叫び、ぜえはあと肩で息をする。

帝はそれにあははと楽しげに笑ってから、通校鞆を手に取り振り返ってくる。

「ほらほら遅刻だよ。急がないと」

とか、言う。

そんな常識的な、本当にもっともな言葉に。

光矢は。

「……っていうか、お前だけには言われたくねええええ！」  
と本日一番の絶叫をしたのだった。

## 罾に足をとられた青年

一時間目の終わりを告げるチャイム。

そのチャイムが鳴り終わったと同時に、光矢と帝は教室に入って行った。

教室は一時間目が終わり、次の授業の準備をする者や、おしゃべりする者などで騒がしい。

と、その時。

「おいおい、二人仲良く遅刻ですかああー？」

ふいにそんな軽薄そうな声が、光矢に向かって投げかけられた。それに光矢は声の方を向く。

そこには、ヘラヘラ笑いながら近寄ってくる男がいた。

染めた金髪に、思慮深そうな黒い瞳。しかしその瞳とは裏腹な、ヘラヘラ笑う表情と着くずした制服を見れば、彼の性格は一瞬で分かるだろう。

「……森田」

と光矢は言う。

彼の名前は、もりた たかし森田隆志。

学校一の問題児で有名な男である。

その森田が、

「お前らのラブラブ度は分かったけど、遅刻はよくないだろ、遅刻は。わざわざ同じ時間に登校するとかさあ」

と肩をわざとらしくすくめて、やれやれといったように首を振る。ちなみに光矢は、クラスメイトに同居しているということを教えてはいない。というか、そんなものが知れ渡った日には全学年の帝のファンから殺される日も近くない。だから一応『ご近所さん』ということにしているのだが。

「お前に言われたくねえよ」

そう光矢が言い返すが、森田は無視して帝の方を見る。その瞳と顔は緩んでいて、節操がないなと光矢は思った。

森田はそんな光矢の考えなどつゆ知らず、

「今日も可愛いね、帝ちゃん」

とか、キザな事を言い始める。まあもつとも、森田の場合は誰にでも言つてそんな台詞なのだが。

しかし帝は、いつも光矢に向ける妖艶な笑みではなく、無邪気そうな笑みを浮かべ、

「ありがとう、森田君」

と嬉しそうな顔をした。

その帝の姿を光矢は半眼で見つめる。笑みだけではなく、態度までもものすごく違うことに若干怒りを覚える。

しかしすぐに、まあ、あの妖しい笑いをされてもそれはそれで困るか、と光矢は思い直した。

あれは危険だ。

人間とは思えないあの妖しい雰囲気と、妖艶な笑い。美しすぎる顔。

もし現実こんな子がいて、その子が光矢に告白してきたら光矢は間違いないく詐欺だと確信するだろう。

「帝ちゃん、今日も可愛いなあ」

「ヤバイ、美少女すぎる」

「胸無いのが欠点だよなー」

光矢から少し離れたところで、そんな会話をする男子生徒たち。

そんな、かつての自分と同じ考えをする哀れな男子生徒を見つめ、  
光矢はため息をついた。

そして視線を帝に戻すと、帝が、森田に、

「そうなのよ。光矢がお寝坊さんだったから遅れたの」

「まじかよ？ そりゃ光矢がいけないなあ」

「でしょでしょー！！？ なのに光矢は私のせいにするのー！」

「おい光矢！ 帝ちゃんのせいじゃないのに、何帝のせいにしてんだよ！」

「お前には関係ねえだろ！　しかもさらつと帝を二回目呼び捨てに  
してんじゃねえよ！」

「てへっ」

「死ねえええ！」

と光矢は叫んでから、**ビシッ**と帝を指差し、

「大体、こいつが朝目玉焼きを爆発させるとかいう馬鹿なことをするからっ」

と、正論を言おうとする。

しかしそれを遮って、帝が、

「ひどい！？」 私のせいだって言うの！？」  
と叫ぶ。

私ってなんだよ、私って……と光矢が心の中で突っ込むが、帝は止まらない。

わざとらしく頭を振り、両手で顔を覆う。

そして、

「わたし、わ、私はただっ……」

と泣きそうな顔になる。

それで十分だった。

「光矢、帝ちゃんを泣かすなああああ！」

とクラスにいる男子全員が叫び、女子は女子で、

「光矢最低」

「ひどい」

「帝ちゃん大丈夫？」

「気にすることないわよ」

と、帝を励まし合っている。

それを光矢は見て。

「…………お前ら甘やかしてんじゃねえええええ!?」

そんなことがあり、二時間目が出来なかったというのは……………。

また、別の話。

「ああ、面白かった」

「面白くねえよ」

放課後。

二時間目のことを振り返るように、帝が言う。

帰り道、見た目だけは超絶美少女の男と帰る男子生徒。その凶だ  
けを見れば、幸せそうなカップルに見えなくもないのだろうが、光  
矢と帝の場合、今にも破局しそうな夫婦と言った方がいいだろう。

光矢は、横を歩いている帝を見る。

今は髪を結んでいるが、セーラー服を着込んでいるため九十九パ  
ーセント女にしか見えない。

その帝が歩いている姿を、光矢は見る。

若干、いやかなり女顔ではあるが、人間に見える。ギリギリのラ  
インで、人間に見える。

しかしそんな光矢の最後の常識ですら、彼は覆す。

彼 帝は、人間ではない。

れっきとした、実在する《死神》である。

そんなことを頭の中で考えてから、光矢は帝の方を向き、



「……なあ、帝」

「何？」

「お前、死神なんだよな？」

「そうだけど」

と、あっさり帝は言う。

常識人が側にいたら、精神病院に連れて行かれかねないことを、あっさり帝は認める。

それに光矢もうなずき、

「なら、俺の死とかってもう見えてんのか？」  
と聞く。

すると帝が、驚いたように目を見開く。

帝と出会ってから二週間経つが、そんなことを聞いたのは初めてだからだ。

帝はしばらく黙り込んでいたが、少しだけ悲しげに目を細めて、  
「……………見えないよ」

と言った。

それに光矢は、

「死神なの？」

「光矢さ、《死神》を誤解してない？」

と帝は言って、立ち止まる。

それにつられて光矢も立ち止まった。

光矢は帝に、

「死神ってのは、鎌を持って、人間の命を奪う奴だろ？」

「違うよ」

帝が首を振り、否定する。

それから光矢を見上げてくる。その瞳には、どこか哀愁な雰囲気  
が漂っていた。それだけで光矢は、何かただならぬ空気を感じた。

「死神つてのはね、狂った神々が人間に与えた、不老不死の力を奪うために存在してるんだよ」

と、帝は言った。

「……………はあ？」

光矢は思わずそんな声を上げる。

「神々が、狂った？ 何だよそれ」

「そのままだよ。もしかして、光矢は神を信じてる？」

「……まあ、カトリック教会の信者ほどではないけど、信じてるよ」  
社会の歴史の授業を思い出しながら、光矢は言った。

「そう」

それに帝はそう一言言々と光矢から目を逸らす。

そしてそのまま、

「……人間は神を誤解してる。神は、天国なんかに導いてくれる存在じゃない」

「？ どういうこと？」

光矢が思わず首を傾げて聞くと、帝は光矢から視線を逸らしたまま、

「神は、人間に不老不死の力を与え、その力を巡って人間が争い、滅ぶのを待っているような存在なんだよ」

「は？ はあああ？ 不老不死！？」

「人間は死ぬことを怯えているらしいからな。不老不死になる奴がいたら、自分も不死になろうとする奴が出てくるだろう。神はそれを利用しようとしているんだ」

「……………じよ、冗談だろ？」

「残念だが、事実だ」

と帝は言う。

人間に不老不死の力を与え、それを取り合う人間を笑う神々。そんなことが、あつていいのだろうか？

そう光矢が思っていると、帝がこちらを向く。帝は、綺麗に整った顔をこちらに向けてくる。

「……………俺たち死神は、その争いを止めるために生み出された存在だ」  
「ならお前ら死神は、人間の味方なのか？」

「いや、死神全員じゃないな。人間を嫌う死神もいるが……………俺は違う」

そう帝は言つて、光矢を真っ直ぐに見つめてくる。それはもう、痛いほどに。

「俺は、人間が滅ぶのが嫌だ。神なんかには種族を滅ぼす権利はないだが、神々を倒すには力が無い。だからお前と 契約がしたい。大きな力を得るために」

帝はこちらを直視し続ける。

それに光矢は、

「……………」

何も言えない。ただあんぐりと、口を開けていた。

彼と《初めて会った時》のように。

そんな光矢に帝は、例の妖艶な笑みを浮かべ、

「だから、考えといてよ」

と言った。

そしてそのまま、光矢の返事も待たずに、彼は歩き出してしまふ。まるでワルツでも踊るかのように、軽やかなステップを踏みながら。そんな帝の後ろ姿に。

「……………」

光矢は一瞬、彼が男だということを完全に忘れ、見とれていた。

## 死神の不幸と来訪者

光矢の家は、結構広い。

なんでも彼は母親が他界していて、父親は海外に出張中らしい。

光矢が言うには、父親にはもう一年ほど会っていないが別に父親が存在しなくても大丈夫らしい。

一応男と二人という、気まづいはずの暮らしだが、帝は大して気にしていなかった。

「夕飯なに!？」

「えー……。ハンバーグかなー?」

「俺も手伝う!」

「いや、お前はいい。朝みたいなことになっても困るし」

「ええ!？」

と帝は叫び、衝撃の顔になる。それからわざと両手で顔を覆い、

「私はあなたのためにっ」

「それは今日聞いたから!」

と光矢が遮る。

疲れたような、しかしどこか楽しそうな顔の光矢を見つめ、帝は微笑む。

光矢をいじるのは本当に楽しいな、なんて思いながら、彼は先ほどの放課後のことを思い出していた。

「……………」

先ほど帝は、死神についてを光矢に話した。

死神とは、何のために存在するのか。狂った神々と、その不老不死の力を与えられた人間の末路。

帝には力が必要だ。

死神は神の次に力があるとつたわれているが、帝はその神に勝た

なくてはならない。

だから契約をするのだ。

光矢と《契約》をして、力を手に入れるために。  
だがその契約には掟があつて、それは本人が望まなければ成立しないという厄介なものだった。すなわち、光矢が嫌がつているうちは、契約が出来ない。

「……………はあ」

帝はため息をついた。

誰がこんなめんどくさいシステムを考えたんだ。神か？ もしそうなら到底怒りは収まりそうもない。

そう帝は心の中で思う。

しかし光矢が、はんばーぐとやらの準備を始めたのを見て、彼の興味はあっさりそちらに移っていた。

男なのに、器用に肉をひっくり返している光矢のもとに駆け寄り、

「俺もやるっ！！」

「やらなくていい！ いや、やるな！」

「何で？」

「お前がやると足手まといだっ！」

「なにそれ。光矢ひどっ」

と帝は言いかける。怒りをあらわにして、口を尖らせて、腕を振り上げようとする。

しかし、その言葉は。

「……………」

途中で止まった。いや、正確には故意で止めた。

「……………」

帝は、《ナニカ》の気配を感じていた。明らかに人ではない、とんでもなく巨大で、威圧感のある気配。どんどん近づいてくる、殺気と魔力。

ここではまずい。ここで戦闘をしたら、光矢を守る自信がない。しかもこんな閑静な住宅街で暴れたら、光矢に迷惑がかかる。

「おい、帝。どうしたんだ？」

と光矢が心配そうに突然黙り込んだ帝を覗きこんで来た。  
当然ながら、何も気づいていない。

だから帝は微笑んで、

「ああ……… 何でもないや。俺、ちょっと外出てくるよ。お菓子買  
いたいからさ」

「へ？ あ、ああ、分かった」

そう光矢が若干不思議そうにうなづく。何故こんな時間に、とでも疑問に思っているのだろうが、怪しまれてはいないようだ。

帝は光矢に手を振ってから、リビングを出る。そしてさらにドアを開けて光矢の家を出る。気配の方へと、殺気の方へと、彼は歩く。少し暗い夜道も彼は気にせずに、ひたすら歩く。

どうやら家から少し離れた路地裏から殺気は放たれているようだ。

「…… 人間じゃないことは分かってんだけど」

と帝は呟き、暗い路地裏を見つめる。

まだ真夜中よりは眩しいが、そこそこ暗い路地裏。まあ、もし真  
つ暗だとしても彼は夜目が効くから平気なのだが。

「こんな夜中に俺を殺気で呼び出すとは      なめるのもいい加減に  
……」

そう帝が言いかけた、その瞬間だった。

いきなり後ろから殺気が爆発し、何かが飛びかかってくるのを感じた。どんな訓練を受けている人間でも、避けられない速さで帝に迫ってくる。

しかしそれに帝は余裕そうな笑みを浮かべ、

「遅いよ」

と言う。同時に跳躍。

二メートルほどの高さを宙返しし、回避する。

さらに空中で、

「死神鎖鎌      かまいたち  
鎌鼬！」

と叫ぶ。手を掲げる。

するとその刹那、帝の手に鎌が現れた。まるで前からずっと手の中にあつたかのように、ごく自然にその鎌は収まっていた。それは小型の農具のような鎌で、持つ所には鎖がついているという特殊な鎌だった。

小さくて死神らしくない鎌だが、帝はこの鎌鼬を気に入っている。よく首切り用の大きい鎌を持っている死神はいるが、強さは大きさでは表せないのだから。

そして帝はその鎖鎌を構え、地面に着地する。と、同時に地を蹴り、殺気を放ってきた《ナニカ》へと一直線に鎌を放つ。

しかし相手もそんなに甘くはなかった。

帝の鎌を、懷から出した刃物のようなもので防ぐ。ガキンという甲高い音が鳴り、鎌と刃物から火花が散る。

「んっ」

しかし帝は慌てず、鎌鼬を引き、身を翻してもう一度鎌を振り下ろそうとした。

しかし。

「……落ち着けよ、死神」

という声がした。

男にしては高い声の帝とは裏腹に、その声は低い。声変わりがとつくに済んだような、男特有の低さ。

それを少しだけ羨ましく感じながら、帝は、

「うん？ あんた誰？」

と鎌を下ろす。しかしその手には力を張り詰めていて、いつでも攻撃できるように緊張させている。

するとその声は、

「悪魔だ。悪魔のロイ・サリウツタ」

と言った。

それに帝は目を見開く。

悪魔。人外の者。天界に住まう自分と同類の化け物。

彼は小さく舌打ちをして、

（くそ、もう追手がかったのか？ 確かに天境界線で派手に暴れて脱走したのはヤバいと思ったけど）

と心の中で呟く。

しかしそんな感情は全く表に出さずに、気にしていないように帝は笑った。

一瞬。一瞬だけ自分以外の人外の者に少し取り乱したが、所詮神の中じゃ一番低い地位の化け物。

「……そんな悪魔が……上位神種の俺にそんな口きいて、いいと思っ  
てんの？」

そう帝は言い、妖艶な笑みを浮かべる。鎌に力を込める。銀色の光が鎌を包み始める。

するとその途端、声の主が姿を現した。

黒い、後ろで一つ結びにしたの髪に、黒い瞳。さらに黒い服に黒い靴。

そして背中には黒い羽根。

それは全てが漆黒に包まれている男だった。

その男は苦笑して、

「あんたの噂は聞いていたよ。怪しい雰囲気美人な死神がいるってな。でもあんた、一応『男』だという自覚はあるんだろうな？」

「無いに決まってるじゃん。ていうか、神々には性別なんかないだろう？ たまたま人間界に来て、『男』になっただけだ。神界では女ってことにもなってたし」

「……そうか」

ロイという名の悪魔は、何を納得したのかうなづく。

それに帝は首をかしげて、

「お前は、俺に何の用？ もし性別のことを言いに来ただけなら俺は帰るけど」

「違う。俺はお前に忠告しに来たんだ」

そうロイは言う。

しかし帝は、見下したような、ゴミや虫けらを見るような表情に



なり、

「忠告？ そりゃ随分お門違いだね。お前が……ただの悪魔のお前が、死神の俺に忠告？」

「ああそうだ。死神であるお前にな」

「ふん……。前置きはいいい。早く言え」

そう帝がうながすと、ロイは少しうつむく。そして帝から目を逸らし、まるで言いたくないものを言うように重々しく口を開き、

「……あんたの仲間の死神 全員死んだよ」

と小さく言った。

それに帝は、一瞬だけ驚いたような顔をした。目を大きく見開き、ロイを見る。考えが深い方の帝にしては珍しく、完全に予想外のことだったからだ。

そして彼は、ほんの僅かな時間だったが、悲しげな顔になった。

仲間が、全員。それはつまり、この世界で死神が……。

しかしそんな考えを振り払うように首を横に振り、帝はすぐに笑みを取り戻すと、

「……何、なのそれ。俺そんなのどうでもいいんだけど」

と言つて、馬鹿にしたように笑う。

それにロイは、怪訝そうな顔になり、

「仲間が全員いないんだぞ？ 死神はお前だけだ。永遠の孤独だ。

……なのに、それがどうでもいい？」

「うん。あいつらとは、ただ同じ種族になっただけだから。もしそれで俺が落ち込むとか思ってたら、大間違いだよ？」

「いや、普通落ち込むもんだぞ？」

「あはは、笑える友情ごっこか？ 悪魔のお前にも、人間らしさがあるんだな。馬鹿馬鹿しいにもほどがあるよ、ロイ君？」

馬鹿にしたように失笑する帝。しかし、それは演技だった。彼はいつもそうだ。他の神の前では、悲しみなどないように、弱味などないように振る舞っている。高慢で最強で冷徹な死神を演じている。するとロイは、気に障ったようにピクリと眉を動かし、

「お前……」

「うわ、そんな怖い顔すんなよ。ていうか、もしかして忠告ってそれだけな訳？」

そう帝が言くと、ロイは首を横に振り、

「いや……まだある」

と言う。

それからこちらを見てくる。そして、帝の目を覗き込みながら、

「……お前、さっき神々に性別はないと言ったな？」

「ああ、言ったね」

「そして死神の生き残りはもうお前しかいない。この意味が分かるか？」

そうロイが聞いてきた。

帝はそれに首をかしげる。そのロイの問いの答えは、否だった。全く何を言っているのかも、何が言いたいのかも分からない。

だから帝は、

「………どういうことだ？」

「分からないか。なら、ヒントをやるう」

そのロイの上から目線な言葉に若干殺意を覚えるが、帝は黙ってうなずく。

「………人間には神種が必要だが、神種にも人間は必要だ、ということだ。現に、天使や精霊なんかは人間の魂を吸い、寄生して生きているしな」

「……それがどうした？」

「つまり、だ。神に人間を滅ばされたら他の神種の奴が困るんだよ」

「さっさと結論から言え。殺されたいのか？」

「ん？　ここまで言っても分からないのか。頭脳明晰だと聞いていたが、意外と……」

「黙れよ、下等な悪魔が」

帝はイライラしながら言う。彼はストレートに物を言わない奴が一番嫌いだった。こんなところで変なクイズ大会をやっているヒマ

はないのだ。

するとその帝の怒りが伝わったのか、ロイは肩をすくめて、

「つまり、お前をどうすると思う？ …… ってことだよ」

そう言ってから、帝から目を逸らす。それは、後は自分で考えるということだろう。

そのロイの悪魔の分際で生意気すぎる態度に、帝は本当に殺してやろうかとも考えるが、なんとか踏みとどまり、考える。

天使共や精霊共が、自分をどうするのか。

まず殺すことはないだろう。死神がいなければ、神が人間を滅ぼしてしまう。

むしろ、逆だ。

「…………… 俺を保護する、とか？」

「残念、ハズレ。そんな生易しくないよ」

そうロイは肩をすくめる。

その言葉に帝がロイを睨みつけると、ロイは帝から目線を逸らしたまま、

「だってもし君が死んだら、死神が滅ぶじゃないか。 …… これ、大ヒントだよ」

と言う。

そのロイの言葉に帝は、再び思考を開始する。

死神が滅んでほしくないならどうするか。俺を保護するだけじゃ生易しい。何故なら俺を保護したとしても、いずれは死んでしまう可能性が高いから。

ならば、どうする？

そこまで帝は、

「…………… 俺に誰かを犯させて、子作りってか？」

「んー、八十五点つてところかな。神は母親になった方の力を受け継ぐって習わなかった？ たとえ君が天使とやっても、生まれてくるのは天使の子だよ」

そうロイは、まだ目線を帝から逸らしたまま言う。

しかしその一方で帝は、もう答えを導き出していた。というか、別に考えなくても分かることだった。

いつもの妖艶な、しかしどこかひきつった笑みを浮かべ、

「俺が……………犯されるとも言いたいのか？」

「はい正解ー」

あつさりロイは言ってから、そこでやつと帝に目線を戻す。

「それを俺は忠告しに来たただけだ」

「ちょ、待てよ。俺は一応男で」

「それは人間界での話だろう？ 神界には性別がないって、君が自分ですつき言っていた」

「いや…………まじかよ」

「まじだ。ついでに言わせてもらえば、もしお前が犯された場合」

「と、そこでロイは一回言葉を切る。そして先ほどよりも低い声で、

「……………孕むぞ」

と、一言だけ言った。

それに帝は、今度こそひきつった笑みを浮かべ、

「いや、まあ、子作りなんだからそうだろうけど…………」

「孕みたくなければ頑張ることだな」

「そりゃ、ご忠告どうも」

そんなふざけた口調で帝が言うと、ロイは何故か踵を返し、

「んじゃ、俺はもう行く。用はそれだけだ。呼び出して悪かったな」

「待て。何故お前が死神の俺にそんな忠告する？ 悪魔と死神にあまり接点なんか…………」

その帝の言葉に、ロイは振り返り、

「綺麗なものは嫌いじゃないからな」

「うわ、気持ち悪い理由」

「悪かったな」

「嘘だよ。ありがと」

そう帝は言つて、微笑む。

それにロイも微笑み、

「ああ、気を付けろ」

と言つて、そしてそのまま歩いて行つてしまふ。

その後ろ姿が消えるまで帝は眺めながら、

「神に命は狙われるわ、神種共に貞操は狙われるわ……もう最悪だな」

と小さく呟き、ため息をついた。今日は厄日か、とも付け足す。

そしてそんな後ろ向きな考えを無視し、また思考を開始する。

神の対処法や、天使や精霊に犯されるというあり得ない危険性も増えた今、考えたいことは沢山ある。

「……………」

しかし、まずは。

「あのこと、だよな」

と帝は小さく言つて、完全に暗くなつてしまった路地裏の闇を睨みつけたのだつた。

## 孤独と逃亡する死神

「光矢 ああああ！」

また、悲鳴が聞こえた。

しかし光矢は一人暮らしたため、こんな悲鳴を上げるご近所迷惑な輩はたかが知れている。

「帝か……」

うんざりと光矢は呟き、枕から顔を上げる。枕元の時計を確認する。六時を表す短針。

「まだ早えよ」

ため息をついて、光矢は起き上がる。

そのまま汚い部屋を出て、廊下を歩く。その間にもやかましい悲鳴は続いていて、光矢は思わずこめかみを抑えてしまう。そして階段を降り、最悪の事態を覚悟して、彼はドアを開けた。

しかしそんな彼を待っていたのは、破壊されたフライパンを持った黒こげの帝 などではなく、目玉焼きが入った綺麗なままのフライパンを持った、これまた綺麗なままの帝だった。

その帝がこちらを向き、フライ返しを振り上げながら、

「おっはよう光矢！」

と笑顔で言ってくる。

それに光矢も手を振り、

「お、目玉焼き作れたんだ？」

「うん！」

「そうか、そりゃ良かったな。んで、昨日の夜何してたんだ？ お菓子買いに行くとか言って、お前そのまま朝帰りだっただろ？」

そう光矢が言くと、帝は目玉焼きを皿に盛り付ける作業を中断し、こちらを向く。

それから蠱惑的な笑みを浮かべ、

「心配してくれてるの？」

とか言うもんだから、光矢は肩をすくめて、

「人間じゃない男の心配なんかしねえよ」

「じゃあ気にならないの？ 昨日俺が何してたか」

「……別に」

光矢はそう言っただけを向く。反射的に嘘をついてしまったが、気になるのが事実だった。

すると、そんな光矢の気持ちを知ってか知らずか、帝が、

「本当に？」

「話したいのか？」

「聞きたいんだろ？」

クスクスと笑いながら言う帝の姿は、実に艶やかだった。

それに思わず光矢はうなずいてしまう。

「よし。お前がそこまで言うなら話してやる」

満足したように帝もうなずくと、椅子に座る。それから目線だけで、光矢も座るようにうながす。

それに甘えて光矢が椅子に座ると、帝は机に両肘をついて身を乗り出した。

「昨日は、お客と会ってたんだよ」

「お客？」

「ああ。ご丁寧に俺の魔力を追って追跡したらしい。まあとにかく、そのお客と会って、話をしてきたんだ」

「ふむふむ」

「んで、ちよつとシヨツクなことがあつてさ」

「シヨツクなこと？」

光矢が首をかしげると、帝はそんな光矢から顔をそむけるように下を向く。

そんな帝に光矢が不思議そうな顔をしたのと同時に、帝が言った。

「……俺の仲間が、全員死んだんだ」

あまりにも衝撃的なことを、うつむきながら。

「死ん、だ？」

「ああ。全員《神》と《天使》に殺された」

「……全員……」

光矢は呆然と呟く。そして想像してみた。自分以外の人間が、この世界からいなくなってしまうことを。地球で一人きりになってしまうことを。

しかし、それは無理だった。

どんなに想像しても、心のどこかで考えてしまう。母親はすでに他界しているが、海外に出張していて、半年に一回は帰ってきてくれる父親のこと。馬鹿なことばかり言っている森田のこと。引越した当初から気を使ってくれている、近所のおばさんや、しかめっ面の警備員さん、隣の河原野さん、いつも通っているゲーセンの店長

その全てがいなくなってしまうなんて、考えられない。

「……………」

しかし目の前の帝は、仲間が全員死んだのだという。死神、つまり自分と同じ同種の生き物がいなくなってしまったのだという。

「……帝」

光矢が名前を呼ぶと、帝は細い肩をびくりと揺らす。そのまま顔を上げる。その顔には、この場所にはそぐわない、貼り付いたような笑みが浮かんでいて、

「あ、全然平気だよ？ あいつらとは別に面識なかったし、はつきり言っただけだっただけさ」

「……帝」

「あいつも馬鹿だよ？ そんなんで俺がびびる訳ないっつーのにさ。何ナメてんだかって感じ」

「帝」

「何だよ。もしかして光矢も同情すんの？ 止めるよ気色悪いなあ。俺は全然平気」



いつになく口軽になっている帝の言葉を、光矢は強く叫んで遮った。

「……べ、つに、気にしてねーよ」

「気にしない奴なんかいないだろうが！ 仲間がいなくなつて、ヘラヘラ笑つてる奴なんていない！ 無理すんなよ馬鹿！ こつちまですつらくなるだろ！」

「当たり前だろ！俺は帝の、余裕そうで自信に満ち溢れてる笑顔が好きなんだよ！そんな顔すんな！」

自分でも分かるほどに恥ずかしい台詞を、光矢は大声で言い放つた。

帝は珍しくポカンとした表情で光矢を見ている。口を開け、大きな瞳もキョロキョロと動いている。

そんな帝を見て、ああまずったかもっていうか恥ずかしすぎて今すぐ死にたい、と光矢が思った瞬間だった。

「ははは、いや、光矢は本当に優しいなーって思ってたさ」

「分かった分かった。そんな光矢くんのために、この際川帝がキスしてあげよう」

ぐいぐいと顔を近づけてくる帝から距離を取り、光矢は赤面しな

がら奇声を上げる。帝がそんな光矢を見て、腹を抱えて笑う。

光矢も、そして帝も、死神のことは忘れ、いつもの日常に戻ろうとしていた。その時。

光矢にキスをしようとしていた。いや、正確にはキスをする真似をしようとしていた帝の表情が、一変した。恐怖と怒りと緊張が合わさったような、複雑な表情になり、帝は光矢から数歩離れる。

「……どうした？」

訝しげな表情で光矢は問うが、帝は渋面を保ったまま、口を開こうとしない。

しばらく無言の時間が流れ、痺れを切らした光矢が口を開こうとした、その次の瞬間。

「危ねえ光矢!？」

帝がいきなり足を振り上げると、光矢の顔面に叩き込んできた。

帝の細い足は綺麗に光矢の頬に叩き込まれると、その衝撃で、光矢は吹っ飛んだ。リビングの白い壁に激突した光矢の体はめり込み、内臓が口から吐き出されそうな痛みに、

「が、はっ」

としか光矢は言えなかった。

しばらく平行感覚が麻痺してしまっていたが、光矢は何とか目を開く。前を見据える。

そこでは、先ほどまでの平和そうな日常に堂々と終わりを告げるような光景が広がっていた。

帝はいつの間にか鎌を手にとっていて、それを構えて光矢の前に立っている。

そしてその帝の前には、どこから入ったのか、白いローブを着込んだ男が立っていた。背中から白く大きな羽根が生え、自分は人間じゃないですよと自らアピールしているようなものである。

その白い男が、帝を見て、

「お前、死神だろ？」

と優しい口調で尋ねた。

話し方さえ優しいものの、目は鋭く光っている。

その言葉に帝は、男を強く睨みつけ、

「黙れよ、下賤な奴隷が」

と、蔑むような言葉で返す。会話だけ聞いていると、帝の方がよほど悪人だ。

すると男は、帝の言葉に肩をすくめ、

「おやおやひどいねえ」

「黙れ雑魚」

「その雑魚の主に、君たち死神は殺されたんだけど」

「《神》か？ 《神》はお前らが勝手について行ってるだけだろ？

正当な主じゃ<sup>あるじ</sup>ない」

「僕はそんな話をしに来たんじゃないんだけど」

挑発するように男は言っていると、帝の後ろ 無様に床に転がっている光矢を見つめ、

「そいつが…… 《死神の悪戯》の契約者か」

と、訳の分からないことを言い、何故か笑った。

しかし帝は、男とは対照的に不機嫌そうな顔のまま、

「だったら何だ？」

「人間を契約者に出来ないことはお前もよく知っているはずだが？」

「よいけいなお世話だ」

帝は冷たく言い放ち、鎌を振り上げる。

「最期に言いたいことはそれだけか？」

「…… そうだな。あともう一つあるかな」

男は帝が振り上げた鎌を見ても余裕そうな表情を崩さない。

あくまでもニヤニヤと笑みを絶やさずに、

「君たちには謝罪しなくてはならないね。我が主の《神》は死神を殺しすぎた。そして僕らも、死神が居ないと生きていけないことに気づくのが遅すぎた」

「はっ、人間の魂を食らう《天使》のくせに脳みその発達はなっていないのか？」

帝は小馬鹿にしたように鼻で笑う。

神は人間に不死の力を与え、それを巡って人間が争い合い、やがて滅びるのを傍観している存在だと帝が言っていたのを、光矢は思い出していた。

帝は、それを防ぐのは自分たち死神だ、とも言っていた。

それが意味するものは

そこで男が、

「君たち死神が、不死の力を与えられた哀れな人間を殺してくれるおかげで、僕は天使は生きていられる」

「心配は要らないから、死ね」

「ひどいなあ。でも、君の心配してる訳じゃない。僕ら天使の心配をしてるんだ」

そう男は言う、手を空中に掲げる。

「死神が滅べば人間も滅ぶ　そうなれば、人間を餌にしている僕らも滅ぶ。……悪循環だろう？」

「……何が言いたい？」

男を睨みつけながら、帝は静かに問う。

すると男は、そこで初めて笑みを顔から消した。そして手を空中に掲げたまま、

「簡潔に言えば　お前を犯しに来た」

男は手をくると回す。すると指の中心から円が現れ、その真ん中から眩い光が飛び出してくる。

「つく」

光矢は思わず目を瞑る。しかし目を瞑っていても、ガキーン、キンという派手な音は聞こえてきていた。

「死を与える我の名の元に　ざんれつうは斬裂轟波！」

帝は叫びながらリビングの壁を蹴り、鎌を自分の胸に押し当てるように引く。そして、男に向かって一気に押し出す。するとその刹那、鎌から銀色の光が放たれ、男に襲いかかる。

「我が主よ、我に御加護を」

男は手を突き出しながら唱える。男の手から、またしても円が現れ、帝の銀色の光をあつさり弾き返した。

ように見えた。

「ばーか」

小馬鹿にしたように帝が言ったと同時に、男の円を銀色の光が貫く。そのまま光は、男の胸に突き刺さる。

「ぐあああああ！？」

男の悲鳴が上がった。

帝はそんな男を冷たい瞳で見下ろし、

「その程度の《結界》で俺の力を弾き返そうとしたのか？ 馬鹿にもほどがあるだろ」

と、言う。

しかし男は聞こえていないのか、悲鳴を上げ続けている。

「ん、な……っ！？」

そこで男は異変に気が付いたのか、自分の体を見る。手を、足を、銀色の光に胸を貫かれながら見る。

「っ！？」

そして半瞬もたないうちに、男は声にならない悲鳴を上げた。消えていつているのだ。手から、足から、体が消えていつて

「な……なんだこれはあああああ！？」

男は絶叫を上げる。それは死ぬ間際の動物のように、惨めで、哀れな光景だった。

「た、頼む。見逃してくれ。死ぬのは、死ぬのは嫌」

「俺の仲間だって、嫌だったんだよ！」

それまで黙っていた帝が、声を荒げる。光矢は思わず、びくりと体を震わせる。

「お前らが見捨てたくせに、命乞いしてんじゃねえ！」

帝がそう叫んだと同時に、男の体が全て消えた。存在がまやかしかったかのように、綺麗に消えてしまっていて。

後に残ったのは、帝と光矢だけ。

「……………」  
「……………」

沈黙。

帝は先ほどまで男がいた空間を睨み続けているし、光矢は壁にもたれかかったまま、呆然とした表情で黙り込んでいる。

そのまま、二人はしばらく動かなかった。

何十秒かが経過したところで、やっと帝が光矢の方を向く。

「……光矢、大丈夫か？」

「あ、ああ」

若干体が震えていたが、とりあえず命に別状はない。光矢はコクと頷いた。

そんな光矢の姿を見て、帝はため息をつく。それからすまなそうな、悲しげな表情になり、

「巻き込んだな……………ごめん」

と、小さく頭を下げた。

光矢は慌てて飛び起きる。帝に蹴られた頬がチリリと痛んだが、無視して、

「謝んなよ。守ってくれたじゃねえか」

「でも」

「そのことはいい。それよりも、ちょっと聞きたいことがあるんだ」  
光矢は帝の言葉を遮って、言う。

帝が不思議そうな表情でこちらを見てくるが、光矢はしばらく黙っていた。

やがて決心がついたのか、少しためらいがちに口を開き

「……………お前を犯しに来たって男が言ってたけど、あれ、どういうこと？」

「！ あ、あれはっ」

帝は口ごもった。いつもは冷静な彼には珍しく、あたふたと慌てたような態度だった。

「帝？」

「あ、れは、俺もいまいち理解しがたいし……もしかしたら、俺が男だっけ気づいてないんじゃないかねえの？　ほら、俺見てくれは女だし」  
「はぐらかすなよ」

「別にはぐらかしてなっ」

「帝！！」

今度は大声で、光矢は叫ぶ。帝はびくつと肩を震わせる。まさかこのタイミングで光矢に怒鳴られると思っていなかったのだろう。驚いて間拔けな表情になっていた。

「どういふことか、話してくれよ。人間の俺にどうにかできっこないけど、力になれることはするからさ」

またいつもの口調に戻って光矢は言う。こんな台詞を吐いたのは、人生で初めてだ。無意識のうちに、光矢は《際川帝》を助けるよう脳に指令を出していたのだ。

しかし帝は、口を開こうとしない。堅く閉じたまま、話そうとしてくれない。

「……頼むから」

優しく言い聞かせるように光矢は言った。

それでも帝はしばらく黙っていたが、やがて光矢を見上げてくる。その瞳には、先ほどまでにはない強さが感じられた。

「俺は今、狙われてる」

静かに、ゆっくりと、しかし確かに帝は言った。

その言葉に、光矢は首を傾げて、

「狙われてる？」

と聞き返す。

すると、帝はコクリとうなずく。それに光矢はさらに問う。

「それは、さっき来た《天使》とかいう奴に？　それとも《神》とかいう奴に？」

「両方。というか、人間を餌にしてる全ての神種に狙われることになる」

「それってどのくらいの数なんだ？」

「んー……この国の人口くらいはいるかな」

少し考える素振りをした後に帝はあっさり言った。

「っそんなの」

勝ち目ねえじゃん      と口から出そうになるのを光矢は抑え、黙  
り込んだ。

人間である光矢から見ても勝ち目がないのは一目瞭然で、絶望的  
な気持ちに彼は陥っていた。

しかし、その事態の一番の当事者は、何故か自信満々な笑みを浮  
かべていた。

「一つだけ方法があるんだよ、光矢。《神》を倒して、この世界を  
平和にする      なんていう、どこぞのヒーローかっていう夢物語を  
実現させる方法が」

と帝は笑みを浮かべたまま、光矢に顔を近づけてくる。

帝の綺麗に整った顔が近づいてきて、男とは理解していながらも、  
光矢は赤面してしまう。

わずか二週間の付き合いだが、光矢には帝がこれから言おうとし  
ていることが分かってしまった。

この予測が外れていてほしいと願う光矢の思いとは裏腹に、帝は、  
「だから俺と契約しろ      鈴木光矢」      予測と一言一句違わない言  
葉を吐き出したのだった。

「わはは、見なよ兄貴。あの死神、人間と笑ってるよ」

貞操が狙われてるっていうのに呑気なもんだね      とミリナ・サ  
リウツタは呟いた。



短く切りそろえられた黒髪に、大きく勝ち気そうな黒い瞳。

整った顔つきは、悪戯好きそうな子供のように爛々と輝いていた。場所は空中。重量の概念を無視して、彼女はふわふわと浮いていた。

するとそのミリナの言葉に、兄貴と呼ばれた青年　　ロイ・サリウツタは、

「うん。……多分彼は自信があるんじゃないかな」

と、言う。

するとミリナは首を傾げ、

「何に？」

「自分の契約者に。際川帝は絶対の自信を持っている」

「はあ？　ただの人間でしょ？　……《スズキコウヤ》。人間なのにも関わらず、《死神の悪戯》の契約者に選ばれてしまった哀れな人間」

ミリナはそう言うてから、視線を下に移した。そこには、黒髪の少女と、茶髪の青年が並んで歩いていた。

幸せそうに、笑い合いながら歩いている。

そんな光景を見ながら、ロイは無意識に笑みを浮かべた。

「いや、多分彼も人間じゃないと思う」

「《スズキコウヤ》？　ここからじゃ遠くて顔も見えないけど……」

「まだ正体は分からないけど……人間じゃないとは思う」

そうロイは言うと、茶髪の青年を見つめる。

まだ自分の正体に気づいていない、自分をただの人間だと思い込んでいる青年を見つめ、彼は静かに笑みを浮かべた。

## 孤独と逃亡する死神（後書き）

第一章が終わりました。

ここまでご愛読していただき、ありがとうございます。  
それでは第二章で会いましょう。

## 第二章・二人の出逢い

「ユウレイ？ 何それなんかの食べ物の名前なの？」

ポテトチップスをつまみながら、際川帝は聞き返した。

黒い、肩までつくかつかないかの艶やかな短い髪に、大きな黒い瞳。人間とは思えないほど、妖しく整っている顔だち。

不思議そうに小首を傾げるその姿は、どこの世界の男だろうと即ノックアウトだろう。

しかし、その帝の美しく整った顔を見るなり、呆れたように顔をしかめた男 鈴木光矢がいた。

「お前、幽霊知らねえの？」

茶色に染められた髪に、寝ばけたような、優しげな黒い瞳。中肉中背というよりは、もうほんの少しだけ痩せている体。普通にしていればそれなりに見られるであろう顔を、今は思いきりしかめていた。

「お前、いくら死神でもそれは知ってるだろ……」

光矢はそう帝に言う。

普通ならば、精神病院やらカウンセラーやらが出てきそうな、イタイ発言。

しかし帝はあっさり、

「俺は死神だけど、人間界の食べ物なんか知らないよ」と、ふくれっ面をする。

それはまるで本当に死神のような口ぶりだった。

「だから食べ物じゃねえって」

「じゃあ何」

「……そうだなあ。魂がさまよってる的な？」

「魂がさまよう？ ……ああ、迷子人のことか」

帝はそう言つて、ポテチをもう一枚食べる。

それに光矢も慌てて一枚取ってから、

「迷子人って何だよ」

「そのままの意味だよ。輪廻が出来ずにさまよつてゐる魂のこと」

「だからそれが幽霊だつてば」

そう光矢はため息をつく。

それに帝は、若干不満そうに顔をしかめてから、

「別に幽霊だろうが迷子人だろうがどうだっていいけど……その幽霊がどうしたの？」

と、またポテチを食べながら聞いてくる。

それに光矢は肩をすくめ、

「出たんだよ」

「何が」

「幽霊」

「どこに」

「学校に」

「何で」

「知るかよ」

『言葉のキャッチボール』という言葉がピッタリな会話を、光矢は切り捨てた。

それに帝は不思議そうな顔で、

「迷子人が学校に出ることは珍しくないと思うけど？」

「いや、谷志野学園は築五年だ。今まで幽霊が出たことはないらしい」

「築五年だったのかあの学校？ それであんな落書きだらけなのか？ ……いや、まあ確かにそんなに新しく出て出るなんて珍しいな」

帝は考えるように顎に手を当てる。

それに光矢は、

「何か夜中に忘れ物を取りに行った生徒が、急に気を失ったとか」  
「ふむふむ」

「夜中にふざけて入った不良が行方不明だとか」

「ほおほお」

「色々噂があるみたいなんだけど」

「やっぱり夜中か。まあ、そうだろうけど」

帝は腕を組んで考えるポーズをする。この前たまたま見たドラマに出てきた腕組みが気に入ったらしい。それに光矢も腕を組み、

「お前、成仏させてあげれないのか？」

仮にも死神なんだし、と光矢は付け足す。

しかし帝は渋い顔をして、

「俺は案内人じゃないから、成仏は出来ないけど。でも、魂自体を消し去ることは出来る」

「……すまん、分かりやすく言ってくれ」

「だから、成仏っていう、魂をあの世に送ることは出来ないけど、ただ存在を抹消することは出来るんだよ」

死神らしいだろ、と帝は自嘲気味に笑う。

光矢はそれに、

「……ああ、そうか」

と一言しぼり出すように言うことしか出来なかった。

つまり、その魂が無かったことになるということだ。この世に初めから、その魂が存在していなかったということになる。

それは、される方もする方も嫌だろう。

すると帝が、

「……まあ、俺は人間の迷子人なんてどうでもいいから、やれって言われたらやるけど」

「いや、いい」

帝の提案を、短く、しかし強く光矢は否定する。

それに帝は、驚いたような顔になり、

「え、でも別に」

「いいから。やるな」

もう一度、光矢は言う。

今度は命令口調だった。帝は怒る素振りも見せず、

「あ……うん、分かった」

と意外とあっさりうなづく。

それに光矢は優しく微笑んで、

「んじゃ話はここまでにして、そろそろ宿題やろつか？」

「え、宿題嫌い」

「そんなこと言わない」

「だって俺授業寝てたから、宿題の量が倍なんだもん」

「起きてろよ」

光矢がそうため息をつく。帝は何故か嬉しそうに笑う。

まだ二人は、この平和が崩れることを知らない。

際川帝は女ではない。

まあもつと言え、人間ではない。

彼はれっきとした死神の生き残りであり、そしてれっきとした男である。光矢としては、どちらかというと後者の方がシヨックだったのだが。

ちょうど一か月前に彼と出会ってから、驚くことばかりが起きた。いきなり会って「契約しろ」とわめき立て、神は極悪人だと言われ、天使とかいう化け物に襲われかけ、さらに彼は命と大事なものを狙われているという事実。

「……………」

そこで光矢は顔をしかめた。

数日前に、また帝が「契約しろ」と言ってきたことを思い出した

からだ。もちろん、すぐに結論は出せないから待ってくれ、と言って時間稼ぎをしたのだが、それもいつまでもつか分らない。というかまず、どんな契約内容なのかも分からないで許可する奴がどこにいるのだろう。

「……………」

と、光矢は自分の横を歩いている美少女を見つめる。

谷志野高等学園の、セーラー服と普通の制服が合わさったような、女の子に人気だという制服を着込み、髪を下ろしている黒髪の美少女。

光矢は小さくため息をつく、その美少女に向かって、

「……帝」

「何？」

「いや、何でもないんだけど、ちょっと素朴な質問していいか？」  
「いいよー？」

その帝の返事に、光矢はうなずく。  
そして、

「何で……女装してんだ？」

と、その素朴な質問を投げかけた。

それに帝は、若干意外だとばかりにキョトンとして、

「へ？ 今ごろ？」

最もな一言であった。

「いや、まあそうだけど。なんか、タイミングがな」

「別に大した理由じゃないよ？」

「構わん」

そう光矢がうなずくと、帝は不思議そうな顔のまま、

「そうだな……例えば光矢は、今の俺がどんな風に見える？」

「へ？ どんな、って……」

光矢は歩いている帝の姿を改めて見つめる。

普通の女子 何が面白いのか分からないが、スカートの丈を異様に短くしたがる生物 よりは短くないが、それなりに短いスリ

「ト。とても男とは思えない、華奢な体。整った顔は、女顔では済まされないほどの美人だ。普通に街中を歩けば、アイドルのスカウトは楽勝だろう。」

「……うわべだけ美人なのは認めるけど」

光矢はそう、肩をすくめる。

すると帝は、とても男とは思えない、妖艶な笑みを浮かべ、

「……俺ら死神はね、他の神とはあまり仲良くないんだよ」

と、全く脈絡が無いことを言い始める。

帝は、はつきりしない物言いをする者は嫌いなくせに、自分は遠回しに言うことが多い。

だから光矢はため息をついて、

「それと女装と、何の関係が？」

「だから、まあ一言で言えばカモフラージュかな」

帝は少し小走りで走り、光矢の前で立ち止まる。風でスカートがふわりと浮き上がり、細い足が少し見える。

「女になれば、少なくともスカートを履いてれば、神とかも見逃してくれるかなー？　とか思ってた」

「効果あったのか」

「あったよ。現に天使が来たら一週間経ってるけど、全然来ないしね」

上手くいった、と帝は笑う。

それに、内心趣味でやっていたのかと思っていた光矢は、どこことなく恥ずかしい気分になり、

「……あっそ」

と、素っ気ない返事を返して、歩き出す。

すると帝が、ニヤニヤ笑いながら後ろをついてきて、  
「もしかして光矢、俺が趣味でやってると思った？」

核心をさらつと突いてきた。

それに光矢が言葉を返せずにいると、

「あー！　やっぱりそうなんだ！　うわ最低だ」



「いやだつて俺、死神の脳内なんか知らないし」

「俺、そんな女装趣味な変態じゃないのに」

「お前の場合、そうとしか思えないんだよ」

似合いですぎて、という言葉は付け足さない。光矢は帝の先を歩きながら言う。

すると帝が、小走りで光矢に追いつき、

「……………俺と会って、一分三十四秒で告白しちゃった光矢君の体  
験談？」

と、耳元で囁く。

それに光矢は、顔を真っ赤にさせながら、

「つぎやあああ！？ お、お前、それは……………」

「あっさり言つて来たじゃん。俺はお前にひとめ」

「やめてええええ！？ 古傷えぐるのやめてええええ！？」

光矢は耳を塞ぎ、叫ぶ。叫びながら、彼は人生最大の汚点の日を  
思い出していた。

帝と出会い、そして不覚にも一目惚れしてしまったこと。そして  
男だと分かった今でも、たまにドキドキさせられること。

この二つが汚点だった。

「……………」

後者については、もう重傷であることは分かっているのだが。

時は一か月前に遡る。

「あー、ちよつと暗くなってきたな」

あの日。学校でプリントを済ませていた光矢は、少しだけ薄暗くなつた路地裏を歩いていた。

「ていうか、相変わらずここは怖いなあ」

静かすぎる道に少しだけ恐怖を感じ、後ろを振り返ってみる。少し前にクラスの女子が言っていたが、この道は痴漢や通り魔が多数出現するらしい。前者は男に関係ないが、通り魔はさすがに怖い。

「怪しげな奴がいたら真っ先に逃げるか……」

と緊張感の欠片もないような台詞を吐き出し、鞆を肩に担ぎ直す。あまりにも静かすぎて、光矢の足音がやけに鮮明に聞こえてくる。時たま後ろを振り返って安全を確認する以外は、いつもと変わったところはない。

と、その時。

「……………ちやがれ……………！ おま……………騙し……………！」

「なら……………身体で……………！」

途切れ途切れだが聞こえてくる男の叫び声。それと共に大きくなつていく足音。

「え、まじで出たの通り魔！？ いやいやいや、ちよつと待てつて……………！」

光矢は慌てたように叫ぶと、電柱の陰に身を隠す。そのまま息を潜める。

「おいこらガキ！ 待ちやがれ！」

「逃げられる訳ねえだろ！」

段々大きくなっていく男の声と足音。通り魔にしてはずいぶんとやかましい。見つかりませんように、と光矢は祈る。

するとその刹那。電柱の陰からとんでもないモノが見えた。

今まで光矢が見たことないような美少女が、走っていたのだ。短いが艶やかな黒髪に、どこか優艶な雰囲気放つ黒い瞳。世界の「美」を集めたように綺麗に整った顔。男物の黒いパーカーを羽織り、首元を大胆に露出している。黒で統一された服装と容姿に白い肌がよく映えていた。

その美少女が何故か笑みを浮かべながら走っていた。手には三万円札が握られていて、それを風になびかせるようにひらひらさせながら、走っていた。

電柱の陰に隠れていた光矢は、一瞬だけ見えたその美少女に見とれてしまっていた。全身が歓喜の声を上げているようだった。

そして少女が見えなくなると、次はその少女の後を追うようにして二人の男が走っていくのが見える。必死の形相で、少女を捕まえようとするかのように手を伸ばしている。

しかしそれもすぐに消え去り、後に残ったのは光矢と静寂のみとなる。

先ほども暗くなった路地裏に、そよそよと風が吹く。風は光矢の髪を撫でるような優しさだった。

それでも光矢はしばらく動けずにいたが、やっとのことで、

「……………え、何今の」

と一言だけ呟いた。

それから彼は電柱の陰から出てきて、周りを見渡す。

普通の路地裏だった。何もない、ごくごく普通の路地裏。

しかし光矢は、まだ呆然としたような顔で、

「……………ええええ！？ さっきの何、幻覚！？」

と叫んだ。

しかし当然ながら、返事は返ってこないが。

「え、だってさっきの女の子……大丈夫なのか！？ 捕まったらだいぶまずいだろ！」

そう光矢はまた叫んで、女の子が走って行った方向へ走ろうとする。しかしその前に、行ってどうなるんだという考えが浮かんで来

たため、足を止める。

「俺なんか行っても、あの子を助けられる訳……」

「あの子ってどの子？」

「いや、さっきの美少女……え、誰？」

どこからか響いてきた声に無意識に返事をしていた光矢は、慌てて声の方を向く。

すると、

「ご心配ありがとう。でも、その必要はないよー」

と、ブロック塀の上に腰掛けている、何者かが言う。

肩までつくかつかないかの短い黒髪。大きな黒目。色白な顔は、綺麗に整っていた。

「……あ」

光矢は無意識に、そんな間抜けな声を上げていた。

何故なら、この目の前の美少女こそ先ほどまで光矢が考えていた、追われていたはずの少女だったからである。

その美少女はニコリと笑いながら、

「いやーまいったよ。この格好で『金ちょうだい。バイトするから』って言っただけで襲われかけたんだぜ？ 何のバイトと勘違いしたんだかなあ」

とか、とんでもないことを言う。

それに光矢は、若干相手側の気持ちも分からなくはないなと思っ  
てしまったのだが。

「だからお金だけふんどくつて、逃げてやったんだ」

してやったとばかりに笑みを浮かべ、口元に三枚の一枚円札が扇  
のように添える美少女。妖艶な雰囲気彼女の周りを漂い、光矢の  
鼓動はさらに早くなった。

何だよこれ、と光矢はまた考える。

「……どうした？ お前大丈夫か？」

急に黙ってしまった光矢を心配してか、美少女が光矢の顔を覗き  
込んでくる。

それが限界だった。

「……………だ……………」

「は？」

「……………好き、だ」

「へ？」

「好きだー！」

光矢はそう叫んだ。

美少女は哑然としている。当然だろう。出会ってまだ一分くらいしか経っていない男に、いきなり好きだと言われても困るだけだ。そこまで分かっていながらも、光矢は止められなかった。彼女の妖しげな雰囲気、飲み込まれてしまっていた。

こついうのを、一目惚れというのだろう。

「……………あ、あの」

美少女が口を開く。

「……………その、一つ言っていていいかな？」

そう美少女は、控え目に言う。

それに光矢は、うなずきながらも次の言葉を予想していた。何で？ とか、冗談じゃないわ、とか、そんな言葉だろう。

そう光矢はぼんやりと思って、たとえ後者のような言葉が来てもくじけないように、身構える。

すると、美少女が小さく口を開き

「俺、男なんだけど」

「そうなんだ。だけど俺も本気で……………本気……………え、今なんて言っただ？」

「だから、俺男なんだ」

「……………は？」

光矢はそんな間抜けな声を上げる。

その美少女の言葉を光矢が完全に理解するのには、しばらく時間が必要だった。

そして、かなりの間が空いてから、

「……………えええええ！？」

光矢は美少女　いや、美少年　から大きく二歩離れた。

「お、おとつ、男！？」

「うん、男」

「えええええ嘘だろ！？」

「嘘じゃないよ」

そう言つてクスクス笑うその姿は、女にしか見えない。

「まじかよ……」

男に告白してしまったことを理解し、そして一生のトラウマになるであろうことも容易く予想出来た。

肩をがっくりと落としている光矢に向かって、

「お前、名前は？」

見た目美少女な青年が聞いてくる。

それに、すっかり元気が無くなってしまっている光矢は、

「鈴木光矢」

「コウヤ、ね。いい名前じゃん」

「そりゃどーも」

「俺は際川帝。お前の事、ちょっと気に入った」

そう青年は言つと、光矢の目の前まで移動してくる。

すぐ目の前まで近付かれて、男だと分かっているはずなのにドキドキしてしまう光矢をよそに、帝と名乗ったその青年は笑みを浮かべる。

「お前が望むなら、女になってあげてもいいよ」

とか、訳の分からないことを言う。

「なに言つて」

「その変わり、条件がある」

光矢の言葉を遮り、帝が言う。そして、さらに光矢に一步近づいてくる。

それから帝は、およそ男だったら醸し出せないような妖艶な笑みを浮かべ、

「……だから俺と                      《契約》しろ」

と言った。

その言葉に光矢は、素朴な疑問を少女にぶつけた。  
それは、何の契約？    とか、何言ってるの？    とかではなく、も  
っと素朴な質問だった。

「君……………    本当に男の子なの？」

その言葉に、見た目美少女の美少年は、笑みをさらに深くした。

「……………や。光矢？」

「へっ？    うわ！？」

「完全にトリップしてたよ？」

ギリギリまで顔を近づけていた帝を慌てて押しのけてから、光矢  
はため息をつく。

あれから帝は、契約しないなら殺す、とか怖いことを言い出し、  
ちよつと待ってくれと光矢が頼めば、なら家に泊めろと言い出し、  
それから数日後にどんな手を使ったのか知らないが学校にまで潜入  
してきた。

光矢は覗き込んでくる帝の方を向いて、

「ちよつと考え事してただけ」  
とごまかす。

あの日と変わらず、綺麗に整っている顔。あの日ははっきり言っ  
て顔だけを見て告白した。

ただ、光矢は帝の性格も好きだった。あのあっけらかんとしてい  
るが、どこか不思議な性格。今でも自信を持って告白出来るだろう。

ただし、男だという点は受け付けられない。これは譲れないボーダーラインである。

「……………叶わない恋って嫌だねえ」

「何か光矢がそんなこと言っていると気持ち悪いぞ」

「ひつどいな、お前」

光矢が帝を睨むと、帝は全く反省していないように、笑う。いつもと違って、無邪気そうな微笑みだった。

そしてその笑顔にさえも、自分の動悸が激しくなるのを感じ、光矢はいよいよ自分が重傷なのを認めざるおえなかった。



## 学校を謳歌する霊

「みんな、おっはよー!」

帝の声が、朝の静かな教室に響いた。

朝一番から、教室のドアをこれほど元気よく開ける高校生はいないだろう。

するとそれに、もう教室に来ていた女子たちが、

「帝ちゃん、おはよう」

「おはよー帝」

「おっはよう!」

と口々に言い、男子たちも、

「おー際川だ」

「おっはよーう!」

「帝ちゃんおはよう」

と、帝に向かって手を振る。

それに帝も、溢れんばかりの笑顔で手を振り返す。

普通こんな美少女でモテたら、女子の陰険ないじめに合うのだろうが帝にはそういうのはほとんどない。

理由を簡単に言えば、最初の頃少しいじめた女子全員が、何故か大怪我をしたことにある。

その日から誰も帝に手を出さなくなったのだが、それを帝がやったということは、まだ判明していない。

「……? あれ?」

そこで光矢は声を上げた。

もう時間は、ホームルーム五分前の時刻になっていた。しかし、教室には半分くらいの生徒しかいない。

「おい、荒木」

光矢は教室で近くにいた女子　荒木　舞沙に声をかける。

金髪に染めた長い髪に、ちらりと覗くピアス。極限まで短くしたスカート　彼女は、お世辞にも偏差値が高いとは言えない谷志野学園で沢山いる、不良だった。

「何だよ光矢」

荒木がこちらを向く。

それに光矢は、一度教室を見回して、

「あのさ、何で今日はこんなに人が少ないんだ？」

「呪いだよ」

「はあ？」

「だから、幽霊の呪い」

荒木は真面目な顔でそんな事を言う。

「幽霊？」

「ああ。何か昨日遅くまで残ってた奴らが、全員休んでるらしいよ？　みんな幽霊の仕業だって言ってる」

「……馬鹿馬鹿しい」

「光矢って夢が無いんだ」

荒木がつまらなそうに言う。

それに光矢は苦笑いを浮かべ、そうじゃなくてももう死神やら天使やらが近くにいるから今更幽霊とか怖くないって意味なんだけど、とか思う。

まあ口には出さないが。

「……まあ、幽霊とか信じてねえし」

「へえ。でも帝は信じてるみたいだけど」

「は？」

光矢は帝の方を見る。

するとそこには、何故か涙目の帝が、

「ゆ、幽霊怖あああい」

と叫んでいて。

それを光矢以外の男女がなだめている。帝の肩をさすり、大丈夫

だよ噂だから、とか言い聞かせている。

しかし光矢は見ていた。

「……………」

半泣きで口元を抑えている帝が、笑みを浮かべているのを。

だから光矢は、半眼で帝を見つめた。呆れてものが言えないとはこのことだ。

するとその時、前のドアが開く音と共に、担任である三島が入ってくる。

「連絡があるから座れー」

そんなことを言って教卓に上る三島を眺めながら、光矢は席に座る。

後ろを見ると、帝もあっさり泣き止み、席に座っていた。

いや、最初から泣いてなどいなかったのかもしれないが。

三島は机の上に両手をつき、どこか寝ぼけたように、

「えー、今日は学校の六割が欠席だったので、ホームルームが終わったら、即解散とする」

何てことを、言った。

その瞬間男子たちからは歓声が上がリ、それを三島が注意する。

女子も表には出さないが、どこことなく嬉しそうな顔つきをしていた。

しかし、帝は。

「……………」

光矢は少し後ろを振り返る。斜め後ろの席に座っている帝は、厳しそうな顔になっていた。

整った顔をしかめ、難しいことを考えるかのように少し下を向いている。

その帝の様子に光矢は首を捻りながらも、三島の話聞いていた。

時刻は十時二十三分。

いつもなら二時間目の時間だが、学校閉鎖になったので、教室には誰もいない。

いや、ただ二人　光矢と帝だけは教室に残っていた。

「なあ、帝」

「何」

「お前、本当にやるのか？」

その光矢の言葉に、帝は薄く微笑む。

「うん。多分クラスメートたちが休んだのは、迷子人の仕業じゃないから」

「は？　幽霊の呪いじゃねえの？」

「いや、迷子人は、人に直接的被害は出せないんだよ」

「でも、たまにテレビ特集で幽霊が襲ってくるやつ見るぞ？」

いつかの夏の特集で見た、『幽霊の恐怖映像』という番組を思い出しながら光矢は言う。

それに帝は肩をすくめ、

「あれは迷子人なんかじゃないよ」

「じゃあ何だよ」

「……………魔物」

「は？」

「魔物だよ」

帝は、また厳しい顔つきになっていた。授業が行われていないので綺麗なままの黒板を睨み付けながら、

「魔物は、人間よりも地位が低い化け物で、度々人間を襲う奴らだよ」

「…………その魔物が、クラスメートを襲ってるってことか？」

「ああ、多分な」

帝は深刻そうにうなずく。

それに光矢も厳しい顔つきになり、

「……………許せねえな。クラスメートに手を出すなんてと、低い声で呟いた。それに帝もうなずき、

「俺も低俗な魔物が図に乗るなんて許せない」

「いや、俺はそういうことを言ってるんじゃない……………」

「大丈夫だよ。俺が魔物なんかぶっ倒してやるからさ」

「いや……………まあ、いいけどさあ」

光矢はため息をついて、机に突っ伏する。

それに帝はまた微笑み、教卓の上に座る。

……………どのくらい時間が経っただろうか。

魔物と呼べるようなものは来ないまま、二人はしばらく無言でいた。

「……………来ないな」

光矢が帝に言う。

するとそれに帝もうなずき、

「ああ、もしかしたらどっかに隠れてるのかもしれない」

「お前が死神だって気づいてるってことか？」

「そういうことだ」

帝は、思い通りに事が進まないことにイライラしてるのか、ふくれっ面になりながら、教卓から降りる。

そして何かを言おうと、帝が口を開きかけた時だった。

「……………!? 帝!」

突如として、壁が、床が、天井が、教室全体が紫色に輝き、染まり始めた。

「な、何だよこれ」

「離れる光矢」

帝は体勢を低くし、体中に力を溜めていく。手にはいつの間にか鎖鎌が握られていた。

「み、みか」

「あははハハはア!? オビえ口、ニンゲン!」

光矢の言葉を遮り、声がした。甲高い女の声。

そしてそれと同時に、光矢の背後から一人の女が飛び出してくる。漆黒のドレスを身に纏っている、スタイルがいい女。ただ、その顔には鼻が無く、目が三つもあり、口は口裂け女のように大きかった。

その女が、光矢に食らいつこうとした　その瞬間。

「俺の持ち物に触るな、下等な化け物が」

と、帝が鎌で女の首をあっさりはねた。

しかし、血は吹き出ない。

それどころか、首が離れた体が元気に動いて帝に襲いかかってくる。

「はあっ！」

帝は鎌を引き、放つ。

すると体がバラバラになり、かなりグロテスクな光景が広がる。

しかしそれも一瞬で、すぐに欠片は消えてしまう。

「光矢、大丈夫か？」

「あーうん、大丈夫……」

光矢は言いかけるが、その言葉は最後まで続かない。

「危ねえ光矢っ。逃げろお！」

帝がそう叫んだかと思うと、いきなり光矢の顔面を蹴飛ばしてきたからだ。

一週間ほど前にも同じ現象があったような気がする　と光矢は

ぼんやり思いながら、壁に激突する。

「ぐぎゃっ!？」

真面目に痛い。頭が揺れ、平行感覚が戻らない。

「……………いつてええ!？　何してくれてんだよおまっ……………へ？」

抗議の声を上げかけた光矢の言葉は止まってしまった。

教室の中に、先ほどの女が何人もいたからだ。いや、何十人もと言った方がいいかもしれない。黒いドレスから見える白い腕を帝に

向け、近づいてくる女たち。

それを見て、思わず光矢は、

「ちょ、帝！」

「逃げる光矢。お前を援護しながらはキツイ！」

帝は鎌を振り回しながら、そう叫んできた。

彼が鎌を振り回す度に女たちは徐々に数を減らしていくが、それでも何十人もいる数は後をたたない。しかし帝は滅茶苦茶な動きで鎌を振り回し、光矢を守ろうとしてくれて。

その帝のたのもしい姿に、まるでただの美少女に守られているような気分に陥り、光矢は若干落ち込みながら、

「あ……………お、おう」

と返事をし、痛む体を起き上がらせ、ドアを開ける。そのまま廊下を走る。

後ろからは、ガキインとかギインとか、派手な音が聞こえてくるが、彼は振り返らない。

「普通なら立場逆なんだけど……………」

苦笑しながらも、光矢は走る。ひたすら走る。廊下をダッシュし、階段を駆け上り、また走ったところまでが限界だった。

「も、無理……………」

ぜえはあと肩で息をしながら、光矢はしゃがみこむ。もともと彼は平々凡々な高校男児であり、体力もそんなにある方ではない。

「ま、帝……………なら、平気だろ……………」

と途切れ途切れに光矢は言っていると、ずるずると脱力する。

人間の彼には、化け物共の激しい戦いは遠慮させて頂くにかぎるのだ。残念ながら戦闘能力は並以下の光矢なので、帝の足手まといでしかないだろう。

それに、帝は見た目超然美少女だが、中身は凶悪俺様な死神

おまけにオス　なので、任せても絶対大丈夫という保証がある。

「でも、やっぱ守られてるって感じがするよな……………」

こんな足手まといと契約してどうすんだよ、と光矢は呟く。

もつと強い　例えば、天使やら悪魔やらの類たぐい　と契約すればいいのではないか。何も、こんな弱い人間と契約することはない。もしかすると、帝にも何か理由があるのだろうか。光矢を選んだ理由が、彼にはあるのだろうか。

しかしそうだとしても、

「分かんねえな……」

と、光矢は頭を掻く。

よくよく考えてみれば、光矢は帝のことをあまり知らない。

死神で、男で、でも見た目美少女で、どこか惹かれる　そんな存在だと思っではいたが、彼が何に狙われていて、どうして狙われているのかもあまり知らないのだ。

「……くそ」

何もしてやれない自分に対する自己嫌悪的な感情が込み上げてくる。

何も出来ないならいつそ契約してしまおうか、などとぼんやり考える。人外の者になるのも構わないのかもしれない。そんなことを考えてしまうほど、光矢は『際川帝』という存在に振り回されていた。

「　や。光矢」

いきなり降ってきた声で思考を中断され、光矢は顔を上げる。するとそこには、黒髪黒目の美少女　帝の姿があった。

「大丈夫か？」

そう帝が言う。

帝の顔で、帝の声で、いつもと変わらない口調で。

（ん？）

しかし光矢は、若干の違和感を感じた。帝だけど、どこか帝じゃないような、そんな感覚。

「……ああ。平気だ」

短く返答し、光矢は訝いぶかしげに帝を見た。だがいくら見ても、その美しい顔と細い体はいつもと変わらない。



それに光矢は肩をすくめて、

「……気のせいかな」

「何が？」

「いんや、こつちの話。もうあいつらは追ってこないのか？」

光矢は周囲をキョロキョロと見回すが、黒服の魔物女の姿は見当たらない。

「さすがは帝だな。やっぱ強」

「ああ、残念。もう時間切れだ」

いきなり、帝がそんなことを言った。

それに光矢は、

「……は？ 何言っ」

「もう少し、話していたかったな。人間と生で話したのは久しぶりだったし」

「へ？ お、おい帝？」

「あなたいい人ね。あの死神が好くのも分かる」

と、訳が分からないことを言ってから、帝は窓枠に足をかける。そして、

「バイバイ」

と笑顔で手を振り、あっさり飛び降りた。

「なっ！？」

光矢は慌てて窓の下を見るが、そこにはもう帝の姿はない。

まあ死神の彼が、たかが三階の高さで死ぬことはないと思うがあれ、ていうかあいつ最後女言葉じゃなかったか？ とか光矢は自問する。

「何なんだよ、あいつ……」

光矢はため息をつき、帝が飛び降りたのであろうと思われる場所を眺めていた。

彼が何を言いたかったのか、いくら考えても分からない。

光矢は肩をすくめてため息をつこうとした、まさにその時だった。「こおおおつやああああ！？」 居たああ見つけたあああつ！！」

とかいう絶叫が聞こえ、それに光矢が廊下へと視線を移すと、そこには。

「……帝？」

先ほど飛び降りたはずの、帝が走ってきていた。

自分からバイバイと言って飛び降りたはずなのに、何故か今必死の形相で駆けてきて、

「どおおこ行つてたんだよ！ 俺はてっきり魔物にさらわれたのかと……」

とか言つて、光矢の頭をはたいてくる。

それが意外と痛く癢に触った光矢は、

「はあ！？ お前がさっきまで訳分かんないこと言つてたんだろ！  
！」

「へ？ 俺は今初めてここに来ただけど？」

「え、だつてさっきまで俺と話してたろ？」

「いや、話してないけど？」

あっけらかんと言う帝の様子は、嘘をついているようには見えな  
い。

それに、そんな嘘をつく意味も分らない。

「……………」

なら。

なら、さっきの帝は何だったのだろうか。

そんなことを光矢は一瞬考えて

その日、光矢の悲鳴が学校中に響いたことは言つまでもない。

## 滑空する死神のフーガ（前書き）

番外編です。

ほのぼのです。バトルこそ死闘だ、ラブコメなんてけしからんと  
いう方は飛ばして下さい。

なおこれは一回消えてしまった作品を書き直したもののなので多少  
文章表現を変えました。ご了承下さい。

## 滑空する死神のフーガ

体育祭の種目決め、と書かれた黒板を、鈴木光矢はぼんやりと眺めていた。

染められた茶髪に、眠そうに緩んだ黒い瞳。中肉中背と形容するには華奢すぎる体は、机にだらしなく突っ伏している。

その体からは、やる気の欠片さえ微塵も感じられなかった。

「体育祭か」

めんどくさそ、と光矢は小声で呟く。

彼の人生において、体育祭というものにはいい記憶はない。

周りのクラスメートたちは、何が楽しいのか、本気で種目選びに没頭している。

しかし光矢には全くと言っていいほど興味がないので、

「……サボるか」

と、小さく呟いた。

そう。

これはいつものことだ。

体育祭なんていう競技を真面目にやる必要はない。

と、その時。

「体育祭なんて、私初めて！」

教室の後ろから、女にしては低く、男にしては高い、中性的な声が響いた。

その聞き覚えがありまくる声に、光矢は顔をしかめて振り返る。

そこには一人の美少女がいた。

艶やかな黒髪に、大きく、どこか妖艶な光を放つ黒い瞳。華奢な体には谷志野学園の制服を着込んでいる。

そんな美少女が小首を傾げて立っているという姿を見て、光矢は

ため息をついた。

彼は知っているのだ。この美少女、いや、美少年の真の姿を。  
「ドキドキするなあ、体育祭」

可愛いらしくそんなことを言う見た目美少女の男児 際川帝は、  
心配そうな瞳を黒板に向けた。

するとそれに、下心丸出しの男子生徒が、

「帝ちゃん、体育祭やったことないの？」  
と尋ねる。

その言葉に帝はうなずき、

「うん。前の学校ではほとんどサボってたから」  
「何で？」

その男子生徒の問いに、帝はどこか憂いが宿る微笑みを浮かべる。  
それにクラス中の男子が釘付けになるが、帝は全く気にしない。

「私、親が居ないから。みんなが両親見にきてるのに、私だけいないなんて、悲しいから」

何かを思い出すように悲しげな表情を浮かべ、しかしそれを取り繕うように笑顔無理矢理作る美少女の皮を被った悪魔。

しかし悪魔の顔を知っているのは光矢だけなので、クラスメートはみんな、帝が作り上げた嘘だけで構成されたエピソードに涙を流し、

「帝ちゃん、ごめんね変なこと聞いて！」

「これからは私たちがいるから辛くないわよ！」

「うつ……俺明日から全うに生きてくよ！」

茶髪や金髪に染めた不良たちが涙を流して感動しているという図は、感動というよりも恐怖に近かった。

光矢はそんな不良たちを憐れみの表情で見つめ、それから帝の顔に視線を移動する。

帝が光矢の視線に気づいたのか、こちらを向いた。

そして、笑みを浮かべる。

その笑みは、先ほどまでクラスメートに向けていた無邪気な笑顔

とは違う、妖艶な雰囲気漂うもので、その帝の裏表の激しさに光矢はため息をつきながら、しかし心の奥底ではドキドキしている心臓に叱咤を飛ばした。

放課後。

「光矢ー、なんでそんな拗ねてるの？」

「拗ねてねえよ」

何も分かってなさそうな帝から顔をそむけながら、光矢は歩いていた。

夕焼けで空が赤く染まっていて、帝の艶やかな黒髪が赤毛に見えるてしまう。

そんな短い髪を揺らしながら、帝が困ったような笑みを浮かべ、  
「悪かったよ、クラスメートに嘘ついて」

「大体お前はな、男のくせに男を誘惑するのが上手すぎるんだよ。お前の嘘のせいではとんど体育祭のこと決められなかったじゃねえか」

ふてくされたように光矢は言葉を吐き捨てる。

しかし帝は大して悪びれた様子もなく、

「まあいいじゃん。それよりもさ、光矢はなんの競技にするの？」

あっさりと話を逸らす。

その帝の態度に光矢はため息をつきかけるが、もう今さら何か言っても改正しない気がするので、なんとか飲み込む。

そして僅かな記憶を辿りながら、首をひねって問う。

「あー、何があったっけ？」

「障害物競走、玉入れ、借り物競走、大玉転がし、パン食い競走、二人三脚、騎馬戦、綱引きの中から二つ選ぶんだよ」

「よく覚えてんな」

「楽しみなのは事実だしね」

まるでクリスマス前日にプレゼントを心待ちにしている子供のよ  
うな表情をしながら、帝は歩いている。

そんな帝の背中に、光矢は、

「……お前は何にすんの？」

と問うと、帝はゆっくりと振り返ってくる。

そのまま少し考えるような表情を浮かべてから、

「まだ借り物競走しか決めてないけど……もしよかったら光矢、一  
緒に騎馬戦やらねえ？」

と、聞き返してくる。

その単語に、思わず光矢は顔をしかめた。

騎馬戦。

偏差値が低いだけに行事ごとには熱い谷志野学園の体育祭におい  
て、その競技は最悪の分類に入るものだった。

男女で組んだチームを、男子同時で組んだチームが嫉妬し、全力  
で潰しにかかる。

さすが不良校といったところだが、騎馬戦で何度流血騒ぎがあっ  
たかなどもはや数え切れないほどであった。

仮に光矢と帝が組んで出たとして、見た目だけは美少女の帝と組  
んだ光矢は、必ず殺される 必殺であった。

そんな結論を頭の中で出した光矢は困ったように苦笑し、

「別にいいんだけど、ちょっと守ってくれない？」

「何から何を？」

「男子たちから俺を」

「？ 別にいいけど」

首を傾げ、不思議そうな顔をしながらもつなずく帝を見て、光矢  
は安心したようにうなずいた。

見た目が美少女の帝に守ってもらうのは気が引けるが、帝はそもそも人間じゃないし、れっきとした男だからいいだろう　と、勝手に結論づけて納得した光矢は、それからたわいもない会話をしながら帝と共に帰り道を歩いた。

体育祭当日に何も起きないことを、心から願いながら。

それから一週間後。

体育祭の練習は、何とか無事に終わった。途中一回だけ帝にセクハラをしようとした男子生徒が理由不明の複雑骨折をしたという事件があったが、自業自得であるということで済まされたのでさほど問題ではないだろう。

そして今日、体育祭当日。

光矢がぼんやりと眺める視線の先では、玉入れが行われていた。先輩だと思われる男子生徒が玉を乱暴に投げる。カゴから大きく外れた玉は、その対極線上にいた男子生徒の頭に当たる。

「ああん!？」

頭に直撃を食らった生徒はキョロキョロと周りを見回した後、隣で玉を投げていた男子生徒の胸ぐらを掴み、

「てめえか!？　俺様の頭に玉なんぞ当てやがった奴は!」

「はあ!？　喧嘩売ってんのかゴラァ!」

「はあああん?」

「あああああん!？」

と殴り合いを始める二人の男子生徒。

それが引き金となり、今まで真面目にやっていた男子たちが一斉



に喧嘩を始め、結局やっているのは女子だけ

そんな光景を遠目に見ながら光矢は、呆れたような表情になり、  
「ああ、もう。玉を顔面に投げるな。玉は武器じゃねーってのに」  
と、小さく呟く。

しかしその光矢の突っ込みは全く届かず、大乱闘になってしまっ  
た玉入れが幕を閉じた。

「大変だな、こりゃ」

先ほど光矢が出た障害物競走も、後ろの方では乱闘があつたのだ。  
いつもなら不真面目なはずの光矢も、巻き込まれないように全力疾  
走でゴールした。

皮肉にも、そのおかげで二位だったのだが。

体育祭委員や生徒会の方々が玉入れの玉やカゴを片付けているの  
を光矢が眺めていると、彼の後ろから、

「体育祭中なのにしけた顔すんなよー」

という、かなり軽々しい男の声がし、同時に背中をこづかれる。

「んあ？」

怪訝そうな顔をして光矢が振り返ると、そこには金髪でニヤニヤ  
と笑みを浮かべている、口調と同じで軽そうな男が立っていた。

その男に光矢は、

「ああ、森田か」

「森田かって何だよ。不服か？ やっぱ可愛い女の子がいろいろか  
？」

「お前の頭の中はそればっかだよ」

うんざりしたように光矢は突っ込み、体育着の肩の部分を捲り上  
げる。暑いーと呟く。

すると森田も暑いのか、汗を拭ってから、

「おい光矢。せっかくの体育祭なんだからさ、ナンパとかナンパと  
かナンパとかしようぜ」

「いや、お前一回死ね」

「ひでえな。俺はお前の色恋沙汰を心配してるというのに」

「余計なお世話だよ」

「……んま、お前には超可愛い彼女がいるしな？」

と森田は軽薄そうな笑みをヘラヘラと絶やさずに、校庭の真ん中辺りを指差した。

光矢が視線を向けると、そこには人が数え切れないほど群がっていたが、その中でも浮いて見える美少女がいた。

借り物競走の列の最前列にいる、黒髪黒目で色白な、スタイル抜群の美少女を見て、光矢は首を振る。

「あいつは彼女じゃねえ」

「またまたー？ ラブラブだって噂だよ？」

「お前が流してんだろぅが」

「まあね。………しかし、こうやって見ると、さ」

森田はそこで言葉を止め、品定めをするように目を細めて帝を見つめる。

そして、一言。

「胸ないよね、帝ちゃん」

「な お前、そん……ゲホゲホッ」

慌てすぎて咳き込む光矢に森田は笑い、

「安心しろよ、本人には言わねえからさ。女の子なら一度は通る道だよ、うん」

いや、男だし という突っ込みはあえて入れない。しかし改めてそう考えると、確かに疑問が浮かんでくる。

女性特有の柔らかさなどが無い帝が男だということがクラスメイトや学校の関係者バレないのだろうか。それともあまりにも顔が美少女すぎるから気づかないだろうか。

そんなくだらないことを真剣に考えようとした光矢の思考は、

「あ、ほら光矢！ 帝ちゃんスタートしたぞ！」

という森田の叫び声で遮られた。

光矢がそちらを見てみると、確かに校庭では借り物競走が始まり、先頭をぶっちぎりで帝が走っていた。

まあ活動しているのかしていないのか分からない、しかも人間の陸上部に勝ち目などないことは分かっているのだが。

「速いな、やっぱ」

あれで手加減しているのだから、末恐ろしくなってくる。

二番手と十秒ほどの差を開いたまま、借り物の紙が書いている中間地点に帝が到着する。そのまま彼は受け付けらしき人から紙を貰う。それをしばらく見つめた後、キョロキョロ周りを見回し始める。

「あいつ、何やって……」

そんなことを言いかけた光矢の言葉が止まった。

周りを見回していた帝が、光矢の方角を捉え、ニヤリとした小悪魔的笑みを浮かべて、こちらへと走り出してきたからだ。

「え、何で帝ちゃんこっちに……」

こちらへと一直線に駆けてくる帝を不審に思ったのか、そう森田が言いかける。

しかしその刹那、帝が観客席に飛び込んでくる。観客からはどよめき上がるが、帝はそんなことは全く気にせずに光矢の襟首を掴み、そのままずると引きずって

「って、待て待て待て待て！ お前、ちょっ、ぐえ、何で俺をつ」

「借り物！ お前が 필요한の、光矢！」

そんなことを叫んで、帝はどんどん光矢を引っ張る。

森田はそれを見ながら、愛だねえ、とか何とかふざけたことをぬかしてお前後で絶対殺おおおおすと光矢が叫ぶ間もなく、距離が離れていく。

「帝、息！ 息できなっ」

「なら自分で走れ！」

「ってかお前何マジになっちゃってん……」

そんなことを言いかけた光矢だったが、帝が急停止したために顔面から盛大に地面に突っ込み、言葉が止まる。

しかし帝はそんな光矢のことなど気にも留めないといった感じで、受け付けの生徒に借り物の紙を渡していた。

「お、お前っ」

抗議の声を上げながら立ち上がる光矢を指差し、受け付けの男子生徒が言う。

「じゃあ、その人が？」

すると帝はいきなり光矢の腰あたりに抱きついてくる。

「うお、いきなり何す……」

しかしやはりその声は、例によって例のごとく、遮られる。

「はい！ この人が私の彼氏ですっ！」

そんなことを帝が叫び、それに光矢が反応する間もなく、

「そうだよな？ ダーリン？」

とかなんとかふざけたことを、光矢を見上げながら言うてくる悪魔な死神。

その瞳はららんと輝いていて、そうだよなー？ と脅しをかけてきている。

しかし。

しかし光矢も男であり、そんな脅しに屈するような情けない人にはなりたくはないと考えていた。

だから彼は。

精一杯に声を張り上げて、言うてやった。

「も、もちろんだよ、ハニー」

「だよなー」

どうやら彼が帝を超える日はまだまだ遠いようである。

それから帝が、一位の証であるトロフィーを嬉しそうに貰う様子を光矢は横目で眺め、疲れたようにため息をついた。

「お疲れ様、光矢君」

「そう思うなら騎馬戦は休ませてくれないか？」

「駄目」

「……………まあ、分かってたけどさあ」

呆れたように頭を抑え、首を振る光矢。

すると帝はニヤニヤと笑みを浮かべながら、

「嫌だなあ、光矢君。私は君のことを考えているんだよ?」

「つてお前、誰?」

「シャーロック・ホームズ! 図書館の本で読んだ!」

「あつそ」

そんなことを言い合いながら二人は、騎馬戦のスタート場所へと移動する。

移動しながら光矢は、帝の方をチラリと見る。こんな人間のちっぽけな体育祭の借り物競争で本気になっていた、死神の姿を見る。

一位を取ってご機嫌なのか、ニコニコと笑みを絶やさずに歩いている美少女の顔を見て、光矢は、

「……………」

何か声をかけようと思って口を開きかけたが、すぐにその口をつぐんでしまった。

そうこうしているうちに二人は、もう騎馬を作っている仲間

紅組に混ざる。

先に歩いていた帝が振り返って光矢に目配せをしたと同時に、彼は帝を背負った。

そして目を見開き、率直な感想を一言、

「お前、軽っ」

「そりゃそうだよ。俺は死神なんだから」

「いやまあ、そうだけど」

そんなことを光矢は言っつて、スタートラインに立つ。

「……………」

相手の白組の準備がまだなのか、それとも紅組がまだなのか分からないが、なかなか合図の笛が鳴らない。

ドキドキと鳴り響く自分の心臓を感じ、何でこんな体育祭ごとき

に必死になつてゐるんだらうと自問してみる。

その答えは、自分が背負っている、見た目だけが美少女な死神なのだろうか、と考えてみる。

「光矢」

と、その時。ふいに名前を呼ばれ、光矢は上を向く。

自分が背負っている、見た目だけは可愛い死神の方を向く。するとそこにはいつもの、自信満々な顔をした帝がいて。

「俺が指示するから、その通りに従えよ？」

「何で俺が従わなくちゃいけないんだよ」

そんな光矢の抗議に、帝は薄く笑みを浮かべる。

それは、妖艶ようでもあり、可愛らしくもあり、無邪気そうでもあったが

唯一はつきり分かることは、何よりも美しいということだった。

「契約者は、主人の言うことを聞くもんだぜ？」

そんな無茶苦茶なことを言ってくる帝に、光矢は。

「……………そうだな、ご主人様」

何か言い返そうと思ったけど、止めた。

と、その瞬間。

スタートの合図である笛が、校庭にけたたましく鳴り響いた。

うおおおおおおおという雄叫びが上がり、紅組と白組が一斉に地を蹴る。

「帝！ 俺はどうすりゃいいんだ！？」

光矢も同時に走り出しながら、叫ぶ。

すると頭上から、

「とりあえず俺が止まれと言ったら止まれ！ それまで全力で走れ！」

「……………止まっていいいのか？」

「ああ！」

騎馬戦というのは、速さで競うような競技だ。速さとチームワークで相手のはちまきを奪う。ある意味、かなりの技術が必要とす

る。そんな競技で『止まる』という行為は、禁則<sup>タイ</sup>である。そんなことをして、一体帝は何をやろうというのか。

帝の思考回路が、光矢には全く理解出来ない。

「……………」

しかし、彼は従うつもりであった。光矢は心から、帝のことを信賴していた。

「了解」

短く返答した言葉が帝に届いたのか届いていないのか、そんなことはどうでもいい。

光矢は走る。

ただただ走る。

そして数秒後、もう少して白組と接触する、というタイミングで、帝が声を張り上げた。

「止まれ！」

凜とした声はよく響き、光矢の周りの騎馬でさえ止まってしまっただけであった。

「どうする！？」

「そのまま動くな！ 俺が何とかする！」

何とかってまさか殺す気じゃないだろうな、とか突っ込みそうになるが、その前に目の前から迫ってくる白組の集団を見て、ってかお前が何とかする前に俺死ぬんじゃない？ と光矢は心の中で呻く。

この前は天使とかいう奴が来て殺されかけたけど、今度は人間に踏み潰されまくって圧迫死<sup>ス</sup>っていうね、なんかもう不幸すぎて笑っちゃうよという展開。

そんな展開が、光矢に襲いかかろうとした その刹那。

「いやあああああああ！？ みんなが私のこと襲おうとしてるうつうつうつ！？」

という、鼓膜が破れかねないほどの大声が、光矢の上から響いてきた。

「……………は？」

思わず間拔けな声を上げてしまった光矢をよそに、声はさらに響く。

「私、みんなのこと信じてたのにつ！」

そんな、泣き声が混じった声を聞いた白組のメンバーが、呆然とした表情で止まる。ショックを受けたような、驚いたような表情で、固まってしまう。

そこでやっと帝の策略に気付いた光矢は、内心汚いとは思いつつも、

「今だ紅組！ やっちまえ！！」

と、声を思い切り張り上げて叫んだ。

するとそれに応えるように、紅組の騎馬が叫び声を上げ、固まっている白組に突っ込む。

それと同時に光矢たちも白組に突っ込み

勝負は目に見えていた。

「いやー、紅組勝利なりっ」

「勝ち方はかなり汚かったけどな」

「勝ち方なんていいんだよ、勝てればなんでもいいのさっ」

学校の屋上に不法侵入をした帝と光矢は、夕焼けで紅く染まった空を見上げていた。



それはまるで、紅組の勝利を祝福しているかのような空だった。

帝の黒髪が風に吹かれてそよそよと揺れるのを見ながら、光矢はため息をつき、

「でもまあ結局、役立たずのままだったんだよな、俺」

と、自嘲気味な笑みを浮かべながら呟く。

すると帝が、いきなりこちらを向き、ニコニコとした爽やかな笑みを浮かべ、

「んま、俺に守られてるぐらいだしな！ 男として、光矢君失格！」「つてそりゃそうなんだけどさあ……」

図星をさされて少し落ち込む光矢。視線を屋上の床に落とす彼を見て、帝は浮かべていた笑みを顔から消す。

そして口を小さく開き、

「あのさ、光矢」

「……何？」

「二度と、そんなこと言うなよ。俺の契約者は、そんな弱気じゃ務まらないぜ？ 本当に男失格になっちゃうよ？」

少しだけ真剣な顔をして、帝は光矢の顔を覗き込んでくる。

その帝の言葉に光矢は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに真顔に戻り、微かに微笑みを浮かべる。

そして一言、

「……………ああ、そうだな」

と、小さく頷いた。

谷志野学園体育祭の日。

そんな、なんでもないような日に、死神と契約者の間では何かが変化した。

## 苛立ちと悪魔

「帝、遅せえな……」

放課後。

校門の上に腰掛けながら、光矢はため息をついた。

ここ数日夕焼けばかりの空を見上げる。梅雨時が過ぎ、晴れの日ばかり続いていた。雨の日が嫌いな光矢にとってはいいことではあるが。

光矢は無言のまま、校舎の方を振り返る。帝の姿を確認しようとしたが、まだそのような人物は見当たらない。

「あのクソ教師が……」

憎々しげに光矢は言葉を吐き捨てた。クラス委員でもない帝に手伝いを頼んだあの教師は、どう考えても下心丸出しである。

「まあ万が一帝に襲いかかっても、泣きを見るのはあのクソ教師の方だけだな」

と誰に語りかける訳でもなく光矢は呟き、つまらなそうに足をブラブラさせた。

足には、一昨日行われた体育祭の筋肉痛のダメージがまだ残っている。

体育祭でも帝は大暴れだった。借り物競争では関係ないはずの光矢が巻き込まれ、騎馬戦では、無駄に帝が女の子になったりと色々大変であった。まあ最終的に勝ったからいいのだけれど。

「あー、動かすだけで痛い」

光矢は、顔をしかめてそう呟く。

しかしなぜか彼は足をブラブラさせたまま、思考を開始させていた。

数日前から、帝との契約のことばかりを考えている。恋心、とい

う訳ではないが、彼の役に立ちたいと純粹に思っていた。

帝がこんな役立たずを選んだのには訳があるはずだ。だが、それが彼には分からない。

「……………直接聞く訳にもいかないしなあ」

と光矢は呟き、また空を見上げる。しかし紅い空は、当然ながら何も答えてはくれない。

それに光矢は自嘲気味な笑みを浮かべると、帝の姿を確認するべく、もう一度校舎の方を振り返ろうとした。その時。

「こんにちは」

横から、光矢よりも低い男の声が聞こえてきた。

光矢がそちらを向くと、そこにはいつの間にか一人の男が立っている。

少し長い黒髪を後ろで結んでいる。切れ長の黒い瞳に、外国人風に整った目鼻立ち。黒い服に黒い靴。という、全身が黒で統一された男。

その男の姿を見て、光矢は首を傾げる。その男に全く見覚えがなかったからだ。

すると男は、そんな光矢の疑問を解くかのように、「すみません。あの、少しお聞きしたいことがあります」と、とても丁寧な口調で言ってくる。

光矢はその言葉に、納得するかのようにうなずいた。ここ がみた 上田市の地図は複雑だ。道案内を頼まれることも珍しくはない。

だから光矢は、校門の上から降りて、

「いいですよ」

と、にこやかに笑う。

すると男も安心したように微笑む。そして光矢に一步近寄ると、

「良かった。なら……………」

そこでまた一步近づく。

そして、あくまでもニコニコとした笑みは崩さないまま、

「なら 死んでみるよ」

と、言った。

光矢の脳は思考を止め、男の言葉を反芻<sup>はんすう</sup>するように連呼した。そしてやつとのことで光矢が、

「……え？ それはどういう」

と言いかける。

しかしその次の瞬間、男が光矢に向かって殴りかかってきた。人間を遥かに越えた速さで光矢に襲いかかる。

「……つく！？」

光矢は反射的に体を逸らす。頬に焼かれるような痛みが走った。拳がかすったのだろう。

しかしそんなものに構っている暇はない。

「う、あ」

バランスを崩して光矢は地面に倒れこむ。恐怖が体全体を包み込むが、光矢は歯を食いしばり、男を見上げた。

男には黒い羽根が生えていた。

先ほどまで無かったはずの黒い羽根が、今はその存在を知らしめるように動いている。

「つな、何なんだよお前」

光矢が勇気を出して絞り出した言葉は、震えている。

それに男は、愉快そうに笑った。しかしその笑みは先ほどの優しいような微笑みではない。

それは、まるで悪魔のような、冷たい微笑みだった。

「君と、その主<sup>あるじ</sup>の死神との絆の強さを確認したくてね」

「き、絆……？」

「そう、絆だ。もし絆が強くて　あの死神が君を助けに来たなら、俺は君たちには手を出さない。だが、もし来なかったら……」

そこで男は言葉を切り、急に真顔になる。

そして、

「……君を殺す」

と男はあっさり言った。

「っ!？」

殺す、という言葉聞いたと同時に光矢は立ち上がるとする。  
逃げた方がいいと彼の本能が告げていた。

しかし、それに男は、

「無駄だよ」

と手を光矢の前に差し出す。するとその手の周りからまがまがしい紫色の光が溢れてきた。

「これは《悪魔の契約》と言って、死を与える魔法だ。軽く二十メートルは飛ぶから、君の姿を捉えるなんて容易い」

その男の言葉に、光矢は今度こそ恐怖に支配される。

絶体絶命、救いようがないピンチ。

「死神も来ないことだし、そろそろ死のうか……鈴木光矢君？」

男はそう言くと、紫色の光に包まれた手を光矢の胸の前へと突き出してくる。

しかし光矢は動かない。ここで動いたら、少しでも早く殺されてしまう。可能性が無くなってしまう。

今は信じるしかないのだ。あの見た目美少女の死神を。

だから光矢は今にも崩れ落ちそうな足に力をこめ、男を睨みつける。

「我は今穢らわしい契約を交わし」

男が何かを唱え始める。詠唱が進む度に紫色の光が大きくなっていく。これが当たったら死ぬということは容易に想像できる。

しかし。

「……へ？」

かなり緊迫した状況なのにもかかわらず、光矢の興味は全く別の方向に向いていた。

それは彼の視界の隅。

そこには、何かが宙を舞っているという不思議な光景が広がっていた。

よくよく見ると、宙を華麗に舞っているのは、自販機で発売中の

『すつきりライムソーダ』の缶だということが分かる。

なぜ缶が宙を舞ってるの？　っていうかそもそもなぜ『すつきりライムソーダ』をチョイスしたの？　という光矢の疑問をよそに、ライムソーダの缶は綺麗な放物線を描き、男の頭へと、  
「力を放ぐあッ！？」

直撃した。

手から紫の光を消して頭を抑える男を呆然と眺め、光矢は口をポカンと開けていた。

それは死ぬのを免れたという安心感と、缶がなぜ飛んできたのかという疑問が原因なのだが。

「な、なにが」

「ごめん。手が滑っちゃった」

そんなわざとらしい声が光矢の横からする。と同時に一人の少女が現れる。

短い艶やかな黒髪に、妖艶な黒い瞳。細身の体には谷志野学園の制服を纏い、左手には『すつきりライムソーダ』の缶が握られている。

その美少女を見つめ、光矢は呆然と、

「……帝？」

と呟く。すると帝は綺麗に整った顔をこちらに向け、笑みを浮かべると、

「ごめん光矢。遅くなっちゃった」

「帝……。お前、その缶」

「あ、これ？　これはね、自販機で売ってたから光矢に買ってきたの」

「お前の分は？」

「さっきどこかに飛んでっちゃった」

無邪気そうな顔で笑う帝を、光矢はこの日だけは怖いと感じた。

「あー、その、帝」

「ん？」

「ええと、何て言えばいいのかな……」

光矢はしばらく言葉を探すように考えていたが、やがて視線を帝の左手の中にある缶に移し、それから地面に転がっている缶に向け、最後に頭を抑えてこちらを睨みつけてくる男に視線を向けた。

すると帝が、まるでたった今存在に気付いたような、わざとらしく驚いた声を上げて、

「お？ これはこれは、この前俺に忠告してくれたロイ君じゃないか！ 奇遇だねえ」

とか言う。それに光矢も驚きの表情になって、

「ええ！？ お前こいつ知ってんの！？」

と帝に聞くが、帝はそれに薄く笑みを浮かべただけで答えない。

すると男 帝がロイ君と呼んだ は、顔をしかめて、

「ずいぶんと丁寧な歓迎じゃないか、死神」

「お前に教えてやろうと思っただけ。まず下等なお前ら悪魔は、俺に会うことすら許されないこと。前に会った時もそうだが、俺の名前は死神じゃなくて際川帝であること。そして……」

そこで帝が、初めて笑みを顔から消した。敵意むき出しの表情でロイを睨みつけ、

「そして 俺の持ち物及び契約者に手を出したら、容赦しないでお前を殺すということだな」

と低い声音で言う、手を前に突き出し何かを呟く。するとその次の瞬間、帝の手の中には鎌が握られている。

いつの間にか握られていた鎌を帝は構え、

「さあ、言い訳を聞こうか？」

と静かに言い放つ。

いつになく怒っている帝に、光矢はごくりと唾を飲み込む。

しかしロイは余裕そうに笑って、

「この前はもつと優しくしたのになあ？」

「俺は契約者は大事にするタイプだね。光矢に手を出したら優しくねえよ」

「はは。それでその鈴木君は、君と契約してくれたのかな？」

「まだ、だ。契約は契約者の同意の上行う。無理矢理は出来ない」

「君は鈴木君を過大評価しすぎだ。人間なんて、自分の命を危険にさらしてまで契約したくはないという考えの持ち主なんだぞ？」

お前はお人好しなのか、とロイはため息をつく。それからチラリと光矢を見て、

「まあ、ほとんどの確率で死ぬ契約をしたがる人間も珍しいがな」とか、言う。

そのロイの言葉に光矢は、

「は？ 待てよ。契約するとほとんどの確率で死ぬってどういうことだよ！？」

と叫ぶ。

するとロイは、小馬鹿にしたような声を上げて、

「はは。言っていないのか？」

と帝の方を見るが、帝はロイから顔をそらすだけで答えない。

それにロイは再び光矢の方を向き、

「なら言つてやろう。死神の契約はな、普通悪魔やら魔物とやるもんなんだ。もし人間とやったら その人間は九十九パーセント死ぬ」

「んなつ……」

光矢は言葉を失った。

それから帝の方を見るが、帝は相変わらず目を合わせてくれない。するとロイは帝に向かつて、

「だからお前は契約が出来ないんだろう？ そこまで契約者に情を移す死神はお前だけだな」

「黙れ」

帝は吐き捨てるように言ってから、ロイを睨みつける。

「何しようと俺の勝手だ。お前から下等生物が指図をするな」

「そういう態度がいつまで続くのか見てみたいな。契約をしなければ、お前はやがて神に負ける」



ロイは地面に落ちている缶を拾い上げる。少し自分の体から缶を離して、蓋を開ける。当然中からは炭酸が吹き出してくるが、ロイはそれを気にしていない。吹き出す炭酸を楽しげに眺めている。

それに帝は、

「お前。何しに来たんだ？」

と、もつともな事を問う。

するとロイが顔を上げる。炭酸の噴水が終わったのか、ロイはラムソーダを飲む。

そして缶から口を離すと、笑みを浮かべ、

「お前が居ない間、天界ではだいぶ動きがあった」

「はっ。俺は天界のゴタゴタに興味は」

「また、神魔戦争が始まったんだよ」

ロイは帝の言葉を遮り、言う。

すると帝は目を見開き、

「神魔戦争？　ありや二百年前のことだろうが」

「また始まったんだ。前回より規模は小さいけどな」

「嘘だろ……。勢力図は？」

「天使が一万クルード、その味方の精霊が千三百。そして悪魔が二万クルード、その味方の魔物が三千だ」

変な戦争の名前やら、訳の分からない単位が出てきた会話に、光矢は首を傾げる。

しかし帝とロイの会話は続いていた。

「問題ないな。お前らが勝つ」

「それでもないことが発覚したんだよ。墮天使及び混血魔族が寝返った。その数は三万クルードだ」

「うっわ、最悪だな。中立を保ってたあいつらが、天使の味方になんて思ってもみなかつたけど」

帝は顔をしかめて、腕組みをする。考えるようにしばらく目を閉じてから、

「お前は俺にどうしてほしいんだ？」

とロイに尋ねる。

するとロイは肩をすくめて、顔をしかめる。

それから、ため息を一つ吐き出すと、

「ものすごい、言いにくいことなんだ。俺の意見じゃないことをふまえて聞いてくれ」

「ああ、分かった」

そう帝がうなずくと、ロイは小さくため息をつく。そのまま帝を見据え、

「お前に、天使共の囀になつてもらいたい」と、言った。

それに帝は、

「……………」

黙っている。今の言葉の意味を考えるように黙り込んでいる。

「……………」

必死に答えを探すように目を閉じ、黙っている。

「……ああ、そういうことか」

不意に帝が声を上げ、目を開いた。

それに光矢はロイを警戒しながら、小声で、

「帝、どういうことだ？」

と聞く。

帝はそれに、ロイの方を向いたまま、

「つまり、天使に追われてる俺が囀になつて逃げている間に、お前らが天使たちに攻め込む、という作戦だろう？」

「ああ、そうだ」

ロイはうなずく。

それに光矢は、

「てめえ、ふざけん」

「そんなことで天使共の注意が逸れるのか？ そんな無意味で幼稚で利己的な作戦は……………」

「いや、意味はある。もうその作戦の詳細は考えてあるんだが……………」

そこでロイは、ちらつと光矢の方に目を向け、

「ここで言つと鈴木君が怒りそうだ」

「ああ！？ 怒るに決まってるんだろ！ なんて帝がそんな役を  
そう言いかけた光矢の肩を、帝がぽんつと叩く。」

光矢が帝の方を向くと、帝はいつもの妖艶な笑みを浮かべ、

「俺なら大丈夫」

「い、いやでも」

「何？ 異論でもある？」

「いやありません……って今回だけは駄目だって！ 死んだらどう  
すんだよ！」

「俺は死なない」

何の自信があるのか、帝はそう言い切る。

それに光矢はまだ何か言いたげな顔だったが、その前に帝がロイ  
に向かつて、

「いいだろう。その作戦、のってやる。ただ、俺に見返りがないの  
は納得出来ない」

「ああ分かってる。何が望みなんだ？」

「それは成功してから考える。とりあえず今は……」

そこで帝は言葉を切り、光矢の方を振り返ってくる。

そしてそのまま鋭い笑みを浮かべ、

「光矢も一緒に 図に乗ってる天使共を出し抜く作戦とやらを聞  
こっじゃないか」

と言ったのだった。

## 過去と刹那の果てに

それは遠い記憶だった。

『レミ、気を付けろよ』

『ミカドこそ』

『分かってるよ。まあ、俺は戦争に参加しないけど』

その帝の言葉に、黒い羽根の少女　レミ・ヴァーニヤは可愛いらしい笑みを浮かべた。

長い、艶やかな黒髪に、無邪気そうな金の瞳。口元には目立つ牙が生えていて、彼女が悪魔だということが分かる。

レミは何が楽しいのか、ひょこひょこ帝の方を見上げ、

『それより私、この戦争が終わったらミカドのお嫁さんになるんだから！』

『ああ、楽しみにしてるよ』

『だから、死なないでね』

『お前こそな』

そこで二人は、小指と小指を絡める。これは人間のしきたりで、約束する時に使うらしい。

だから二人は、小指を絡めたまま微笑み、

『絶対約束。破ったら許さないから』

と同時に言って笑った。

あの日交わした約束。破ったのは、彼女の方だった。

破ったら許さないと言ったはずなのに、彼女はその約束を破った。絶対死なないで、結婚するという約束を。

それ以来彼は　際川帝は、他人に情を移さないようにして生きてきた。

悪魔が死のうが天使が死のうが、関係ない。もちろん人間が死ん

でも関係ない。

ずっとそうやって、死神らしく生きてきたはずだったのに。

「かど」

何故俺は、あんなにも『鈴木光矢』という人間に惹かれるのだろう？ と、彼は考えてみる。

その答えはまだ見つかっていない。

「帝」

告白されたから、ではもちろん無い。告白してくるだけの奴なら、それこそ腐るほどいる。

なら何故だろう。

光矢だって、他の人間たちと同じように容姿だけ見てきて告白してきたのに、いつもと同じように蹴り飛ばさなかったのは何故だろう？

そこまで考えた時に、ああ、と帝は気付いた。

似てるんだ、レミと光矢はすごく。

「帝っ！ 起きろって！」

その光矢の言葉に、帝はうつすらと目を開く。黒い、綺麗な瞳が徐々に開いていく。

「うつんー？」

目の前には、光矢の顔が視界いっぱいに広がっている。

「……光矢、おはよう」

目をこすりながら帝が言うと、光矢はげんなりのため息をつき、「お前なあ、会議中に寝るなよ。一応お前がメインなんだぜ？」

「ごめんごめん、眠たくてさ」

目をこすりながら帝は伸びをする。

体の関節を伸ばしながら、

（何か夢見てたような気がしたんだけど……忘れちゃった。何だっけな？）

と心の中で呟いた。

しばらく考え込むように首を傾げていたが、やがて諦めたように首を横に振る。そのまま顔を上げる。

横には光矢。その横にはロイ。そのさらに横には、見知らぬ悪魔がずらりと並んでいる。

それに帝は妖艶な笑みを浮かべて、

「んで、どこまで話進んだんだっけ？」

「だから、お前が死神の魔力を放出させて天使をおびき寄せるってどこまでだよ」

光矢が肩をすくめる。

それに、ああそういえばそんな話してたなあ、と帝は思い出す。

それからもう一度だけ、何の夢を見てたんだっけなと考えてみるがどうしても思い出せない。

それに帝はため息をついて、

「で、作戦は？」

と聞くと、ロイがこちらを見て、

「簡単だ。際川に人が居ないようなところへ行ってもらって、死神の魔力を出してもらう。そして後は罠になって逃げていてくれれば、上手くいく」

「本当に、俺なんかが罠になって天使たちに動きはあるのか？」

「あるね。多分天使は、君を完全に捕らえたいはずだ。だから上級天使を送り込むに違いない。上級天使がいなくなれば、こちらにも勝機がある」

何てことをロイは言った。

それに光矢は分かっているのか首を傾げているだけだったが、帝はうつすらと笑みを浮かべる。

帝一人が罠になって逃げるだけで、戦争が上手くいく？

戦争がそんなに甘くないことは帝がよく知っている。前回の神魔

戦争で身をもつて知った。

だから帝は笑みを浮かべたまま、

「俺が囷になれば、お前らは戦争に勝てる？」

「ああ、そうだ」

あつさりロイはうなずく。

しかしそれに帝は、鋭く目を細める。若干の殺意を込めた眼差しをロイに向け、

「嘘をつくなよ。そんなことで解決するほど、戦争は甘くない。お前らは一体何を企んでる？」

と低い声音で言った。

まあ、利己的な悪魔の考えることなどたかが知れているんだけど、と帝は心の中で付け加える。

案の定、ロイは何も言わなかった。他の悪魔たちも顔を蒼白にしてこちらを見ている。

一瞬にして空気が凍りついたのを帝は感じた。

しかしそんな中で、

「……帝、俺ついていけないんだけど？」

光矢は分からないのか、首を傾げてこちらを見てくる。分からないのも無理はない。

彼は汚れの知らない、綺麗な世界で過ごした《人間》なのだ。

世界の裏側　つまり、神界があんなにも汚く薄汚れているなんて知らないだろう。

だから帝は微笑んで、

「光矢分からないの？」

「えーと、うう、すみません」

「責めてる訳じゃなくて。光矢は綺麗だなと思って」

「は？　綺麗？」

訳が分からないというように怪訝そうな顔をする光矢。

帝はそんな光矢から目を逸らし、机の向こう側にいる悪魔たちを睨みつけた。

「……あんたたち、俺を困じゃなくて《貢ぎ物》として使おうとしてるだろ？」

と帝が低い声音で言うと、悪魔たちは顔色を変える。焦ったような、引きつった顔になる。

帝はその悪魔たちを見てから、続いてロイを見る。

ロイもやはり、顔をしかめていた。

悲しげな表情と落胆の表情が合わさったような、複雑な顔つきになっっている。

それを確認してから、帝はまたため息をついて、

「あんたら悪魔の考えはいつも汚かったが……今度はプライドも捨てたか？」

「しょうがないじゃないかっ！ 堕天使と混血魔族が寝返ったんだから、勝てるはずがないだろ！！」

悪魔の一人が叫ぶ。

その隣の悪魔も、

「ロイ、もういい。こいつを力ずくで抑え」

「はっ、悪魔<sup>クズ</sup>ごときが俺を抑える？ 調子に乗るのもいい加減にするよ。お前らなんか一瞬であの世に飛ばしてやるぜ？」

椅子に座りながら、帝はそんなことを言う。そしてそれは事実だった。帝は死神の中でも強い方である。悪魔ごときに遅れは取らない。

帝の体から殺気が吹き出し、それに悪魔も身構える。

そんな緊迫した状況の中、

「……あの、帝サン？」

ふいにそんな声がした。

それに帝は、かなり緊迫した状況なのにも関わらず、無防備にも声の方に視線を向けた。それだけ彼には自信があるということなのだが。

「ん？」

そこには光矢が、椅子に座ったまま困ったような顔になっていた。



隣にいる帝と、反対側のロイとを交互に見比べてから、

「あのー、何でいきなり戦闘モードになってんの？」

「……………光矢、分かってなかったの？」

「うん、全然」

あっさり光矢はうなづく。

帝はそれに、今ここで大笑いしたくなる。ああ、うちの契約者はなんて綺麗で純情なんだろう　と笑いたくなる。

それを何とかこらえ、光矢に向かって、

「簡潔に説明するとね」

「うん」

「あいつらはね、俺を囿に使うとしてるんじゃないくて、人質として使おうとしてんの」

「人質？」

「そそ、人質。天使に俺を引き渡して、こいつで怒りを静めて下さーいってお願いしようとしてんの」

と、帝は言う。

言ってから、ああ何て卑怯なんだろう悪魔って、と心の中で笑う。あまりにも考えが卑怯すぎて、笑うしかないだろう。

と帝が変な所で笑いをこらえていた　その時だった。

「つてめえ！」

光矢が立ち上がり、ロイの胸ぐらを掴む。腕を振り上げて、思い切り殴る。たかが人間の光矢の拳など簡単に防げるはずなのに、ロイは防がないで殴られる。その衝撃で椅子から転げ落ちる。

「お前、そんなことして恥ずかしくねえのかよ！？」

光矢は叫びながら、もう一回ロイを殴ろうと腕を振り上げる。

だから帝は、

「止める光矢。こいつらも必死なんだよ」

「だから何だよ！　悪魔じゃねえ帝なんかどうなったっていいってことかよ！？」

そう光矢は叫ぶ。

『あなたは悪魔じゃないけど、私はそんなことどうだっていいの。大好きよ、ミカド』

遠い記憶の中から引つ張り出されてきた、彼女の台詞。

レミという名の悪魔の少女。彼女は最期まで、笑っていた。可愛らしい、汚れの無い笑顔のまま　死んだ。

「ロイ」

倒れているままのロイに声をかける。

「何だ」

「その作戦、乗ってやる」

帝はあっさり言った。

それにロイは、かなり驚いたように目を見開く。  
すると光矢が顔をしかめ、

「帝！」

「いいんだよ、光矢。俺の選択だ」

帝はそう言っで微笑む。

するとロイは啞然とした表情のまま、

「お前、勝てると思ってるのか？　かなりの数の天使が

」

「俺は負けない。生まれた時から決まってる」

例によって例のごとく、自信満々な笑みを浮かべる帝。

それから立ち上がり、『多目的室』を出ようとす。時間が無かつたので、会議には学校の多目的室を使ったのだ。

それに光矢も、渋々と言った感じの顔で帝の後を追う。

「待て！　最後に一つ聞かせてくれ！　何で際川は、利用されそうだったのを知ってるのに、俺たちを手伝うんだ！？」

後ろからロイが叫んでくる。

それに帝はゆっくりと振り返った。それから彼は、泣きそうな、それでいて笑っているような不思議な表情になり、

「悪魔に、貸しがあるんだよ」

と静かにポツリと呟いた。

数分後。

「兄貴、どうだった！？ 成功した！？」

という叫びを上げた少女　ミリナ・サリウツタはロイに詰め寄った。

場所は谷志野学園の屋上。

それにロイは、首を横に振り、

「いや……」

「失敗したの！？」

「……バレたんだけど、協力してくれるみたいなんだ」

「はぁ！？ 何よそれ！？」

「俺に聞くなよ」

ロイは肩をすくめ、空を見上げる。

雲行きが怪しい。晴れていたはずなのに、いつの間にか雲が広がっていた。

「際川は何を考えてるんだか……」

「際川って誰？ てか口元に傷あるけどどうしたの？ 結局どうなったの？」

「何個も質問するなよ。際川っていうのは死神の名前で、傷はその契約者に殴られた。結局　手伝ってくれるみたいだ」

マシンガンのように早口でまくしたてるロイはミリナを引き剥がし、ため息をついた。

そこでロイは、ミリナがこちらを見つめてきているのに気付く。

彼から少し離れた場所からこちらを見て、

「兄貴」

「何だよ」

「本当にいいのかな？ 死神を利用しちゃって……見殺しにしちゃっていいのかな？」

頭を思い切り殴られたような衝撃が、ロイを襲う。悪魔にしては幼い妹の言葉は心に深く突き刺さった。

何とか言い訳をしようと口を開きかけるが、ミリナはそれを遮り、「ねえ、兄貴。大人の事情は私には分からないけど、悪魔の誇りとしての失っちゃいけないって教えてくれたのは 兄貴だよ」と言う。

そのミリナの言葉に、ロイは顔をしかめる。言い訳はいくらでも浮かぶ。それこそ子供は黙<sup>ガキ</sup>つてるとか、何も知らないくせにとか理不尽なことも言えるはずだ。

しかしロイは黙ったままミリナを見つめ返す。元々死神を利用しようという作戦は、ロイが立てたんじゃない。他の悪魔の考えた。

だからロイは、口を開きかける。俺には分からないんだ、と言うおうとする。

しかしその前に、

「そこに居るのは誰だ？」

と、屋上の入り口の方から男の声がした。ロイよりは高い、高校生くらいの聞き慣れない声であった。

それにロイが振り返ると、そこには一人の男が立っている。

しかし、その男を見るなりロイは首を傾げた。何故ならその男は、限りなく人間に見えたから。

整えられた黒髪に、珍しい輝きを放つ灰色の瞳。端麗な顔つきはどこか冷たく厳しい雰囲気醸し出していた。長身細身の体には谷志野学園の制服を身に纏っていて、腕には『風紀委員長及び環境委員長』という文字が入った腕章を付けている。

「なっ、あんたどこから出てきたの!？」

ミリナが驚きの声を上げる。

ロイもその男　というよりは美青年　を睨みつけた。

その青年は、限りなく人間に見える。灰色の瞳というのは珍しいが、ただの制服を着た高校生に見える。

しかし、人間の気配ならすぐに気付くはずなのだ。声をかけられるまで気付かないはずがない。

「何者だ？」

ロイは低い声音で脅すように言うが、青年は全く動じない。

「こつちが聞きたい。お前らのような悪魔が何故ここにいる？　ここは人間の学校のはずだが？」

「！？　何でお前が、俺が悪魔だということを知ってる！？」

ロイは思わず一歩踏み込む。

それにミリナも男を睨みつけて、

「あんた、人間じゃないんでしょ！？」　《こつち側》の化物……っ」

「化物に化物って言われたくない。あと、俺はただの風紀委員長、兼環境委員長だ」

「そんなこと聞いてないわよ！　名前を名乗りなさい！」

「お前らが先に名乗れ。悪魔<sup>クズ</sup>が俺に指図をしてるんじゃない……」

……まあ、神だろうが天使だろうが俺に指図したら殺すけどな」

そんな滅茶苦茶なことを言う青年。ミリナも思わず言葉を呑み込む。

それにロイはため息をつき、

「ロイだ。ロイ・サリウツタ。そしてこつちが、ミリナ・サリウツタ。俺の妹だ」

「……悪魔のお偉いさんか。何故下界へ来た？」

「お前にはまだ教えられない。俺らが名乗ったんだから、お前の名前を教えろ」

ロイはそう言いながらも、足に力を込めておく。敵ならば、今この場で排除すべきなのだ。

しかし青年は、何故か不服そうに口を尖らせていて、名乗ろうと

しない。

とうとう気の長くないミリナが痺れを切らし、

「あああもう！ 早く名乗りなさいよ！ 話が始まんないでしょー  
があー！」

と叫ぶ。

しかしそれに青年は、もっと不機嫌そうな顔になるだけで答えな  
い。

するとミリナは、

「ああ何コイツ！？ もういいわ、力でねじ伏せて……」

聞き出してやる、と言いかけたミリナを手で制し、ロイは青年を  
見る。

青年は相変わらず不満そうな顔をしてこちらを見ているが、ロイ  
はどうして青年がそんな顔をしているのかが分かった。

気付いたのだ。この青年の性格と企みに。

「なあ」

「あ？」

声をかけてみると、やはり不機嫌そうな返事が返ってくる。

だからロイは青年を見つめ、

「頼むから、名前を覚えてくれないか？」

と、口調を柔らかくして言った。相手を刺激しないように、《頼  
む》。

すると青年は、びっくりするくらいあっさり、

あおいざかばーる  
「蒼井坂 晴だ」

と教えてくれた。

ロイは思わず笑みを浮かべそうになる。

つまりは、そういうこと。上から目線だったロイやミリナに怒り  
を感じた青年は名前を言わなかった。教えてほしかったら頼め  
という、一言で表すなら、女王様である。

「じゃあ、その晴君に質問する。君が何者なのか教えてもらっても  
いいかな？」

ロイは、なるべく相手を刺激しないように質問する。

すると青年は笑みを浮かべ、

「パーレイ・アイドウというのが本名だ　　と言えは分かるか？」  
と楽しげに言う。

パーレイ・アイドウ。その名前は聞いたことがあった。というか、神界に住む者なら誰でも聞いたことがあるというくらい有名な名前だった。

だからミリナは目を見開いて青年　　晴を呆然と見つめる。

ロイも苦笑いを浮かべながら、

「お前　　墮天使の王子のパーレイ・アイドウか」  
と呟いていた。

すると青年も笑みを浮かべ、

「ああ、そうだ。正確には《王》だがな。俺の親父は先月逝った」  
「何で墮天使がここににいる？　まさか悪魔を殺しに来たのか？」

ロイはそう身構えながら問う。墮天使ということは、神魔戦争で戦う敵ということだ。今まで中立を保っていた墮天使と混血魔族が寝返ったから、死神を利用するなんていう卑怯な手段に出なければいけないハメになった。

「天使側に寝返ったお前が、俺ら悪魔に何の用だ？」

ロイが緊張しながら、晴に問う。

すると晴は、

「いや、用はない」

「は？」

「風紀委員長として、立ち入り禁止の屋上に入った生徒がいるのか？」  
「？　と思っただけで、俺はお前らに興味はない」

「へ？　いや、神魔戦争は？」

「俺はどちらの味方でもない。そもそも天使と悪魔の戦争に興味はない。ただ、中立を保っているとどちらにも攻撃されかねないからな。お前らにも天使にも両方に攻撃されるのはご免だ」

なんてことを彼は言った。その顔はやはり冷たく、本当に興味が

ないようだった。

それにロイは、

「なら、お前ら墮天使は別にどちらについても構わないということか？」

「まあそうだ。天使共から誘いがあつたから受けただけで、俺は別にどっちでもよかった。命拾いしたな、悪魔。俺はお前らに興味はない。さっさと逃げるなりなんなりしろ」

馬鹿にしたように笑う晴を睨みつけ、ミリナは、

「何ですって！？ 調子に乗るのもいい加減に……」

と言いかけるが、ロイはそれを遮り、

「ならお前に頼みがある。その選択には、大事な二人の命がかかっている。神を倒すのに必要な、二人の命がかかっている。その大事な頼みを聞いてくれないか？」

「ふむ、いいだろう。言ってみろ」

晴は目を細めてロイを見つめてきた。ミリナもこちらを見つめてくる。

それにロイは ……………

その一時間後。

晴は屋上のベンチに座って、物思いにふけていた。

悪逆非道な神に、私利私欲に走る天使に、一途な死神とその契約者に、卑怯だけど優しい悪魔に、それらの中間でウロウロしている



混血魔族と墮天使。

「……クソ。ほとんどが俺の手の外で、何かム力つくな」  
そんなむちゃくちゃなことを言いながら、晴は屋上から空を見上げた。

雨が降りそうな曇天。灰色、という色の名前が相応しい空。

それに晴は顔をしかめる。彼は、雨が嫌いなのだ。まあ好きな奴の方が珍しいのかもしれないが。

「嫌な天気だな、おい」

ため息をつきながら、彼は屋上のフェンス脇にあるベンチに寝ころがる。目を閉じる。

「んー、また帰ったら仕事が……。風紀委員長と環境委員長を兼務するのは……さすがにキツ……」

「いええええい！ パーレイ、起きてえええええ！ てゆーか今すぐ起きなさいよね！ パーレイパーレイパーレイ！」

突如として、やかましい女の声が屋上に響き渡った。

その声に聞き覚えはあったが、そんな馬鹿そうな叫び声を上げる奴とは話したくないので、彼は無視する。

「何で無視するのパーレイ！？ ねえねえ！」

「……………」

「目え開けてよ！ つまんないじゃんかあー」

「……………」

「あ、もしかして誘ってる？ やだあー私パーレイの強気受けが好きなのに。いつから誘い受けにチェンジしたの！？」

「……………」

「やっぱパーレイは俺様攻めか強気受けだと思っよ！ そうだなあ、あなたに合うタイプは私的にはヘタレ攻めが」

「いい加減変な妄想を止める。じゃないと殺すぞこの変態女」

晴は目を開き、上から見下ろしてきている女を見つめた。

ほとんど白色に見える金髪の髪はツインテールにっていて、腰まで届いている。まん丸の、髪によく合う青い瞳。低い身長には谷志

野学園の制服を着ていて、腕には『環境副委員長』の腕章をつけている。

「わっ、晴が起きた!」

何が嬉しいのか、ニコニコと笑顔でこちらを見下ろしてくる女

本林 麗楽（はなはる）を晴は睨みつけ、見下ろされていることに嫌悪感を感じたので、起き上がる。

「お前の変な妄想のせいで目が覚めたんだ。殺すぞ」

「うわ怖。じゃあやっぱ強気受けに決定」

「『じゃあ』の流れはどこから来たんだ。いい加減にしないと殺す。いや、今殺す。スパツと殺してやる。最期に何か言うことはあるか? 反吐が出そうだが、聞いてやるぞ?」

「うん、その前にスパツと殺すってあんた、ナイフ使いでもないのに効果音間違ってるから! 晴の場合は『静かに殺す』でしょ!」

「そうか。なら訂正する。静かに殺す」

「あと! いたいけな四百歳を殺さないでよ!」

「いたいけなのはお前の頭だけだ。いい加減死んだらどうだ?」

うんざりしたように晴が言う。それに麗楽は言い返そうと口を開きかけ、

「だから って、こんなくだらない話がしたいんじゃない!」

さつき悪魔の気配があつたから心配して来てあげたの!」

「ん? それはこの俺が殺られると思っていたということか? よし、やっぱり殺」

「話が進まないでしょおおおお! 何で悪魔の気配があるのよ!」

「さつき来た」

「いやいや、さつき来たじゃなくて! 悪魔が来たってことは、もしかして神魔戦争で晴が寝返ったこと怒ってるの!」

「いや、違う。無謀なことに、この俺に交渉を申し込んできたんだ」

「うわ、無謀」

「だろ?」

麗樂が同情したような顔で晴を見つめてくる。まあ、彼女が同情しているのは晴ではなくて、交渉を申し込んだ悪魔だろうが。

晴はその麗樂の顔から目を逸らし、フェンスの近くへと歩く。そこから校庭を見下ろす。

人間はいない。確かにこんな時間まで残っている奴なんて珍しい。せいぜい自分と、生徒会くらいだろう。

その、誰もいない校庭を見つめて、彼は小さく笑みを浮かべる。そしてゆっくりと振り返り、

「お前に命令がある」

「私に命令！？ 久しぶりだね命令なんて！」

「不服か？」

「まっさか」

麗樂も笑みを浮かべる。先ほどのまでの子供じみた笑いではなく、どこか大人っぽい笑い。

そして晴に一步近づき、

「いいわよ、命じてみなさいパーレイ。私はあなたの奴隷、あなたの身代わり、あなたの盾　そしてあなたの相棒」

と、いつも命令を受ける時に言う言葉を紡ぐ。

それに晴もいつもと同じように一步近づき、

「……………全てを裏切る。神も天使も、騙す。そして悪魔と死神に借りを作ってやる」

と、宣戦布告を吐き出した。

そして真実は暴かれる

好きだよ、と言だけでも伝えられていたら、何かが変わっていたのだろうか？

たまに、僕はそう考えることがある。

『大好きだよ、ミカド』

彼女はあんなにも一直線に好意を寄せていてくれたのに、あの頃の僕は何を考えていたのだろうか？

死神と悪魔の境界線でも考えていたのだろうか。二百年も前のことなので、覚えていない。

どちらにせよ、うじうじと悩んでいたあの頃の僕は、ひどく後悔した。

好きの一言も伝えられずに大切な人を失って、頭が機能しなくなっ

ていて、そして再び頭が機能した時には、もっともつと世界がひどくなっ

ていて。彼女が望んでいた《神様》は狂っていて。

でも一番最悪なのは、僕だ。

彼女を守れなかった僕。告白出来なかった僕。まだ神を倒せないでいる僕。

そして、君に似てるからと言ってただの人間を契約者にしようとしている僕。

「あー、何というか、何もねえなここは」

と、鈴木光矢は辺りを見回した。

綺麗なまでに平地。遠くには住宅街が見えるが、光矢が立っているところは土煙が漂う平地である。

ここは半年前まで『桃いろは遊園地』があつたところで、電車で十分の便利な遊園地であつた。しかし不況の逆風に負けて取り壊されてしまい、来月からマンションの工事が始まるらしい。

「何もないってことは、好都合なのかね？」

と光矢は、誰に言う訳でもなく呟く。

いや、本当は光矢の隣にもう一人いるのだが、先ほどから口を開いてくれない。

その人物を光矢は見つめ、ため息を一つ吐き出すと、

「お前、なあ。少しは何か言えよ」

「もう死神の魔力は放出してる。いつ天使が襲ってくるか分からないだろうが」

「いや、そーだけど！」

と光矢は呆れたように返す。

それから一応周りを見回してみるが、天使らしき姿はない。すると後ろから、

「……………光矢」

「んー？」

消えそうなくらいか細い声で名前を呼ばれ、光矢はゆっくりと振り返る。

そこでは、帝がこちらを見てきていた。

いつもと同じの美貌。いつもと同じの顔。

しかしその顔は、いつもの自信満々な顔とは違って自信なさげな表情になっている。

そんな表情のまま、帝は、

「……聞かないのか？ 俺が悪魔の作戦に乗った理由」

「聞いてどうすんだよ。嫌な話だってことは、俺にだって何となく分かるよ」

「……………でも」

「もういいから。俺は帝の側にいるし」

少しだけ、いや、かなり恥ずかしい台詞を光矢は言う。

例によって例のごとく、言ってから光矢は赤面するのだが。

しかしその光矢の言葉に帝は、何故か顔を歪める。なにか苦しいものを抱えてしまった時のように顔を歪めてから、

「何でお前はそんなに、おせっかいなんだよ？」

「おせっかい？」

「そうだろ？ 普通なら出会って一か月の奴にそこまで執着しない。何でそこまでしてくれるんだよ？」

「っってお前はいきなり何を」

「なあ教えるよ。いきなりお前の平穏を壊した人殺しの俺を、何でそこまで助ける！？」

いきなり帝は叫んできた。出会ってから一度もそんなことを聞かず、そんな光矢を振り回していた帝がこの状況になっていきなりそんな事を聞いてきた。

光矢が今まで見たことないような不安そうな表情をしている帝。

「理由なんて、簡単だよ」

しかし光矢は慌てず、帝の方へ向き直る。体も帝の方に向け、視線を受け止める。

そして彼は、一度照れくさそうな笑みを浮かべ、頭を軽く掻いてから、

「好きだからだよ……帝の性格が」

「は？」

「なんて言うのかな……可愛い風に見えるけど、実は妖艶。あつからかんとしてて、でも実は考え深い。人間の俺なんかよりもずっと強くて、でも本当はすごい弱くて寂しがり屋　そんな帝の《裏表》に惚れちゃったんだよね」

あまりにもあつさり、光矢は言っていた。

そしてそれは本音だった。最初は顔だけ、見てくれだけを見て判断したのも事実だが、今は違う。

どうやら自分は、際川帝の内面にも染まってしまったらしい。そう判断する度に彼は、これは重度の病気だとは思っていた。もしくは誰かが仕掛けた罠にはまってしまったのだと。もう抜け出せないほどに深く堕ちてしまったのだと。

しかしそれでも構わない、と彼は思っていた。

神様が、天使が、悪魔が　たとえ目の前にいる帝の仕掛けた罠だとしても構わない。

どんな状況でも、この気持ちは《ホンモノ》だと確信している。だから。

「だから、さ。帝の気持ちはこの際聞かなくてもいい。過去を無理矢理聞きたくもない。自分から言ってくれるのを、待つよ」

そう言って光矢は、帝に向かって笑みを浮かべた。

ああ、どこで間違ってしまったんだろう僕は。

完璧だったはずんだけど、目の前に居る《珍獣》は明らかに不機嫌そうな顔をしている。

ああこれはまずいなあ、と金谷かねたに 爽そうは苦笑した。

チヨコレートのような色の髪に、栗色の瞳。その茶色の色彩には合わない銀縁の眼鏡。谷志野学園の制服をきちんと着こなし、腕には『生徒会副会長』の腕章がある。

そんな彼は、もう一度だけ目の前の珍獣に目を向けた。

するとその珍獣は、

「早く用件を言え。こっちはお前らと違って暇じゃない。お前らの無駄なお喋りに付き合ってる暇はない」

と、ひどく不機嫌そうな顔で言ってくる。

整った黒髪に、不思議な光を醸し出す灰色の瞳。端正な顔立ちは嫌悪感を隠そうともせず歪めていた。

その《珍獣》の言葉に爽はため息をつき、眼鏡をくいっと直す。

「へえそうなんだ？　ところで君はそんな言葉遣いで、どうやって学校の風紀を直したり環境を正したりするつもりだい？」

「はは。このクソでクズな学校の生徒会に言われたくはないな」

と、その青年は馬鹿にするように笑った。整った顔立ちが楽しげに歪む。

この美青年は、谷志野学園の風紀委員と環境委員の頂点を統べる者　蒼井坂　晴である。

「用件を言わなければ殺す。またその用件がくだらなければ殺す。さらにその用件が俺に不利なものなら殺す」

そんなむちゃくちゃなことを言ってくる晴を爽は眺め、また苦笑を浮かべる。

「そんな殺生な」

「それが嫌なら俺を呼び出さな。俺は今猛烈に忙しい」

「それなら率直に言わせてもらうよ　時間を取るのも悪いしね」  
爽がそんなことを言つと、晴は当然だとばかりにうなずく。

それに爽もうなずき、息を一つ吐き出し、新しく酸素を吸う。溜める。

それから爽は、名前の文字通り爽やかな笑みを浮かべて、



「君、さつき悪魔と何話してたのかな？」

「！？……………聞いてたのか」

一瞬驚いたような顔をした晴だったが、すぐに平静を取り戻したように真顔になる。

しかしどこか緊張したように体が強張っているのが、爽には分かっていた。

だから爽は首を横に振り、

「いや、全然。君を尾行してたんだけど、君の部下の麗楽ちゃんに邪魔されてね。全く優秀な部下を持ったものだよ」

「あいつは俺の次に優秀だ。そしてそれを選んだ俺はもっと優秀だ」  
「おや、そうなのかい？」

「ああそうだ。んで、どうするつもりだ？ 無理矢理聞き出してみるか？」

晴は体を低くして臨戦態勢になる。爽を睨みつけ、一步後ろへと下がる。

しかしそれに爽は愉快そうに笑って、

「いや、ただの人間の僕が君に適うはずがないだろ？」

「お前は人間じゃない。半分人間の混血だろうが」

「そうだけど。僕はあまり戦闘は好きじゃないんだよ」

「なら黙れ。本当に今クソ忙しいんだ。お前に構ってる暇はない」

晴はさらに一步下がり、手を突き出してくる。その手からはどす黒いオーラが滲み出てきていて、彼の不機嫌な気持ちが具現化したような光景だった。

どうやら強行突破するつもりらしい。

「君に僕は倒せないよ」

「はっ、言うじゃないか」

「いくら混血魔族でも……神魔戦争では戦力になる。天使に逆らうつもりなら、僕らを味方につけておいた方がいいんじゃないの？」

ニコニコと笑みを絶やさないまま、爽はそんなことを言う。

それに晴の顔色が変わった。

目を見開き、見下したような表情から警戒するような表情になる。

「お前、やはり聞いて……」

「いや？ 聞いてないけど、推測は出来るよ。君は誰かの思惑通りフロットに進むのは嫌いだもんね。天使の思惑から外れるつもりかい？」

「俺の勝手だ。そして天使の思惑から外れるのは、ただの気まぐれだ」

「またまた。《堕ちた》天使がごまかしても無駄だよ。君は天使共に嵌められて」

その瞬間、晴の手の平から黒い光が放たれ、爽の胸へと一直線に飛んでくる。

「よっ」

しかし爽は見越していたかのように横へずれると、光を回避する。光は爽が元居たところの後ろの壁に激突する。するとその壁がえぐられ、貫通してしまう。

あんなものが胸に当たったら間違いなく即死だ。

「……………」

しかしその余りのスリルの大きさに、爽は笑みを浮かべる。晴と話をするだけでも大変なのに悪魔は勇気があるなあ、なんて感心してしまう。

「……次にそのことを言ったら殺す。手加減はしない」

「おいおい、仮にも風紀委員が壁に穴を開けちゃ駄目だろ？」

「分かった。殺す。今、この場で、殺してやる」

「本当のこと言われたからって怒らないでくれるかな？」

「黙れ」

もう何度目か分からない「黙れ」を聞き流し、爽はため息をついた。

短気な人は嫌いだな、と心の中で毒づく。

「お前は何がしたいんだ？ まさかお前らも天使を裏切るとか言うんじゃないだろうな？」

「ん？ 言ったら悪いのかい？」

爽が聞き返すと、晴はあからさまに顔をしかめ、

「やはり裏切るつもりか」

とこちらを睨みつけてくる。

それに爽は肩をすくめ、

「僕らは君たちとは違って、最初から裏切るつもりだったよ。天使共の横暴には付いていけないからね」

「ほお？　ならお前らは悪魔の味方になるのか？」

「そうだ。それで、君たちは何で悪魔の味方になる必要があるのかな？　別に君たちは天使共の味方でも構わないはずだけど」

爽が不思議そうに首を傾げると、晴は笑みを浮かべ、

「ああ。悪魔と死神に借りを作ってやりたくてな」

「へ？」

「自分よりも地位が上の奴らに借りを作って屈服させたら、さぞし楽しいだろうなと思って」

「……え、もしかして、理由ってそれだけ？」

「そうだが？」

「それだけで堕天使共を動かしちゃうの？」

「ああ」

余りにもあつさりうなずく晴。それとは対照的に爽は、げんなりしたような顔になって、

「堕天使の王子様が、そんなんでいいの？」

「ああ。まあ一部で暴動が起きたらしいが、そんな奴らは殺せと麗樂に伝えてある」

「うわ横暴」

苦笑い的な笑みを浮かべて爽は言う。

しかし晴は聞く耳を持たず、

「お前らも天使を裏切るつもりなら、これで雑談会は終了だな。これ以上俺の時間を潰すつもりなら、お前の首と胴体と手足が涙のお別れ会をすることになる」

「怖っ！？　嫌だよそんな感動がないお別れ会！」

「ならこれで話は終了だ」

勝手にそう切り上げ、晴は踵を返す。そのまま後ろに歩いて行ってしまう。

「……………」

晴の姿が廊下の曲がり角で消えるまで、爽は黙って見送っていた。

「だからあ、あたしはちゃんとやっただけだ！」

『嘘をつけ。俺が悪魔と取引している間、目撃者は全員排除しろという命令だったはずだ』

「だってあいつ、逃げ足速かったんだもん！ めちゃくちゃ速かった！ 人間じゃないよ！」

『お前も人間じゃないだろう。とにかく、混血魔族の奴らも天使を裏切るそうさ』

「……………って、ええええ！？ とにかくってどんな流れよ！ そんな急な話は聞いてな」

『俺は今聞いた』

「あたしはあんたじゃないっ……………って、もしもし？ あ、切れた！？ 嘘、パーレイ最悪！」

と、麗楽は持っていた携帯電話を勢いよく閉じた。不満そうな顔で、携帯をポケットへしまふ。

それから、

「混血まで裏切るって、どういうこと！？」

と叫ぶ。その言葉に答える者はいないが、麗楽は頬を膨らませて、「パーレイの馬鹿！ ツンデレめ！」

と今は目の前に居ない主人を罵倒する。

混血魔族。人間と魔物の混血<sup>ハイブラ</sup>の化け物。神魔戦争では天使の味方につくはずだった存在なのだが、今のパーレイの話を聞くかぎり、悪魔の方に寝返ったらしい。

「どういうことなのよ！ 全く、みんなみんなみーんな難しいことばっか考えて。神様が狂ってるんだから、考えたってしょうがないじゃないの！」

ひどく不満そうな顔を維持したまま、麗楽は小さくため息をついた。

お前は魔物なのに、頭は人間並に悪いな。というか、単純だ。パーレイと出会ってまもない頃、彼にそう言われたことがあったのを麗楽は覚えている。だが彼女は、みんなの方が難しいことを考えすぎだと思っていた。

「そういえば、神様の奴……最近大人しいなあ。人間に《チカラ》も与えてないみたいだし」

麗楽は首を傾げながら、そんなことを言った。しかしやはり、答える者はいない。

「まあ当たり前だよ。立ち入り禁止のビルの屋上なんか人間がいるはずないもん」

と、彼女は肩をすくめ、一応周りを見回す。

周りは、余りにもシンプルなタイルが敷き詰められている屋上で、落下防止の金網に囲われているせいか閉鎖的な空間を作り上げている。

と、その時だった。

先ほど腰にしまった携帯から振動が伝わってきた。慌てて携帯を取り出して開くと、画面には『パーレイ』と映し出されている。

麗楽は通話ボタンを押し、

「わ、わっ、もしもしパーレイ！ 切るってどうということ……っ」

『今さっき、異常事態が起きた』

「へ？」

『大変だ。麗樂、お前に命令がある』

「な、何何。まさかパーレイ、あたしに漫画を捨てろと!？」

『誰もそんなことは言っていないだろう。あんないかがわしい漫画に興味はない』

「いかがわしくなーい！パーレイも読んでみなよ！腐女子の世界へ一歩踏み込め！」

『残念だが、俺は男同士がイチヤイチャしている漫画に興味はない。そして今はそれどころじゃない』

パーレイのため息が携帯越しに聞こえてくる。

それに麗樂は首を傾げ、

「何かあったの？」

『ああ。天使が死神の存在に気付いたらしいんだが……その数がやたらに多い』

「死神負けるじゃん」

『だからそれが問題なんだ』

イライラしたようなパーレイの声が耳を刺激する。

「じゃ、あたしはどうすればいいの？」

『死神のところへ行け』

「場所は？」

『知らん。魔力を辿れ』

「アイアイサー！」

ふざけた掛け声を上げて、麗樂は携帯を切る。ポケットにしまう。それから高層ビルの落下防止用の柵を眺めて、うつすらと笑みを浮かべた。

「待つてろよ死神！　ていうか死神って男なのかな？　男だいいなー萌えるし」

と、やたら緊張感のないことを言いながら、彼女は飛んだ。

二メートルはあろう思われる柵をあっさり乗り越え、高層ビルの一番上から、落ちて行った。

## ココロは霞む塵気楼

止める、止める、止めると、心の中で声がする。

「だから、さ。帝の気持ちはこの際聞かなくてもいい。過去を無理矢理聞きたくもない。自分から言ってくれるのを、待つよ」

彼は微笑みを浮かべて、そんなことを言った。《彼女》にひどく似ている笑みを浮かべて。

光矢は帝のことが好きなのだという。誰もが恐れる、汚れた死神のことが好きなのだという。

彼女と同じように。

「や、めろよ」

震える声音で帝は言った。

そんな顔で。《彼女》に似てる顔で、そんなこと言わないでくれと帝は思う。

「止めてくれよ」

帝は光矢を睨みつける。しかし何も分かっていない彼は、首を傾げながら、

「何がだよ……って、おい帝？ めちゃくちゃ顔色悪いけど大丈夫か？」

「やめろ、そんな顔で」

そこで一回言葉を切り、帝は泣きそうな顔になる。

『ミカド、大好き！』

「そんなレミに似てる顔で、好きなんて言っなよ！！」

帝はヒスリック気味に叫ぶ。目には涙が溜まっていた。

何故だろう。レミに似てるからという理由でこの青年を契約者にしたはずなのに。

何故。何故こんなにも悲しいのだろうか？

帝の瞳から涙が零れてくる。止まれ、止まれと心の中で命令してみろが、涙は止まってくれない。それに光矢は驚いたように目を見開き、そして帝に向かって何かを言おうと口を開きかけた。

まさにその時。

いきなり、帝のすぐ横に青い光を帯びた矢が落ちてきた。刹那、とんでもない爆音と共に二人は吹き飛ばされる。

「ぐあっ!？」

「っ……」

光矢は派手に地面を転がるが、帝は空中で体勢を立て直し、着地する。

「光矢! 起きろ!」

そう帝は叫び、走りながら空を見上げた。

空からは、無数の小さな影が徐々に近づいてきていて、青い光が放たれている。

「くそ、天使か!」

帝は顔をしかめると、後ろを振り返る。後ろでは、遅れながらも光矢が帝の後を追ってきていた。

「はっ、ちょ、帝、止まってくれ」

息を整えながら、光矢は止まる。その光矢の様子を見て、帝は顔をしかめた。

彼は人間だ。人間は、魔物の虫よりひ弱な存在だ。天使共の戦いに巻き込まれたら、十秒ももたない。

帝はもう一度空を見上げた。近づいてくる黒い影　天使の数を確認するために。

「二十、四十、六十………百近くいるな」

「百!？」



光矢が叫ぶ。それに帝も厳しい顔つきになった。

上級天使が百。天使共、よっぽど俺を犯したいのか。

「……………クズが」

帝は小さな声で毒づく。

勝てなくはない。殺すのを躊躇せずに、むちゃくちゃに鎌を振り回せば勝てるかもしれない。可能性は低いけど、まだ助かる見込みがある。しかし、ここには光矢がいるのだ。ただの人間である、光矢がいるのだ。彼を守りながらでは、天使共は倒せない。

そんなことを考えながら、帝は光矢に視線を向ける。すると光矢も分かっているのか、顔をしかめてこちらを見ってくる。

「光矢」

「……………何だ」

「もう、分かっているとと思うけどさ」

そこで帝は、落ちてきた青い光を鎌で切る。光は切り裂かれ、四方八方に散らばる。

それを眺めながら、帝は再び光矢の方へ目を向ける。

光矢は悲しげに顔を歪ませてこちらを見てきていた。

その光矢に向かって、帝も悲しげに顔を歪ませてみせる。そして消え入りそうなほど小さな声音で、

「俺を置いて、今すぐ逃げてもらえるかな」

と言ったのだった。

「ん、分かっている。ああ、そうだ。天使は所詮雑魚だ。お前らなら勝てる、というか、勝たなかったら殺す。ああ、ああ、分かっ

いる。死神については任せろ。必ず保護する」

そう言ってから、晴は勝手に電話を切った。

電話の相手は、悪魔だ。自分に取引を持ちかけてきた、ロイとかいう名の悪魔。

そいつと会ったのは、ついさっきだった。屋上に入った不法侵入者を抹殺しようとしていたところで、ロイに出会った。

そしてロイは言ったのだ。神魔戦争の敵のはずの晴に向かって、かなり馬鹿なことを言ったのだ。

神魔戦争で、俺ら悪魔の味方になってほしい。世界が滅びる前に、と。

そして晴は、結局その取引に応じた。墮天使の王として、彼は要求を呑んだ。

なんでも、死神が天使に捕まるのはまずいらしいのだ。彼はあまり神のことは知らないが、悪逆非道な神を滅ぼすためには死神の力が必要なんだという。

神は卑劣だ。しかしその神を倒すには、神の部下の天使共イヌを先に倒さなければならない。

死神も助けられて、同時に天使共も倒せる　とんだ一石二鳥で  
あると晴が判断したから、取引に応じたのだ。

「……神、か」

晴はため息混じりにそう呟いた。

人間共が神を信仰しているのは知っているが、あまりにも事実と矛盾している。神が幸福を与えてくれるのだ、天国とかいうところに連れて行ってくれるのだ、全く反吐が出そうな話である。

「まあ、人間も無能だからな」

天使共の次に嫌いな種類だ、と彼は小さく呟く。

人間に《チカラ》を与えて死なせない体にし、それを巡って殺し合いをするのを眺める　という悪趣味な神を、どう間違えば信仰するのだろうか。

「……………そういえば、神は最近チカラを与えてないみたいだが……………何か

あつたのか？」

誰に問う訳でもなく晴は呟いた。まあ、今彼が居る場所には誰も来れないはずなので、誰も答えないのだが。

「神魔戦争が始まってから不老不死人間<sup>ソニビ</sup>が居なくなつたな。神の気まぐれか、それとも……？」

と、そう言つて思考を開始しようとした晴を遮つたのは、携帯の着信音だつた。

晴は携帯を開く。

画面には、『麗楽』の文字が広がっている。晴は通話ボタンを押す。刹那。

『ぱあああれええい！！』

携帯電話が壊れるのではないかというほどの絶叫が聞こえ、晴は顔をしかめて携帯を耳から離す。それから携帯を操作し、音量を下げる。

するとようやく聞こえるレベルにまで下がった麗楽の声が、

『パーレイ！ ヤバイよヤバイ！ 一大事だよ！』

「何だ」

『あの、あのあの、死神の気配見つけたんだけどね』

「ふむ」

『周りに天使たちの気配もあつて……っ！』

「当たり前だろう。早く救出してこい」

『間に合わないから困ってるんだってば！？ そ、それに数が百近くいるし！』

麗楽はそう言った。口調からすると、だいぶ慌てているらしい。

「百……？」

晴は思わずそう呟いていた。

予想より、遥かに多い。

『どうしよう！？ 間に合わないよ、パーレイ！』

麗楽の声が耳に響く。

間に合わない。でも間に合わなければ、世界が危ない。

晴は高速で頭を回転させるが、やがて舌打ちを一つすると、  
「……糞野郎」  
と憎々しげに一言呟いた。

「俺を置いて、今すぐ逃げてもらえるかな」

帝はそう言つて光矢の方を見た。

しかし、案の定光矢は、

「無理だ。俺は絶対ここから離れない」

そんなことを即答してくる。

その光矢の言葉に、帝は顔をしかめて、

「お前までいると守れないんだよ」

「……っでも」

「でもない。とにかく逃げろ。これは命令だ」

「帝！」

「黙れ！ いいから行ってくれよ！」

頼むから。

「もう俺は！」

早く。

「大事な奴を失いたくないんだよ！！」

帝はそう叫ぶと、再び溢れそうになる涙をこらえる。もちろん、こんなことをやったって、《彼女》が戻る訳ではないのは分かっている。

だからこれは自己満足だ。  
自分の利己<sup>エゴ</sup>だ。

「行けよ、光矢！」

帝は、もう一度叫んだ。

青い光が、また落ちてくる。地面がえぐられ、土埃が舞う。

光矢はうつむいている。どんな表情をしているのかは見えないが、どちらにせよ良い表情でないことは容易に想像出来る。

それに帝は悲しげな表情になり、もう一度空を見上げる。

徐々に近づいてきている黒い影は、あと五分もすればここに着くだろう。

だから帝は、光矢の方を向く。さつさと行け、行かないなら力づくで気絶させるぞ、と言おうとする。

しかし振り返った帝を待っていたのは、

「……………ほら光矢。さつさと行　つつっ!？」

帝の言葉が止まる。

当然だ。何故なら

帝の唇は光矢の唇で塞がれていたのだから。

「っ!？　っん!？　はっ…………なれるよ!！」

慌てて光矢を突き飛ばす。光矢はよろけて二、三步下がる。

しかし帝の脳内はそれどころではなかった。

（は!？　え、待て待て、今光矢は俺に何をした？　そのあの、き、キス!？）

状況が全く理解出来ない。

しばらく考えて、考えて、とりあえずキスされたのだということ  
を理解する。

初めてだということも、理解してしまった。

「つて、お、お前はいきなり何を……っ」

しどろもどろながらもそんなことを言う帝の言葉は、何故か満面の笑みを浮かべる光矢のこんな言葉で遮られた。

「あはは、やだ、そんな慌てることないじゃない」

いきなりの、女言葉だった。

「は？」

光矢が何故いきなり女言葉を使うのか分からないが、そんなお遊びに付き合っている暇はない。

だから帝は怪訝そうな顔になって、

「光矢、ふざけてないで」

「うん？　もしかして、私のこと分からないのかな？　やだ、恋人の名前も忘れたの？」

そんな訳の分からないことを言う光矢。何故かは分からないが、まだ女言葉で喋っている。当然だが光矢は今まで女言葉なんか使ったことはない。

しかし帝はその言葉に驚いたような表情になり、まじまじと光矢を見つめた。相変わらず光矢は笑みを浮かべている。

しかしその瞳は、いつもの黒い瞳ではなく、金色に染まっていた。優しげな、しかしどこか悪戯好きそうな瞳。その瞳には、見覚えがある。

だから帝は呆然と、

「嘘、だろ」

と呟くが、それに光矢は首を横に振り、

「残念ながら嘘じゃないのよ？　あなたにしては鈍いじゃない。気づかないなんて、ねえ？」

光矢はそう言って無邪気に笑った。その笑い方にも、やはり見覚えがある。光矢のいつもの微笑みとは違う、帝が大好きだった、《彼女》の表情。

そして光矢は愛おしそうな、しかしどこか泣きそうな表情で、

「……………ミカド」

帝の名前を呼んだ。

「！？」

その瞬間、帝は頭が殴られたような衝撃を受ける。頭の記憶たちが、悲鳴を上げていた。

この声を知っている、この声を知っている！

「お前、本当に……………」

帝は呆然と言葉を紡ぐ。

光矢は いや、光矢の顔をしたナニカは まだニコニコと微笑んでいる。

それに帝は、泣きそうな声音で、

「……………レミなのか……………」

と光矢に向かって問う。

それに光矢は、やはり泣き出してしまいそうな顔で微笑み、

「久しぶりだね、ミカド」

と言った。それが答えだった。

しかし帝は、まだ信じられないのか疑いの目を光矢に向けながら、  
「いつから、光矢に……………」

「そうだなあ。いつからって聞かれたら、最初からって答えるかな。  
この光矢が生まれた時から私は入ってたから」

そう言っただけの中にあるレミは微笑む。

「……………」

しかし、その言葉に帝は顔をしかめた。彼女と出会って嬉しいはずなのに、何故か心が痛んだからだ。

すると光矢 というか、レミが、

「あ、でも安心して。あなたが好きだっていう気持ちは、光矢自身  
のものだから。あなたに出会って一目惚れしたのは《鈴木光矢》で  
あって、私じゃない」

自分の胸に手を当てながら、レミは言う。

帝は、それに自分の心が安心していくのが分かる。光矢の言葉や  
告白が本物だと聞いて、ホッとしてしまう自分の心を感じる。

「あなたに会いたくて、人間の体に憑依したの。条件が合う体を見つけたら、二百年もかかったけど」

「俺に？」

「そう。あなたがいつまでもあの日のことを責めているみたいだから」

そうレミは言う。

帝はその言葉に顔をしかめ、

「別に、責めてる訳じゃ」

「はい嘘。嘘つきなさいよ全く。私、ずっと見てたんだからね」

「……いい加減、光矢の顔で女言葉喋るのやめてくれないかな？ 虫唾<sup>むすい</sup>が走る」

「あらひどい」

クスクスと笑う仕草は、二百年前と変わらない、レミの仕草だった。

帝は二百年前を少し思い出し、顔をしかめる。あの日、レミを助けられなかった自分に嫌気が差す。

するとレミが怒ったように腰に手を当て、

「だから責めないでって言うてるのに。そんな泣きそうな顔しないでよ」

「……ごめん。でも、俺」

「はいはい、黙りなさい。私が天使に殺されたのは、あなたのせいじゃないの。たまたま逃げた先に天使がいて、待ち伏せしてただけなんだから」

「……」

「お願いだから、もう忘れてよ。私のことなんか忘れて、笑ってよ。じゃないと……」

レミは自分の いや、光矢の胸に手を当てる。そして悲しげな表情になって、

「この子が可哀想でしょう」

と帝に向かって言った。



その言葉に帝はしばらくレミを見つめていたが、やがて小さくうなずいた。

それを見て、レミは嬉しそうに微笑む。そして帝から顔を逸らし、空を見上げる。

空では、先ほどよりもだいぶ近づいた天使たちが、青い光を放ち続けていて。

「あら、大変ね」

しかしそんな場にはそぐわない呑気な感想をレミは出した。

「大変ねって……絶体絶命って言った方がいいんじゃないの？」

「何だよ。光矢と契約すればいいじゃない」

あまりにもあっさり言ったレミは、帝の方へと視線を戻してくる。その顔は輝いていて、面白いことを見つけた子供のようなだった。

しかし帝は、レミとは対照的に顔を暗くして、

「分かっただろ。人間がああ契約をやったら死ぬって」

「あはは、言っておくけど、光矢は死なないわよ？」

「は？」

「光矢の中には、私の力がある。悪魔の力がある。だから契約しても死なない」

「……本当か？」

「ええ。信じる信じないはあなたの自由だけど」

どうする？ とでも言いたげなレミの顔から目を逸らし、帝はしばらく黙り込む。考えるように手を顎にやり、虚空を見つめる。

しかしその時、帝のすぐ横に青い光が落ちてきた。先ほどよりも威力が増している。天使が近くなった証拠だ。

それで決心がついたのか、帝はレミへと視線を戻し、  
「分かった。契約する」

短く、しかし力強く帝は言った。

それにレミはうなずき、

「検討を祈るわ。私はもう消えるから」

「え、でも」

「契約は本人が望まないと出来ないんでしょ？　だったら早く光矢君を説得しなきゃ駄目でしょう？」

「そうだけど、でも」

「ごたごた言わないの。一応、男の子でしょう」

「また、会えるよね！？」

帝がそう叫ぶと、レミは一瞬驚いたように目を見開く。しかしすぐに微笑みを浮かべ、

「まあ、気が向いたらね」

と言った。

帝には、その姿が二百年前のレミとダブって見えた。

## 代償と力と盡く影

結果として、神魔戦争には勝った。

まあ当たり前だろう。最初から裏切る気満々だった混血魔族と共に、墮天使も裏切ったのだから。今や最強とうたわれた天使の味方は少なくなった。何も恐れることはない。

ただ。

「死神はどうなったのか分かるかい？」

目の前にいる、いけすかない混血魔族の爽が聞いてくる。  
だから晴は首を横に振り、

「知るか」

と一言だけ吐き出した。

すると目の前にいる爽は、眼鏡を人差し指で押し上げ、

「おやおや、あの悪魔との約束を破るつもりかい？」

「黙れ。悪魔と約束なんかしていない。俺にあいつらが頼んできたんだ」

「そうかい。まあ、とにかく死神が天使に捕まるのはまずいんじゃないか？」

「いい加減お前のその口を塞ぐぞ」

「なにで？ …… あは、まさか晴くんの口で？」

「口の周囲に瞬間接着剤を塗ってからガムテープで塞いでやる。それともなんだ？ セメントがいいのか？」

「…………… 冗談だよ」

「冗談でも麗樂みたいなことを言うな。寒気がする」

「おや風邪かい？」

「どうやって殺してほしい？」

明らかに殺気を込めて晴は爽を睨みつける。

しかし爽はヘラヘラと笑いながら、唇に人差し指を当て、黙っていることをアピールした。

そんな爽を横目に、晴はうんざりしたようにため息をついて、  
「神魔戦争で勝とうが負けようが、さほど変わりはない。所詮天使は神の犬だ。その犬が何匹滅ったところで変わらない。問題は……」  
「死神、つてことか。神を倒せるのは彼しかないからね」

「この戦争、死神の行方が本当の勝者だ。死神が犯されたあげく捕らわれるか、こちらで保護し、神を倒してもらうか　そのどちらに転がるかが問題だ」

と、そこで晴は窓の外を見る。相変わらずの曇天だが、もう日が落ちかけている。ここ、風紀委員会の会議室は三階にあるため、そよそよと吹いてくる風が心地良い。

そんな風を感じながら晴は、もしかしたらその戦いは負けるかもしれないな、と少し弱気に考えた。

つい先ほど麗楽から電話があった。内容は、天使が百匹集まって死神を捕らえようとしているという、いたって最悪なものだった。その電話の後すぐに爽がこの部屋に入ってきたため、落ち着いて考えられなかったが。

「上級天使が百……それにたった一人で勝てる奴がいると思うか？」  
晴は、空から視線を逸らさないまま爽に尋ねた。

すると爽は驚いたように目を見開き、眼鏡をまたかけ直した。どうやら感情を眼鏡で表すのがこの青年の癖らしい。

「……百もいるんだ？」

「ああ」

「無理じゃないかな」

「ああ、俺もそう思う」

やはりそうか、と晴は出かかったため息を抑えた。  
すると爽は、

「でも、一つ言っていていいかな晴君」  
「何だ」

晴は視線を爽へと戻す。そこには、こんな状況の中でも余裕そうな笑みを浮かべる爽の顔があった。

晴が、その笑顔の真理が分からず怪訝そうな顔をしたと同時に、爽は爽やかな笑顔のまま譫言<sup>うわごと</sup>を吐き出した。

「僕は一人なら勝てないと言ったけど……………《二人》なら分らないんじゃないかな」

光矢の顔のはずなのに、レミの笑顔とダブって見えるのは目の錯覚だろうか。

光矢の体の中にいるレミはそんな笑顔のまま、  
「ばいばい」

と言った。

それに帝が何かを言う間もなく、彼女は目を閉じる。  
そしてしばらく後。閉じていた瞳がゆっくりと開いた。

もうその瞳は金色ではなく、黒色だった。

「光矢？」

帝が呼びかけると、光矢は不思議そうな顔で周囲を見回し、それからもう一回帝の方を向いてから、

「……帝？　って、あれ、俺は一体何を……」

「光矢覚えてないの？」

「え、あれ、俺は確か　あ、そう！　帝が逃げるとかいうから嫌だって言って……それからどうなった？」

「ってそつから！？　じゃ、じゃあもしかして……」

キスも覚えていないのか？　と出かかった言葉を飲み込む。

「帝？」

いきなり黙り込んだ帝を光矢が覗き込んでくる。心配そうな顔でこちらを見ってくる光矢から目を逸らし、帝が、

「いや、なんでもな……」

そう言いかけた刹那、彼の体のすぐ横に光が落ちてくる。天使たちの距離が近づいてきているのか、光が大きくなってきていた。烈風のせいで、帝は派手に吹き飛ばされる。

「帝！」

とつさに光矢が帝の体を受け止める。帝は体勢を立て直し、立ち上がる。

「おいおい大丈夫……」

「光矢、頼みがある」

言葉を遮り、帝は光矢の胸ぐらを掴んだ。そしてそのまま引き寄せる。

「俺と今すぐ契約しろ」

「はあ！？」

光矢は驚愕の顔でこちらを見てくるが、帝はそれを無視する。

「このままじゃ二人共死ぬのがオチだ。契約して、この場を切り抜けるしかない」

「だって契約って人間がやったら死ぬんじゃない？　……うあつ」

しかしそこでまた光が落ちてくる。砂埃が舞い、石が二人の体を襲う。

「どつちみちこのままだったら死ぬ。それに、多分光矢は死なない」

「何の根拠があるんだよ？」

「完全なる俺の仮説だ」

あっさり帝は返すと、光矢の胸ぐらをさらに引き寄せる。

光矢には、悪魔であるレミの魂が入っているのだから多分死なないと思っている。が、ただそれには証拠がなく、帝の完全な妄想で成り立っている仮説だ。

だから死ぬ可能性もある。

だがそれでも。

それでも契約しなければいけない。

「……クソ」

光矢にも聞こえないような小さな声で、帝はうめいた。

こんな説得で、光矢がうなずいてくれるはずがないからだ。少なくとも自分なら、今の説明だけで契約なんかしない。自分の命を犠牲にしてまで、こんな穢らわしい死神と契約なんかしない。

なら、きつと光矢も

「いいよ」

しかし、返ってきたのは意外な言葉だった。

それに帝は目を見開く。

「帝が死なないって言うなら、死なないんだろ？　なら全然平気だよ」

そんなことを疑いもせず言う光矢。純粹だったレミでさえ、もう少し疑うことを知っているだろう。

やはり光矢は光矢だ。それ以下でもそれ以上でもない。

「本当にいいのか？」

「ああ。帝を信じるよ」

そう言うつてはにかんだように微笑む光矢。

それに帝も微笑んでから、

「死神鎖鎌　かまいたち　鎌鼬」

と小さく呟く。

すると、手の中に一瞬で鎖鎌が現れた。それを確認してから帝はうなずく。

その帝の行動に光矢は首をかしげて、  
「鎌鼬を契約に使うのか？」

「うん。これで光矢の心臓を刺すから」

「へえ……………って、ええええええ!？」

光矢は絶叫し、鎌鼬を呆然といった表情で見つめる。

「……嘘だろ？」

「いや、本当」

「い、いやいやいや!　だって人間心臓刺されたら死ぬし!」

と光矢は叫ぶ。

しかし帝は、そんな光矢の言葉に眉をひそめた。

《死神の悪戯》と呼ばれるこの契約は、死神の術式の中でも最高ランクの難しさを誇る契約だ。もともと純粋な《魔力》という概念がない死神は、契約によって戦力を得る。この《死神の悪戯》は、契約者の命の源　人間で言うところの心臓　に鎌を突き刺し、そこから自分の魔力を流し込むという、かなり危険な契約である。

普通の人間なら、死ぬ。

だが、光矢なら。悪魔のレミを取り込んでいる光矢なら。

「死なないよ」

帝はそう言い切った。

すると光矢は拍子抜けしたように目を見開くと、しばらく考えるように目を泳がせ、それから帝の方に視線を戻してくる。

その間にも天使たちは近づいてきて、光がどんどん大きくなってきている。

このままじゃまずい、と帝が思ったと同時に、

「帝？」

光矢が不思議そうな顔でこちらを見ながら、鎌鼬を指差し、

「やらないの?　契約」

と言った。

それに帝は、

「って、光矢。死ぬかもしれないんだぞ?　もっとよく考えて……」

「考えてる暇はないんだろ?　それにこれは俺の選択だから」

「いや、でも」



反論をしかけた帝の口を、光矢は人差し指で塞ぐ。

その行為が先ほどのキスを連想させて、帝は赤面する。

「いいから、やって」

そう短く言って人差し指を放す光矢。

帝はいつになく頼りがいがある光矢に、調子を狂わされていた。いつも自分がリードしていたはずなのに、今は光矢に引つ張られている気がする。

「……わ、かった」

やっとのことで返事を吐き出した帝は、鎌鼬を握り直す。

それからゆっくりと振り上げていく。

光が雨のように降り注いでいる中で、帝は光矢を護るために鎌鼬を振り上げる。

「我は命を司る者。古の地から住みし悪霊。我の盾となるために、同意のもと、契約者に力を与える」

契約に必要な言葉を紡ぐ。その言葉が進むごとに、鎌鼬が銀色のオーラで包まれていく。

「今　契約を結ぶ」

そしてその言葉を言った瞬間、帝は鎌を思い切り振り下ろした。

「どうなっただよ爽！」

「僕に振らないでよ。僕だって分からないんだから」

どうどう、とまるで馬の怒りを静めるような動きをする爽に対して、叫ぶ青年は収まることを知らないかのようにだった。

赤く染められた、かなり目立つ髪に、切れ長の同色の瞳。端麗に

整った顔は、今は怒りでかなりしかめられていて端麗の原型がなくなっている。長身の体谷志野学園の制服をだらしなく着くずしているが、その腕には、『生徒会長』の腕章が付いていた。

この青年は、谷志野学園では有名な男だった。生徒にある複数のキーワードを言えば、必ずこの男 岩井夕紀いわいゆうきの名前が出てくる。美形、生徒会長、長身、乱暴、名前を言つとキレる。このいくつかのキーワードを生徒に言つと「岩井夕紀」と答える。そのくらいこの男は有名だった。

「はっ、こんな奴が生徒会長？ この学園がクズな訳が分かる」  
不意に窓際に座っている晴がそんなことを言う。  
それに夕紀は、

「あ？ 何か言ったかてめえ」

「この学園がクズな理由が分かると言っただが？」

「あんだとてめ……っ」

「止めなよ」

晴と夕紀の間に入り、言い合いを止める爽。

それでもしばらく二人は睨み合っていたが、やがてお互いにそっぽを向いた。

すると夕紀が爽の方を向き、

「で、どーすんだよ」

「どうするって？」

「帝だよ帝！ あいつが死ぬのは構わないが、できれば自分の手で殺したいからな」

「相変わらずだねえ。ただ、もしかしたら彼、死ぬかもしれないよ」  
そう爽はため息をつくつと、晴を見る。晴は何を思っているのか、目を閉じて窓の外を眺めていた。

何をしているか、なんて聞かなくても理解できる。考えているのだ、死神を救う方法を。

と、その時、晴のポケットからバルブ音が鳴る。晴が目を開き、ポケットから取り出したのは携帯だった。彼はその携帯を開き通話

ボタンを押した。

すると晴が何かを言うより先に、携帯の受話器から、

『ぱああああああれええええい！！』

と、こちらまで聞こえる女の子の声が聞こえてきた。

それに晴が顔をしかめ、夕紀が、「なんだ！？」と周りを見回し、  
爽が苦笑した。

「うるさい。ボリリュームを下げると何度言ったら……」

『そんなことより！　なんか死神の魔力の隣に、すごい大きい魔力を感じ……っあ！？　天使の数がどんどん減っていくよ！　パーレイ、これどうなってるの！？』

少女の声は動揺で溢れていた。しかも受話器から、何かが爆発するような音が聞こえてきて、電話の向こうがかなり危険な状況なのが伺える。

「死神の隣に大きな魔力？　そんなものに覚えはないが……」

「契約者だよ」

晴の言葉に爽が答える。しかし晴は馬鹿にしたような顔になって、  
「契約者？　あの人間の、雑魚のことか？」

「そう。……鈴木光矢。死神に恋した哀れな人間　だと思っ  
たんだけど。どうやら人間じゃなかったみたいだね」

「そんなはずはない。あいつからは何の魔力も感じられなかった」  
はずなのだが、と晴は付け加える。それから腕を組み、下を向い  
て何かを考えるように目を閉じる。

その間も携帯からは、少女の叫び声が絶え間なく聞こえてきてい  
た。

それは可笑しな光景だった。

帝が何かを言い終わったと同時に、光矢に向かって鎌が降ってきた。

何かを叫ぼうと口を開きかけたその刹那　自分の左胸には鎌が刺さっていた。

え？　嘘何これ？　という考えが浮かんだが、すぐに激しい痛みに変わる。

「ぐあ……あああああああ！？」

そのあまりの痛さに光矢は絶叫を上げる。

すぐに膝が折れ、地面に膝をつく。倒れる。しかしその間にもとんでもない激痛は続いている。

「あと、あと少しだから！　あと少しで《力》を入れ終わるから……頑張ってくれ！」

帝の声が響くが、もう帝がどんな表情をしているのか分からなかった。普通では考えられないほどの激痛のせいで　いや、普通の生活では心臓を貫かれるなんてことは有り得ないから当たり前なのだが　光矢は意識が無くなり始めていた。

ていうか何で死なないだよ。普通即死だろ。こんなに苦しいのに死ねないなんて。俺は一体何なんだよ、と光矢はぼんやりと思う。理性をこの世に繋ぎ止めておくのがつらい。もういっそ、もういっそという考えが脳裏に浮かんでは消えていく。

「光矢、頼むから！　あともうちょっと！」

帝の声が反響する。意識がもう限界なのか、痛みもあまり感じなくなっていたが、帝の声はやけに鮮明に聞こえた。

まだ、死ぬ訳にはいかない。

「み……か……っ」

「光矢！？　終わったから！　全部終わったから……目開けるよ！」  
ぼんやりと、しかし先ほどよりはしっかりと帝が叫んでいる声が聞こえる。

「う、あ」

小さく呻き、光矢はゆつくりと目を開く。

一番始めに飛び込んできたのは、帝の半泣き顔であった。帝は目を開いた光矢の顔を見るなり笑顔になり、

「光矢！」

と胸に抱きついてくる。

それに光矢は、

「……帝。ってか、なんで俺生きてんだよ」

と言うが、帝は光矢に抱きついたまま答えない。

そんな帝に光矢はため息をついて、帝が抱きついているところより少し上　自分の心臓の部分を見つめる。制服は破れていたが、皮膚にはなんの傷もなく、本当に鎌を刺したのかという疑問も浮かんでくる。

「帝」

「ん？」

「何で傷がなくなって……」

しかしその刹那、帝がいきなり鎌を振り上げた。するとそこに落ちてきた光が鎌に切り裂かれ、四方に散らばる。

光矢は立ち上がり慌てて周りを見回すと、かなりの数の天使が光矢と帝を囲んでいた。

「帝、こりゃちよつとまずいんじゃない……」

「まずいとか言ってる場合じゃないだろ。とりあえず天使を倒すぞ」  
「どうやって？　俺取り扱い説明書がないと駄目」

そう光矢が言いかけた時、光矢の正面の天使が光を放ってきた。青い光を帯びて飛んでくる光。当たったら間違はなく死ぬ邪よこしまな力。しかしそれに光矢は慌てず、飛んでくる光に向かって右手を突き出す。その動作はごくごく自然なものだった。自然に、無意識に、違和感なく、光矢は手を突き出して、

「我、変換の力を身体に構築し」

そう彼が言う度に、彼の体が銀色の光を帯びていく。どんどん光

に包まれていく。

しかしその次の瞬間、青い光は光矢の胸に、足に、肩に刺さっていた。再び襲ってきた激痛に光矢は思わず顔をしかめる。

「光矢!？」

ひどく動揺した帝の声が聞こえてきた。

それに光矢は、全身を貫かれる痛みをこらえながら弱々しく笑みを浮かべて、

「そしてそれを吸収する」

と、小さく呪文の続きを唱えた。

すると光矢に刺さっていた光が、一瞬で消えてしまう。天使のそのそこ高度な魔力が<sup>オーラ</sup>あっさり消えてしまう。

「帝、離れる!」

目の前のあり得ない光景に呆然としている帝に向かって、光矢は怒鳴った。帝は一瞬反応が遅れたものの、すぐにその言葉を守り、その場を飛び去る。

それを確認してから光矢はうなずき、それから天使たちを見る。自分の魔力をあっさり消されたことに怯えているのか、隊列がすっかり崩れている。

そんな天使たちを見ながら、光矢はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「我、今勝利を確信し」

言いながら、今度は両手を突き出す。天使たちに目標を<sup>ヒント</sup>合わせ、両手を突き出しながら、

「今、その力を返還する!」

喉が張り裂けんばかりの大声で《宣言》した。

その刹那、光矢の手が一瞬煌めき、とんでもなく大きな銀色の光の束が放たれた。電流のようなものが<sup>はちがひ</sup>迸り、とんでもない轟音と共に天使たちに向かって一直線に飛んでいく。

ほんの数秒の出来事のはずなのに、光矢にはかなり長い時間のように感じられた。

「……………っ」

やがて手からは何も出なくなつた。しかし光矢の目の前には、もう何もなかった。青い光も天使たちの欠片も、何もかも消えてしまつていた。

何故？ と聞かれれば、光矢がみんな消した、と答えるしかないだろう。

「光矢」

いたたまれない罪悪感に浸りながらその何もない空間を見つめていた光矢に、帝が声をかける。

「みか……」

光矢は何か言葉を返そうと口を開きかけるが、その前に急に意識が消えてしまいそうになる。理由は魔力の使いすぎだな、と混濁する意識の中で光矢は思った。

「ちよつと光……」

「悪い帝。俺、ちよつくら寝るわ」

心配そうな顔の帝に微笑みを浮かべ、光矢は意識を手放した。

「天使たちの魔力が完全に消えちゃった……………本当にどうなつてんの！？」

麗樂は一人で騒ぎながら空き地を歩いていた。

面白いほど何もない空き地を歩く度に彼女のツインテールがゆらゆらと揺れる。そして麗樂は可愛らしい童顔を一所懸命にしかめ、「まさか……………たつた二人で百もの天使に勝つたってこと？ そんなことがあり得る訳な……………」

しかし途中で彼女の言葉は止まってしまった。

前に、何かが居る。

「……うや！……ろよ、なあ！まさか……でんのか！？目を……よ！おい！」

途切れ途切れに聞こえてくる悲鳴。よくよく見れば、一人の青年が倒れていて、その脇に少女が寄り添っている。どうやら叫び声を上げているのは少女の方のようだ。

「あらら、これどうなってんの？どっちが死神？」

と麗樂は独り言を言う。

するとその声で少女が麗樂の存在に気づいたのか、顔を上げる。先ほどまでは見れなかったが、その少女はかなりの美少女だった。短い艶やかな黒髪に、どこか妖艶な雰囲気が出ている黒い瞳。整った目鼻立ちは人間とは思えないほど綺麗で、雪のように白かった。しかしその美少女は、整った顔を警戒させるように強張らせて麗樂を睨み付けてくる。

「誰だ、お前」

必要最低限の言葉だけを吐き出し体に力を溜めていく少女は、何故か谷志野学園の制服を着込んでいた。今気づいたが、倒れている青年も同じく谷志野学園の制服を着込んでいる。

それに麗樂は、

「あなたが、死神？」

「だったら何だよ。そう言うお前は……魔物か？魔物にしては魔力が随分弱いみたいだけど？」

「あたしは契約魔物だから、主が居ない時は弱いんだもん！」

少々ムキになって麗樂は叫ぶ。しかしそれに少女は妖艶な笑みを浮かべて、

「へえ。そんな雑魚が俺に何の用？まさか天使の仲間？」

と聞いてくる。その異常に整った容姿にはどこか馬鹿にしたような表情が浮かんでいる。

それに麗樂は、こみ上げてくる怒りを必死に抑えて、

「違うよ。あたしはあなたを助けに来ただけ」



「何故？ 魔物は死神に關係ないと思うけどなあ」

「知らない。あたしは我が主の命めいのままに生きている」

「はっ、寄生虫風情が言ってくれるじゃないか」

さらに馬鹿にするような声を出した少女は立ち上がる。そのまま倒れている青年を見下ろしてから、

「まあいい。お前も谷志野学園の制服着てるみたいだし。どうせ《あいつ》に命じられたんだろ？ 本当にあいつはいけすかねえよなあ……」

と少女は訳の分からないことを言いながら青年を抱き起こす。身長が自分より大きい男を軽々持ち上げているところを見ると、この少女が死神だということは事実らしい。

「あ、お前名前は？」

ふいに少女が尋ねてきた。小首を傾げて聞くその姿は、人間の常識を覆すほど可憐で可愛らしいものだった。

それに麗樂は何故か敬礼をしてから、

「麗樂、です！」

「そっか。んじゃ、麗樂。俺は帝。際川帝。宜しくな」

と、帝と名乗ったその美少女は、妖しい笑顔を浮かべながら青年を抱きかかえるという器用なことをしていた。

それに麗樂も微笑み、

「とりあえず、谷志野学園に帰ろう！」

と言ったのだった。

空を見上げれば、先ほどまでの曇天が嘘みたいに綺麗な夕焼けが広がっていた。

まるで死神の勝利を祝福するかのよう。

### 第三章・融合と犬猿の二人

「それで、光矢君の能力というのは何なのかな？」

場所は生徒会室。

あくまでも穏やかな口調で、金谷 爽は先ほどの疑問を口にした。

濃い茶色の髪に、栗色の瞳。銀縁の眼鏡をかけていて、知的な雰囲気が出されている。

彼はこの学校の生徒会副会長であり、半分魔物の血が入っている《混血魔族》であった。

そんな人間とはちよつと違う彼に向かって、

「何でお前に言わなくちゃいけないんだよ」

と、恐れ知らずな発言をする人物が一人。

その人物を、爽は見つめる。

短いが艶やかな黒髪に、大きく妖艶な光を放つ瞳。色白な顔。細

身の体には谷志野学園の女子生徒用制服を着用している、美少女。

その少女が、爽に向かって、

「低俗な混血魔族が俺に気安く話しかけるな」

「一応僕も君の救出に協力したんだけどな」

「知るか」

麗しい顔とは裏腹に、男のような言葉遣いをする美少女を見つめ、爽は笑った。

目の前のこの少女 いや、見た目、少女も、人間ではないからだ。

自分よりも地位が高い、通常なら話しかけることすら出来ないような神種、《死神》。

しかし今、自分はその神種と会話をしている！ 人生とは何が起こるか分からないものだ！

心の中で哲学的に言ってみて、思わず爽は笑みを浮かべそうになる。

《天使》たちの横暴には耐えられない、という理由で裏切った混血魔族たちだったが、かの有名な死神の生き残りとお近づきになれるというイベントがついてきて、爽はかなり満足だった。

「おい」

彼が考えに浸っていると、目の前の美少女のような美少年 際川 帝が声をかけてきた。その大きな黒い瞳には、警戒の色が伺える。

だから爽は、見た者全てが安心するような笑みを浮かべ、

「何かな？」

「ニヤニヤすんな、気色悪い」

「これは失礼。ちょっと気分がいいもんでね」

「それは俺に恩を売れたからか？」

「さあどうでしょう」

あくまでも爽やかに爽は言いつつ、顔をしかめる帝から目を逸らし、視線を下に移した。

そこには、一人の青年がソファで横になっている。

茶色に染められた髪に、閉じられている瞳。眠っていても、そこそこ整っていると伺える顔つき。

細身の体には谷志野学園の制服を着込んでいるが、ところどころが裂けていたり汚れていたり、ほとんど原型を留めていない。

そんな青年を見つめ、爽は、

「だがまあ結局、光矢君と契約はしたんだろう？ ……だが、問題はどつやって契約をしたかだ。《死神の悪戯》は確か、契約者の心臓に死神の鎌を突き立てるというやり方だったはず。もちろん人間なら即死だ。しかし光矢君は契約に成功している……これが意味するものは何だろうね」

答えなど返ってこないことは分かっているはずなのに、爽は笑いながら意味あり気に言う。

帝は相変わらず表情を変えないが、その表情が変わる決定打を爽は放った。

「つまり、光矢君が人間じゃなかったってことだ。悪魔か、妖魔の類<sup>たぐい</sup>だろう。いや、彼は妖魔って柄じゃないかな？」

「！？」

爽がその言葉を言った瞬間、帝の表情が少し変わる。目を見開き、体を強張らせ、爽をきつく睨みつける。

「……………だったら？」

短く、しかし威圧感がある声音で言う帝の言葉に対し、爽は再び笑みを浮かべる。

しかしその笑みは、先ほどの優しい笑みではなく、どこか挑戦的なものであった。

「いや、別に」

挑発するように彼が首を振ると、帝はさらに警戒するような顔つきになり、光矢が座っているソファに少しだけ近寄る。

それからまるで守るように、光矢の腕をきつく掴んだ。

契約者には触れさせないってことか。

仲のよろしいことで。

爽が心の中で呑気に感想を述べると同時に、ソファに寝ている人物が身じろぎした。

それは微かな動きだったが、帝はびっくりしたように腕を放す。

「……………ん、あ？」

「光矢っ！？」

茶色の髪を揺らし、薄く目を開いたその青年は、身を乗り出して叫んだ美少女の姿を瞳に捉える。

そして優しい黒い瞳を二、三回まばたきさせ、

「……………みか……………ど？」

「良かった！もう、目が覚めないかと……………っ」

「はは。随分なめられてるなあ、俺」

自嘲気味な笑みを浮かべながら、光矢は肘を付いて体を起こす。

周りを見回す。横にいる爽の姿を見て、首をかしげる。

「あなたは……？　ってか、ここはどこですか……？」

それに爽は柔らかに微笑み、

「あ、自己紹介がまだだったか。僕は金谷爽。混血魔族で、一応君たちの味方ってことになってます。ちなみにここは生徒会室です」

と、おちゃらけた風に言ったはずなのだが、何故か帝はきつく爽を睨みつけ、

「お前のことを仲間と認めたつもりは」

「いや、帝。この人、なんかいい人そうだし、いんじゃないかな？」

「ああ、もう！　光矢はとんだお人好しだな！　今さっきいつは

」

そう言いかけて、帝は口を嚙む。本人がいる前でこの会話はタブーだと判断したのだろうが、その決断はちょっと遅い。

「光矢君、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ」

「なんですか？　……あ、能力については俺も分からないんで、帝に聞いて下さいね？」

「うん、違って。まあそれを知りたいんだけどさ……ぶっちゃけた話、君は契約する前から人間じゃなかつ」

「黙れよ！」

横から、帝が叫ぶ。そして立ち上がり、光矢の腕を掴む。

「光矢、戻ろ？　こんな奴と会話する必要なんてっ」

言いかけた帝の体が、ぐらりと揺れる。慌てて帝は踏みとどまるが、その足元はどこかおぼつかない。

「こらこら帝。お前も俺に魔力あげちゃって力があまりないんだから、無理するなよ」

「むうう……もう、魔力まで見えるようになった訳？」

「まあ、そこそこは」

そんな会話をしながら、光矢は帝をソファに座らせる。そしてそれから、爽の方を振り返ってくる。

「金谷さん……でしたっけ」

「爽でいいよ」

「じゃあ、爽さん。お望みなら答えますよ。でも、そのために帝を利用しようとするの、止めてもらえますか？ あなたの魔力を見た限り、いくら帝と俺が弱っていても太刀打ち出来ないように見えますけど」

落ち着きはらって言う青年は、もう前とは少し性格が違うらしい。それに帝が驚いたような表情になり、

「光矢……なんか格好よくなってねえ？」

「今全力で飛び跳ねたいほど嬉しいけど、ちよつと待っててな帝」  
そんな惚気たことを言いながらも、光矢の警戒の瞳は爽を射抜く。前のように、ヘラヘラ笑っているだけの人間とは違う。

そんな青年に向かって、爽はにこりと微笑む。

そして小さく、

「分かったよ」

とうなずいた。

すると相手も納得してくれたのか、うなずき返してくる。

そして警戒していた表情から、人の良さそうな笑顔へと変わり、

「ありがとうございます。……じゃあ説明しますね、俺のこと」

「よろしく」

緊張しているのか、帝の表情は少しだけ堅い。

しかしそれとは裏腹に、光矢はあくまでも柔らかい表情で、

「確かにあなたの言う通り、俺は人間じゃなかったんです。俺自身もよくわからないんですけど、どうやら」

そこで光矢は一回言葉を切り、帝の方を向く。

すると帝も光矢の方を向き、しかしすぐに顔を伏せる。

それに光矢は、再び視線を爽に移し、

「……どうやら、帝が前に恋仲だった、レミという悪魔の生まれ変わりみたいなんです」

「……君がかい？」

「はい」

光矢はこくりと頷く。

それに爽は、難しい顔をして腕を組む。

悪魔。神種の中では低い地位の化け物で、通常なら死神に会うことすら許されないはずだった。

それが、恋仲にまで発展するとは。

「色々あつたんだね、君も」

帝に視線を移し、爽はそんなことを言う。それに帝も曖昧な笑みを浮かべて肩をすくめる。

「つまり……悪魔の治癒能力を借りて《死神の悪戯》をし、あの場を切り抜けたってことかい？」

「そう……なるのか？」

光矢は隣の帝を見てそう聞く。その言葉に帝は小さく頷き、「うん。光矢の中にいるレミが出てきて、それで俺にキ……」

「キ？」

「……や、なんでもない」

苦笑いを浮かべながら帝は首を横に振った。

「と、とにかくそういうことだから」

不思議そうな顔をした光矢の肩を叩き、帝はそう爽に言う。

「なるほどね。……それで、光矢君はもうその力を使いこなし」

そう言いかけた爽の言葉は、電子音で遮られる。

光矢は咄嗟に自分のポケットをまさぐる。帝も同じように携帯を取りだし、首を振る。

「ああ、失礼」

爽は自身の携帯を取り出し、少し顔を背けて通話ボタンを押す。

「もしも」

『残念なお知らせだ』

聞き覚えがある低い声が、爽の言葉を遮り携帯から響いてきた。それに爽は首を傾げ、

「……晴？」

『ああ。まずいことが起きた』  
起きた。過去形だ。

嫌な予感が走り、晴は顔をしかめながら、  
「……何があつたの？」

『猛獣が脱走した』

「……は？」

そんな、思わず間抜けな声を出してしまった爽。だが、電話の相手の主はそんなことなど気にしていない様子で、さらに続ける。

『今、かなりのスピードでそちらに向かっている。麗樂を使って足止めはさせているが、いつまで持つか分からない』

「ま、待つて。猛獣って何……」

『死神に伝えろ。今すぐ逃げろ、とな』  
「待つ」

爽の叫びを無視し、通話が遮断される。「ツーツー」という無情な音が爽の耳を打つ。

「どうしたんですか？」

携帯を閉じた爽に、光矢は聞く。

それに爽は答えず、帝の方に視線を向けた。

「逃げろ、だそうだよ」

「……どうということ？」

「いや、僕にもよく分からないんだけど……」

とにかく場所を移動しよう、と爽が言いかけた  
その瞬間だった。

生徒会室のドアが破壊され、それが一直線に帝の方へと飛んできた。

「どけ光矢！」



激しい帝の叫び声と共に、光矢は横へと大きく飛んだ。まだ契約の力を解放していないというのに、すでに人間離れた動き。

一方帝は、いつの間にか取り出していた鎌を振り上げ、迫ってくるドアに向かって放つ。

その刹那。ドアが原型を留めないほどに切り裂かれ、生徒会室の床に破片が突き刺さる。

その全てが一瞬の出来事で、そのまりの非日常さに、半分人外なはずの爽も思わず苦笑した。

「帝！」

「分かってるよ！」

光矢の叫びに強い口調で言い返した帝は、そのまま光矢の元へと駆けつける。

ドアや、その周りの壁が破壊された衝撃で煙が立ち込めている光景を見つめ、光矢は、

「契約を解除した方がいいんじゃないの？」

「うん。ただ、あれはかなり契約者に負担がかかるから、雑魚程度なら極力使いたくないんだけど」

帝はそんなことを言い、ドアが破壊された方角に向かって、鎌を構える。口角がゆるりと弧を描き、挑戦的で妖艶な笑みを浮かべる。

「君もそう思うよね？ …… 夕紀会長」

そう言つて帝は、クスクスと馬鹿にしたような笑いをする。

それに光矢が首を傾げたと同時に、

「…………… うるせえんだよ、悪魔が」

かなり低い、不機嫌そうな声が煙の中から聞こえてきた。

その悪魔、という単語に、光矢が少しだけ反応を見せる。ピクリと体を揺らし、目を細めて煙の向こう側を睨み付けた。

爽には一瞬だけ、彼の黒い瞳が金色に見えたような気がした。

「嫌だな。俺は悪魔じゃなくて死神だよ、夕紀会長」

「うるせえ……………」

そんな声と共に、煙の向こうから、一人の青年が現れた。

不良が多い谷志野学園の中でさえかなり目立つ深紅の髪に、切れ長な黒い瞳。かなりの上背からは殺気が滲み出っていて、もはや人間ではなくなってしまうた光矢でさえ、若干震えるほどである。

「生徒、会長」

呆然、といった声音で光矢は呟く。

谷志野学園高等部生徒会長　岩井　夕紀。

容姿端麗、成績優秀、そして喧嘩最強だと有名であった。少なくとも、およそ平凡な暮らしをしていた光矢には程遠い存在で。

しかし今その有名人が、生徒会のドアを破壊して自らの主と睨み合っている、という光景がいまいち理解出来ず、光矢は思わず口をぽかんと開けて突っ立っていた。

「久しぶりだな……帝君よお」

ひく、という音がしっくりくる笑みを浮かべながら、帝の方へゆっくりと近寄ってくる夕紀。

そしてそれを見てもなお余裕そうな笑顔の帝。

そんな二人を見つめ、光矢は帝に問う。

「帝、生徒会長と知り合いな訳？」

「ん？　知り合い？」

「だって仲良さげ……って訳じゃないけど、なんか知り合いそうだったからさ」

夕紀と帝を交互に見比べてから、光矢は遠慮がちに言葉を紡ぐ。

しかしそれに帝は、

「あはは！　こりゃ傑作だね！　知り合いだつてさ！」

何が面白いのか、帝は体をのけぞらせて大袈裟に笑う。気のせいかもしれないが、いつもよりしゃべり方が皮肉っぽい。またもやクスクスと笑いながらも、目の前で自分を睨み付けてくる生徒会長を見つめ、

「彼は精霊。天使の仲間で、遠距離系魔法をよく使う精霊の一人で、精霊には珍しい反神様組織のリーダーだよ」

と、帝は言ったのだった。



## 神嫌いと神気取りと変人

それは一ヶ月ほど前のことだった。

生徒会長という役柄を手に入れた代償として、やらなくてはならない仕事を、岩井 夕紀はやっていた。

「ああ、めんどくせえ」

燃えるような赤髪に、鋭い光を放つ黒い瞳。生徒会長というよりは不良グループの総長といった方が相応しいだろう。

まあ、赤髪という時点で生徒会長には相応しくないのだろうが、当の夕紀には、そんなものにまるで興味はない。

彼にとつて、下位種の人間の常識などどうだっていいのだから。

### 精霊。

天使と同じく、人間には神に仕える神聖な生き物として扱われているが、実は天使と同等な、神に媚びへつらうだけの種族。

魔力が大きいだけで、ろくに使うことのできない、欠陥だらけの種族。

そんな精霊に生まれてきてしまった彼だったが、ただ一つだけ、他の精霊たちとは異なることがあった。

「あー、もう無理だな。神なんか死んじまえ」

神を信仰するか、否か。

信仰、といつても、人間の解釈とは少し違う。

神のために他の種族を生け贄に捧げる、なんていう馬鹿げたことをしている精霊のルールに、従うか従わないか、という意味だ。

彼の答えは、「従わない」。

もちろんそんなことを他の精霊が許すはずもなく、何度か拷問してみたことをされ、殺されかけていた。

だから彼は、逃げたのだ。

神界を出て、人間界に落ち、そこで暮らしていた。

先日噂で、死神が滅びたという話を聞いたが、

「もう、どうでもいいしな」

夕紀には、まるで興味がなかった。

今、彼の興味は、目の前の書類をどう片付けるかということだけで。

「どうすつか……とりあえず体育祭の参加種目選択の用紙をコピーして、それから教師に提出用の紙の下書きを……」

そんなことを言いかけた彼の言葉は、静まった部屋によく響くコンコンツというドアをノックする乾いた音に書き消された。

その音に夕紀は顔を上げ、

「誰だ？」

思わず呟いた。

今の時刻は午後六時。教師に特別に許可をもらい、居残りで作業していた彼の他に生徒がいるはずがなかった。

しかし教師も全員帰っていたはずだし、生徒会役員である金谷爽も、先ほど帰ったはずだ。

ノックが誰なのか検討もつかない夕紀は、ドアの方向に向かって、誰だ？ と声を上げようとする。

しかしその前に、ドアがゆつくりと、通常では考えられないほどにゆつくりと開いた。

そして外から部屋に入ってきた人物に向かって、夕紀は短く、

「誰だ、お前」

そう相手に問う。

その人物は、学校の関係者でもなければ、知り合いでもなかった。

美少女。

そう形容するのが妥当な、少女だった。

艶やかな短い黒髪に、大きく妖艶な光を放つ黒い瞳。人間とは思えないほど白い肌。薄く形のいい唇。細身の体には、オタク受けしそうなダボダボパーカーにショートパンツ、以上に長いブーツという服装を着込んでいて、どこからどう見ても完璧すぎる美少女であった。

その美少女が、夕紀の姿を見るなり、微笑んでくる。この世のものとは思えないほど妖艶に、微笑んできて、それに夕紀は思わず見とれかけてしまった。

すると美少女は、おもむろに口を開き、言う。

「俺？ 俺はねえ……死神、かな」

そんな、冗談としか受けとれないことを、美少女は言う。  
しかし夕紀は、その言葉が冗談ではないことを知っている。

死神。

もう滅びたとかいう、神の次にたちが悪い化物であった。

見目麗しい少女は、自らを死神と名乗った。

もちろん頭がおかしいだけの、ただの人間の可能性もあるのだが、そんな思考を展開してから夕紀は、笑っている美少女を睨み付け、  
「……ここは精神病院じゃない」

と、言った。

これはフェイクだ。

もし通じないようならば、完全に人間の精神障害者だろう。

だがもし、ちゃんとした会話が出来るのであれば

「失礼な精霊だな。………殺しちゃうよ？」

美少女は夕紀の思考を遮り、そんなことを低い声音で言う。

それに夕紀が反応を返そうとしたと同時に、美少女の足は地を蹴った。

「んなつ」

たった一步で距離をつめ、美少女はどこから取り出した鎖鎌で夕紀の首を薙ごうとする。

「くっ」

夕紀はあわててその場を飛び退くと、置いてあるミニテーブルの上に乱暴に着地し、またもう一步後ろに下がる。

「甘いよ」

しかし美少女は、鎖鎌の鎖を、夕紀に向かって放ってくる。  
こちらへと迫ってくる鎖。

その鎖に捕まったら殺されること間違いなしなので、

「あああくそがつ!？」

夕紀は無理な体勢のまま、飛ぶ。受け身に失敗し、激しい痛みと共に床を転がる。

「はい、俺の勝ち」

夕紀が慌てて体を起こすと、美少女はこちらに向かって手を突き出していた。

《呪い》のプロモーションだ。

瞬時にそう判断した夕紀は、

「……………くそっ」

小さくうめくと、呪いを止めるべく、美少女の方へと走ろうとする。

しかし美少女は、向かってくる夕紀を見ながらもなお余裕そうに笑みを浮かべながら、ゆったりとした動作で指を鳴らした。

パチンツという乾いた音が響いた瞬間、夕紀を取り巻く空気の仕組みが変わった。

「ぐ、あ」

上からなにかが覆い被さったような感覚が夕紀の体を襲い、夕紀は地面に叩きつけられる。

「重力アタック」

わはは、と馬鹿にしたように笑いながら、美少女は倒れている夕紀のところにやってくる。

夕紀は、自分を見下ろしてくる死神の姿を見上げ、

「ふざけんなよ、てめえ……」

「え、ふざけた覚えはないよ？ これはお遊びだからね」

「は、ぬけぬけと」

そう毒を吐いた夕紀の隣にしゃがんできた美少女は、相変わらず妖艶な笑みを浮かべたまま、

「おい、あんまり調子のると……殺しちゃうよ？ どっちが優位に立ってるか、分からない訳じゃないだろ？」

とか、言ってきて。

それに思わず夕紀が黙り込むと、美少女はわざとらしく肩をすくめながら、

「《呪い》を撃たなかっただけ、感謝しなよ。普通あのタイミングで突っ込んでくる？」

「情けのつもりかよ」

「俺だって魔術ぐらいいは使えるもんねーだ」

クスクスと愉快そうに微笑みながら、美少女はもう一回、パチンと指を鳴らす。

それと同時に、夕紀の上に被さっていた重力の魔術が、消えた。

「俺のが君より強い……って分かった上で話すけど」

夕紀が起き上がると、美少女はそんなことを言いながら、壁へと体を預ける。

「……君にお願いがあるんだよ。夕紀会長」

「名前と呼ぶな。それと、お願いというよりは命令だろ」

「……ま、そんなもんかな」

あっさりと認めた美少女は、体を壁から起こし、夕紀の目の前に立つ。

自分より身長が高い夕紀を見上げ、

「……俺は際川帝。死神の一人。ちなみに人間の性別上は男。なにが質問は？」

ペラペラと話す美少女の言葉に、夕紀は頭がついて行かなかったが、やがて小さくうなずくと、

「……………男？」

「そう、男」

またしてもあっさりと、美少女　いや、美少年の帝はうなずく。それに夕紀は呆れたような、それでいて若干恐怖するような顔で帝を数秒間眺め、

「……………」

しかし何も言わなかった。



その夕紀の様子に、帝は満足そうに微笑んでから、

「君は理解が早くて助かるよ。俺がこういうと大半の奴らは信じないからね」

「いや、俺も完全に信じた訳じゃねえけどな」

夕紀のささやかな反撃を無視し、美少女のナリをした死神は続ける。

「んじゃ、そんな夕紀会長に命令です」

「結局命令かよ」

「ま、きいてくれなかったら殺すんだけどね」

「そうかい。さすがは死神様だな」

馬鹿にした声音で夕紀は言う。もしかしたら殺されるかもしれないな、なんて思ったが、意外にも死神は冷静に、

「だから俺らは、誰でも命を奪う訳じゃないよ。一部の哀れな人間だけ」

と、返事を返した。そしてそのまま、話を進めたいんだけど、と夕紀を睨む。

それに夕紀は、曖昧な表情で肩をすくめるだけだった。

「命令っていうのは、簡単なことだよ」

帝は、再び顔に笑みを貼り付けて言う。

「俺をこの学校に入学させて欲しいだけ」

「……死神が人間の何を学ばっていうんだよ」

「別にいいでしょ、なんだって。ただ気になる奴がこの学校にいるだけだし」

「気になる奴？」

死神が恋でもしたのかよ、と心の中で毒づく夕紀だったが、帝はそんな夕紀の考えを見透したように、

「恋心って訳じゃないよ。ただ、昔の……親友に似てただけ」

「そんな理由でわざわざお前がこの学校に来んのか？　なんか企んでないだろうな」

「さあね」

返ってきた帝の言葉に、この学校の代表である精霊は小さくため息をついた。

普通なら、自分にこんな偉そうな態度をとる輩は全員叩き潰すのが彼のやり方だが、自分より強い死神という種族には、その選択肢は適用されないらしい。

机の中に入学手続きの紙があつたかを思い出しながら、彼は不満そうな表情で帝に言った。

「てめえ、俺が管理する学校の生徒になんかしたら、ただじゃ済まねえからな」

見た目は天使のような死神は、挑戦的な視線を夕紀に向け、そしてさらに笑みを深くした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3601m/>

---

死神ハニートラップ

2011年5月20日23時25分発行